
Then LonelyGirl Dreams of Wonderful Hero!

烏口泣鳴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The n Lonely Girl Dreams of Wonderful Hero!

【Nコード】

N3396Z

【作者名】

烏口泣鳴

【あらすじ】

内気で臆病で引つ込み思案で後向きな少女、法子はある日落ちていた日本刀の力で魔法少女となる。喜び勇んで魔物退治へ出かける法子だが……。

少女は英雄になる事が出来るのか。

『孤独な魔法少女は英雄になれるか?』の第一部を切り離して、単体として完結させたものです。

この小説は *arcadia* にも掲載させていただいております。

頭上には空を埋め尽くす夥しい光が輝いている。人を磨滅させんとする光群を少女は見つめ、笑う。

眼前には天を摩す様な黒い巨体が居る。その怪獣映画にでも出てきそうな暴力的な姿を見つめ、少女は笑う。

私はここで死ぬだろう。代わりに英雄となれる。

少女は刀の柄に手をかけた。今迄の人生を振り返る。そして死を思う。何の感慨も無い。けれど顔には笑みが張り付いている。

頭上から破壊の力を込めた光が降り注ぐ。

それを合図に駆け出した。

孤独な魔法少女が英雄となる為に。

変身願望は誰もが持っているありきたりな願いの一つだ。誰かになりたい。何かになりたい。何かをしたい。何かを変えたい。現実への不満は多少なりとも変身に繋がる。

変えたい。変わりたい。努力の伴わぬそれらの願いは時に現実逃避と蔑まれるが、その愚かさが時に世界を変える。断じて言おう。何かに変わりたいと願うあなたの変身願望は崇高な物である。

ここにもそんな変身願望を持った者が居る。名を十八娘法子という。何処にでも居る中学生である。ごくありきたりの世界に囲まれてごくありきたりの生活を送っている。姓が些か特殊なのがコンプレックスの一つで、周囲の注目以上の注目を感じてしまつて怯えている。いつも苗字を呼ばれる度に小さくなる。名が地味なのも気にしていてもつと良い名前にしたいと思つている。

彼女は常日頃から自分を変えたいと願つている。名前もそうであるし、性格ももっと明るくなりたいし、小学生に間違われる事の多いこの顔や体ももう少し大人びたつていいんじゃないかと思つてい

るし、もつと周囲と上手く付き合いたいと思っているし、そして何より何だか満たされない。何か変わって欲しいと願っている。珍しくもない一クラスに一人はいる内気な少女だ。

前述した変身願望をこれでもかという位に持っている。それもまた珍しい事では無い。一つだけ違うのは、その変身願望を極端な形で叶える事になる、この一点に尽きる。

そう彼女は魔法少女となる。

町に魔物が出現した。そうニュースで報じていた。魔物は魔女っ娘を名乗る変身ヒーローに倒されて事なきを得たという。

法子は朝ごはんそっちのけてそのよくあるニュースに聞き入っていた。あまりにもテレビに集中しすぎて口に運ぼうとしたごはんが箸からこぼれて茶碗の中に落ちた。

「良いなあ」

一方、弟は目を輝かせて物欲しそうな顔でテレビに釘づけられている姉を見てうんざりと溜息を吐いた。

「そんなに魔法少女になりたい訳？」

聞くまでも無い。法子は常日頃から願っている。

「勿論なりたい」

「どうでも良いけどさあ。チャンネル変えない？ 俺、野球の結果知りたいんだけど」

法子はそんな言葉を無視して画面の中で丈の短いドレスの様な衣装を着て皆の喝采に頭を下げている女の子から目を離せずにした。

「私もなりたくないなあ」

「止めてよマジで。ガキじゃないんだから」

「小学生のあんたに言われたくないんですけど」

「精神年齢の方。俺、来年から姉ちゃんと同じ中学校に行くんだからさ、変な事して俺に恥かかせないでよ」

「あんたはなりたくないの？」

「変身ヒーロー？ もう卒業したよ」

「楽しそうじゃん。姉弟で魔法少女とか絶対に人気出るよ」

「ちよつとやめるよ。何で俺が女の格好しなくちゃいけないんだよ」
テレビの画面には男性が着るには恥ずかしい衣装を着た少女が喝采の中去っていくところ映っている。

法子はしばらくテレビと弟を交互に見てから真剣な表情でごはんを飲み込んだ。

「いける」

「絶対嫌だからな！」

憤慨する弟を余所に、法子は魔法少女を夢見たまま、学校へと向かった。

学校へ行くと、教室の一角で女子達が盛り上がっていた。

法子はその様子に一瞥をくれてから、まるで興味の無い振りをしつつ席に向かい、未練がましく耳だけは傍だたせて自分の席に坐った。昨日から読み始めた小説を開いて文字に目を滑らせながら、聞こえてくる会話に集中する。

どうやら週末にサッカー部の練習試合があるから応援に行こうという話らしい。何だそんな事かと、法子は聞き耳を打ち切った。下らないなあと思う。もう少しましな話は出来ないのだろうかと思う。けれど少しだけ羨ましく思う。あんなに他愛の無い話で盛り上がれて良いなあと思う。

小説を読み、授業が始まり、授業を受けて、休み時間になって、小説を呼んで、授業を受けて、それを繰り返して、お昼ご飯を一人で食べて、また小説と授業を繰り返して、そうして学校が終わる。部活も何も所属していないので家に帰る。下校する時はなるべく沢山の人に紛れて、一人で帰っている事に違和感を持たれない様にする。

友達が居ないので、たった一人で帰る帰り道。特にこれといった用事も無いので、毎日真っ直ぐ家に帰る。時たまそれが寂しくなるでもすぐにこう思う。それでも私はいじめられていないと。他のク

ラスではいじめがあるらしい。世の中にはいじめの話で溢れている。法子は自分が一つ間違えれば容易にいじめの対象になる事を自覚していた。それでもいじめられていない自分は、いじめられている人々に比べてまともなんだと法子はそう思う。

けれど今日は学校で読んだ小説を思い出してしまった。主人公が学校で友達と仲良くしている場面を思い出して、少し落ち込んでしまう。小説の主人公にはあんなに沢山の友達が居るのに、私の周りに友達が居ない。毎日毎日、家で本を読んで、漫画を読んで、テレビを見て、ゲームをして、学校に行けば早く終わって欲しいと願ってじつと本を読んで授業を受けて、中学校に上がる際に何かと入り様だろうと買ってもらった携帯は全く使う機会が無くて。そんな事をつらつらと考えて、最後にやっぱり自分は駄目人間なんだと結論付けた。嫌になって思考を打ち切って、顔を上げた。

道端で犬が輪を作っていた。何だか唸り声を上げている。良い雰囲気じゃない。

犬同士の喧嘩だろうか。遠くで良く見えない。もしかしたら小さな子供が襲われているのかも。そう思うと急に寒気がした。見過ごして帰った後に実は子供が襲われていたのだと分かって、それで子供が死んだと分かったら。そんな事を考えると怖かった。

追い払わなくちゃ。そう思って止めに入ろうとするが、どの犬も凶暴そうな顔をしている事に怖気づいて、結局法子は出来るだけ離れて遠巻きにして素通りする事に決めた。ただの犬同士のけんかである事を祈りながら。

法子が目を閉じながら逃げ去ろうとしていると、犬が吠えた。法子は怯えて立ち止まる。その脇を犬達が走り去っていった。犬達の居た場所を見ると、犬達は居なくなっていた。

そこに生き物が落ちていた。犬に隠れていた所為で見えなかった生き物。きつと犬にいじめられたのだろう。蹲って震えている。

法子は一瞬戸惑った。助けてあげたかったが、幾ら小さくても野良の生き物だ。怪我でも付けられて変な病気にかかったら堪らない。

やっぱりこのまま通り過ぎようかと歩き出して、しばらく歩いて、それからやっぱり見捨てる事が出来なくて駆け戻った。

蹲る生き物の傍で屈みこんで、その体に手を伸ばす。

ぐぐと地の底から響く様な低音がその生き物から発せられた。

「え？」

法子が思わず手を離すと、生き物はその小さな身を起こして法子を見上げた。

紫色の目をした犬の様な生き物。唸り声をあげ、歯を軋らせ、法子の事を睨みつけてくる。

魔物だ。

咄嗟にそう判断して、法子が慌てて立ち上がって身を引いた。魔物は人を襲う。そのほとんどは風の悪戯の様な些細な事しか出来ないけれど、偶に力を持っているのもいる。それこそ人を殺してしまえる様なのも現れると聞いていた。

魔物に出会ったらどうすれば良いのか。子供達は周囲の大人達に耳にタコが出来る程聞かされている。

逃げる。

逃げて大人の居る所へ行け。

法子は親から言われている通りに魔物から逃げる為に駆け出した。それが子供達に教えられる対処法。根本的な解決ではないけれど一定の効果を上げる教えだが、今回はまるで役に立たなかった。

魔物の足は法子よりも早く、疾風のように法子へ襲いかかり、その身を倒した。地面に倒された法子はいずれながら、後ろを振り向く。目の前にゴムの様に伸びて大きくなった口が迫っていた。

殺される。しりもちをついたまま後ずさるが、当然逃げられない。魔物はまるでいたぶる様に少しずつその口を近付けてくる。

殺される。再度そう思った時に、力が湧いた。勢いよく立ちあがって、魔物から少しでも離れる為に、駆け出そうとして　すぐさま魔物に飛び掛かれて、また倒れた。何とか逃げようとする法子の頭を魔物は足で押さえつけて、今度こそ牙を法子へと突き立てよ

うとした。

法子は背面に違和感が走ったのを感じて死を覚悟した。更に背中に熱が行き渡る。噛まれたのだと思って、思わず振り返った。

魔物が居なくなっていた。辺りを見回すと、離れた場所で魔物が横たわっていた。

法子は訳が分からずに呆然としてしていると、何者かが目の前にふわりと軽やかに着地した。丈の短いドレスの様な真白い衣装を着て、頭に奇妙な髪飾りを付け、肩に見た事も無い生き物を乗せた女の子が法子に向かって手を差し伸べて笑いかけてきた。

「怪我はない？」

法子が呆けていると、女の子は法子の体を見回して、

「ああ、ちよつと擦りむいてるね」

そう言つて、手に持っていたステッキを振った。たちまち法子は光に包まれて、一瞬後には傷が全て消えていた。

「これで大丈夫」

女の子は法子に背を向け、魔物を見据えて、そうして親しげに笑う。

「君も怖かったんだよね。だからこんな事をしちゃったんだよね」
諭す様にそう言つてステッキを構えた。

「今帰してあげるから」

ステッキが振られると、魔物の足元に光の円が描かれた。もう一度ステッキを振ると円の周りから光の蔭が伸びて、一瞬の内に複雑な模様を描き始め、それは中空へと伸びあがり、複雑な模様を

それは良く見れば異形の者達が行進する絵だった。描きながら魔物を包みあげ、再び少女がステッキをふるうと、一瞬爆発的に輝いて、光が収まった時には魔法円も魔物も消え去っていた。

「あなたは誰？」

法子は思わずそう聞いていた。瞬く間に魔物を消し去った少女は一体何者だろう。

「私？ 私は」

一瞬言葉が途切れ、顔を赤らめてから、
「名乗る程のものじゃございません！」

大きな声でそう言い切って、少女は跳躍して民家の屋根の向こうに消えていった。

すぐに世界はしんと静まって、一瞬前の事が嘘の様に辺りは平穏な日常に戻っていた。空は暮れに向けて少しずつ熟れ始めていた。法子はしばらく少女の消えた先をぼんやりと見てから呟いた。

「魔法少女に助けられちゃった」

法子はゆっくりと立ち上がって、危なっかしい足取りですぐそばの小さな公園に向かった。そこは丁度生活圏の奥まった場所にあつて、人の通らない道に囲まれていて、余程何か無いと誰も来ない公園だ。ある時偶然見つけてからお気に入りの場所になっていた。

今日もまた古びたブランコに腰かけて、ぼんやりと宙を見つめた。心の中が興奮で荒れ狂っていた。魔物に襲われ命を失いそうだった事。初めて見た変身ヒーローに助けられた事。何だかファンタジーの世界が自分の身近に迫っている気がしていた。

風が吹いて砂が舞った。舞った砂が目に入って、思わず目を閉じて瞬きをして、涙と共に流れ出したのを確認してから目を開くと、公園の隅の生垣の下に何かが落ちていている事に気が付いた。

刀　　の様に見えた。

でもまさかと思つて、近寄ってみると、それは紛う事無き日本刀だった。初めて見た刀は思っていたよりずっと大きかった。

何でこんな所に刀が落ちているのか。疑問よりも先に期待と好奇心が湧いて、そつと触れてみた。

金属の冷たい感触が伝わって来た。

「君が私の主か」

「ひえ」

頭の中に突然声が流れてきて、法子は思わずしりもちをついて、辺りを見回した。だが辺りには誰も居ない。普通の人であれば辺りをもつとよく探すところだが、法子は違った。今迄見てきたフィク

シヨンの知識からすぐさま声の正体は刀であると見当づけて、再び今度は勢いよく刀を掴んだ。

「どういう経緯で私を手に入れたのか知らないが、まずは自己紹介から始めよう。君は私の名を知っているかもしれないが、私は君の事をまるつきり知らないんだから」

再び頭の中に声が流れてくる。

「あなた刀なの？」

法子は試しにそう思い浮かべてみた。

「その通りだけれど、もしかして君は私の事を良く知らないのかな？」

「まるつきり」

刀が笑った そんな印象が法子の頭の中に流れ込んで来た。

「まるつきり知らないのに、そんなに慣れた様子で私と話しているのか。時代は変わったな。魔術が開陳されたとは聞いていたが、ここまで慣れ親しんでいるとは」

「多分、私が特殊なだけ。漫画とかであなたみたいな存在には慣れているから」

「ほう。良く分からないが、君は何か特殊な役職にでもついているという事かな？」

「そういう訳じゃないんだけど」

「そうなのか？ とにかく説明の手間が省けるのは助かる。では早速だ。誓いを交わそう」

法子の思考よりも先へ話を持っていきこうとする刀に驚いて、法子は刀を強く握り、頭の中で必死に刀を押し止めた。

「待って。私が知ってるのは、あなたみたいに無機物が頭の中に語りかけてくる可能性だけ。あなたがどんなものなのかは、さっき言った通り何にも知らないよ」

「なら説明しなくてはならない訳か？」

「うん」

「そうか。私はどうにもこの最初の邂逅が苦手なんだが」

何やら愚痴りつつ、刀は面倒そうに聞いてきた。

「何から話せばいいかな？」

「それじゃあ、あなたの目的とあなたが私に何を求めているのかとそれに対して私が何をすればいいのかを教えて」

一体どんな事を要求してくるんだろう。何か無茶な事を言われるかもしれない。魂を差し出せと言われたらどうだろう。でも今の底なし沼にゆっくりと沈んでいく様な生活よりも刀の無茶な要求に身を破滅させた方が幸せかもしれない。不安半分、期待半分、でもどちらにせよ絶望的な想像を抱きながら刀の返答を待つが中々返ってこない。どうしたのだろうと訝しんでいると、刀が驚いた様子で賞賛をあげた。

「素晴らしいな。こういう時、大抵の人間は混乱して面倒な事になるんだが、君はとても冷静に事態を把握しようとしている」

素直な賞賛に法子は何だか恥ずかしくなった。考えてみれば褒められたのは久しぶりだ。歯がゆかった。照れ隠しにぶっきらぼうな口調になる。

「そんな事より、私の質問に答えてよ」

「ああ、そうだったな」

刀の言葉が頭に流れてくる。

「目的は、何となくだな。君に求めているのは魔女になって貰う事だ。君は魔女になってくれればいい」

「魔女？」

「魔女だ。抵抗があるかね？ まあ、そうだろう。迫害される身だが本来魔女というのは人を救う身であるという事だけは知っていてほしい」

刀の言葉は法子の頭の中を素通りしていった。法子はまさかという期待で一杯になっていた。まさか。まさか。だが早とちりはいけない。そう、まだ分からない。まだ魔法少女になれるとは限らない。「魔女って言うのは、魔女？」

「何を良いのか分からないが、強大な魔力を持つ女性くらいのイ

メージで良い」

「魔女になるって言うのは、もしかして悪魔と……そのエッチするの？」

「いや、そんな事はしない。どうも魔女はあの暗黒時代に作られたイメージが強くていけないな。魔女になるのはとても簡単さ。私を携えて、魔女になると願えばそれだけでなれる」

法子の心臓がはねた。これは。

「魔女になって何をさせたいの？」

「それは君の勝手だけれど、そうだな、人助けでもしてくれれば言う事は無い」

まさか。

「魔女つて黒いローブを着た？」

「それは君のイメージに囚る。もっと言えば、私の来歴と君の魔女に対する想像が混ざり合った形になる」

「変身するって言う事？」

「まあ、そうだね。そんな劇的な変化はしないけど。精々髪型や服装が変わる位だな。絶世の美女にはなれないから期待はし過ぎないでくれ」

何となく失礼な事を言われた気もするけれど、法子にとってはそんな事もうどうでも良かった。

「やっぱりだ！ やっぱり変身ヒーロー、魔女っ娘、魔法少女になれるんだ！」

「変身ヒーローか言い得て妙だな」

法子の思考を読み取って刀が答えた。確定だ。魔法少女になれる。「その魔法少女というのは良く分からないな。今の時代は皆魔法が使えると聞いていたが」

「そういうんじゃないの。魔法少女は魔法少女なの。変身して人を助ける正義の味方なの！」

法子の興奮した思念に刀は当てられた様だった。しばらく黙り込んでから、ようやくと喋る声音は弱々しく辟易していた。

「まあ、良い。喜んでくれたのならね。どうだい？ その魔法少女とやらになる為にも、私と誓いを交わさないか？」

「交わす交わす！」

法子が大きく首を振ると、刀から笑う様な気配が伝わって来た。

「では誓ってもらおう」

「誓います！」

「早いよ。まずは君の名前を教えてください」

「十八娘法子」

自分の名前にコンプレックスを持つ法子は恥ずかしげに答えた。

そして恥ずかしさを払拭しようと間を置かず質問を返す。

「それじゃあ、あなたの名前は？」

「私は無銘だ」

「そうなんだ」

「さて、法子、良いかい？ 魔女とは迫害される存在だ。それでも君は魔女となり魔女として生きる事を誓えるかい？」

何だそんな事か。刀は今の世の中をあまり知らない様なので勘違いしている。そう今の魔女は、魔法少女は皆から好かれ愛され望まれる人気者なのだ。全くもって迷う必要が無い。

法子はそう考えてにんまりとして答えた。

「勿論誓います」

「そうか」

刀がぽんという炭酸を抜いた様な音を立てて法子の指先に乗る位に小さくなった。

「私が大きいままだと何かと不便だろう。小さくなったから常に肌身離さず持って置く様に」

法子は刀を握りしめて口を尖らせる。

「それより、どうしたら変身できるの？ 早く変身したい」

「駄目だ。私の魔術は君の生命エネルギーを使うんだ。使いすぎれば寿命が縮む。無駄な時には使わない様にしなければならい」

「えー」

法子が不満げに呻いた。

「あのだね、私は私利私欲の為に魔女になって欲しくない。人々を救う存在になって欲しいんだ」

「うーん、分かった。安心してよ。私、悪用なんてしないから。明日から魔物をバンバン倒して人助けをするよ！」

刀は大げさな溜息を法子へ伝える。この少女は分かっている。敵を打ち倒す事と人助けの違いすらも分かっている。だが子供というのはそういうものなのかもしれない。ならばそれを良い方向へ進めるのが私の役目だ。

「それじゃあこれから頼むよ、法子」

「うん、よろしくね。タマちゃん」

こうして魔法少女への道が始まった。

「おい、ちょっと待ってくれ。何だい、タマちゃんって」

「名前だよ、あなたの。玉鋼のタマ。で、女の子っぽくタマちゃん」

「何でいきなり、そもそも私は女なのか？ 刀だし性別なんかないぞ？」

「うーん、これから一緒に過ごすんでしょ？ だったら男の人は怖

いし、だからタマちゃんは女の子」

「おいおい」

「よろしくね、タマちゃん」

有無を言わさぬ笑顔にタマは諦めて受け入れる事にした。これから一緒にやっついていくのだから、これ位の事で衝突してはしょうがない。

しかし、今回の主は少し面倒そうだなと思っていた。

魔法少女はその正体を隠す。魔術は隠秘を旨とするから　といふ訳ではなく、多くは恥ずかしいからだとか、生活に支障をきたすからだとかの理由でその正体は隠されている。中には公言して憚らない者も居るが、その数は少ない。変身ヒーローのほとんどは正体不明である。

魔法少女は系譜を魔女に辿る為か、使い魔、あるいはそれに類するお供を連れている事が少なくない。魔術が広まり一般人が使い魔を連れる事が技術上可能になったとはいえ、一般人で連れている者はほとんど居ない。未だに使い魔というのは、魔女の、あるいは魔法少女の連れるものだというイメージが強い。当然普段から使い魔を引き連れていれば正体はばれる。使い魔が常人に見えなければ良いが、そうでないのも多い。その為、使い魔が居る事を隠す為に、ある者は使い魔を家に留め、ある者は使い魔をアクセサリーに変じさせ、ある者は使い魔の人形の様な外観を活かして人形として押し通す。

使い魔は魔法少女に出会うまで長年封じられていた者も少なくない。その為、会話に飢えている者が多く、お喋りな事が多々ある。その為、魔法少女が使い魔を大衆の居る場所へ連れて行く時には、喋ってはならないと厳命する事が多々ある。その約束が破られ一騒動起こる事もある。

とかく魔法少女という者は自己の正体を秘密にする為に細心の注意を払う事が多い。

「分かった？」

「ああ、分かったよ。学校では」

「うん、私に喋りかけてきてね」

紐を通され簡易なブレスレットになったタマは、法子の髪を梳かす手の動きに合わせて揺れながら、疑惑の念を送っている。

「でもどうしてだい？ 普通正体を知られない為にも人前でのやり取りは禁じるものだろう？」

「だってタマちゃんと話すのに声に出したりしないでしょ？ ばれる訳無いもん」

「まあ、そうだが、何があるか分からないだろう？ 学校と言えば四六時中人と関わる場所だ。うっかりという事もある」

「大丈夫だから安心して」

妙に断定的な法子の言葉をタマはどうしても信じられなかったが、それでも、今迄会話に飢えていたので、話をして良いというのは嬉しかった。

法子が黒い髪を二つ縛りにする手の動きに合わせて、タマは揺れ動く。法子の目を通してセーラー服を眺めながら、先代の通っていた学校を思い出して、タマは何だかわくわくとした。

教室は喧騒で満ちている。法子の近くでも女の子達が騒がしく会話をしている。法子はというと本を読んでいる。昨日は半分まで呼んだので、今日はその続きからだ。黙々と読書をする法子にタマはおずおずと思念を掛けた。

「向こうで賑やかに話しているけど、君は会話に入らないのかい？」

「うん、だってあの友達友達じゃないし」

法子の顔はほとんど表情が抜け落ちている。朝の喧騒に包まれた教室は温かいのに、法子の周りだけは空気が違った様に冷え切っていて、何だか寂しかった。

「そうか……なら友達の所へ行ったらどうだね？ 本なんていつでも読める。今は交友を厚くすべきだろう」

「私、友達居ないから」

「友達が居ない？ そんな事は無いだろう」

学校と言えば同年代の子供達が沢山集まる場所だ。法子位の年齢であれば、学びの場としてだけでなく、仲間を見つucker場所でもあるはず。少なくともタマが今迄見てきた学び舎は全てそうであった

し、タマの主人やその周りで友達が居ないという者は居なかった。

「普通居るものだ」

言ってからタマは気付いた。あくまでそれは普通の場合で合ったらの話だ。普通でなかった場合にはその限りではない。長年魔女という概念に振れていながら何故そんな事も思いつかなかったのか。友達が居ない。孤独である。それはとりもなおさず、法子が出生や身分等の理由で迫害を受けているという事だ。

「タマちゃん」

「な、なんだね、御主人」

タマが思わず改まった口調の思念を送ると、法子は冷徹に言った。

「私とあなたは繋がってるんだからね」

「分かっているさ。安心してくれ、私は君を見捨」

「だからあなたが伝えようとしなくても、はつきりとした言葉としてじゃなくても、なんとなくあなたの考えは伝わって来るんだからね」

「ん？ ああ、そうだよ。今更言われなくても」

「あのね、多分あなた、私がか特殊な生まれで、その所為で無視されていると思っっているでしょ？ そう同情しているでしょ？」

「う……ああ、そうだ。確かに同情されるのは心外だろうが」

「全然見当外れだから」

「何？」

「あのね、私はふつつつの生まれで、別に何にもおかしい所は無く、周りの人達もわざと私の事を無視してるんじゃないから」

「どういう事だ？ なら何故君は周りと話そうとしない」

タマは本気で困惑していた。そんな事有り得るはずが無いと信じ込んでいる。人はすべからず他者と交流をするべきだと信仰している。話をするものだと思っっている。法子はちくしょうと思っただ。怒りや悲しみを始め、恥ずかしさや笑い等様々な感情が湧いたが、突き詰めればそれはただ一つの言葉、ちくしょうに収斂された。

「私が話せないから」

「何故？」

「何故も何も私が人と話すのが苦手だから」

その言葉は益々タマを困惑させる。

「私とはこうして話しているじゃないか。思念のやり取りだが」

「そうだね。自分でも何でこんなに普通に話せているのか良く分からない。あなたが人じゃないからなのかもね」

「しかし、話すのが苦手とは、分からない。見た所、礼儀は欠けていない。礼を失さなければ人と話すなど特段技術が要るものでもないだろう」

そんな言葉を言われたら、法子は自嘲するしかなかった。そんな普通の事さえ出来ないのが自分なのだと。

「何話していいのかわからない。話しても嫌われそうで怖い。上手く話せるかどうか分からない。だから話せないの！」

段々と法子の思念が荒くなってくる。

「そうは言ってもだな、友達との会話なんて話す内容はそれこそ話す内に作っていく物だろう。嫌われるなんてよほどの事だ。話の得手不得手なんて人それぞれ、別に下手だからって恐れる事は無い。気にする人なんて居ないよ。案ずるより産むが易しだよ。話してみれば良いのさ」

「無理だよ！ だってもうみんなグループ作って固まってるもん。」

今更私が話しかけたって何こいつってなるに決まってるし」

「そんな事は無いだろう」

「なる！ 絶対なる！ タマちゃんは学校を知らないからそんな事が言えるんだよ！」

「確かに今の学校は知らないかもしれないが」

法子の息が荒くなる。それを近くで談笑している内の一人が気にして、法子へ視線を送って来た。それに気が付いて、法子は俯く。見られた。一人でせえせえ息を荒くしている所を見られた。気持ち悪い奴だと思われた。法子は途端に恥ずかしくなって、興奮していた自分を戒めて、思念を沈ませる。

「それにさ、私、話が下手なだけじゃなくて、皆が知ってる事も知らないし、流行なんて特に分からないし、むしろそういうのつまりないって感じるし、人と一緒に居るのが嫌だし、気持ち悪くなるし、むしろ私が気持ち悪いし、変な匂いがするし、肌も汚いし、油っぽいやきがするし、体も曲がってるし、顔も体も貧相だし、運動とか出来ないし、得意な事も無いし、卑屈だし、すぐ落ち込むし、心が汚くて人の悪い所ばかり見ちゃうし、本当に良いところないし」

「どんどんと法子の自虐が重なっていく。その自虐の大部分が法子の頭の中で形作られ発酵した妄想に過ぎなかった。だが法子はそれを本気で信じている。タマはそんな自虐が出る度に、そんな事無いさと否定していくのだが、法子は聞いていないかのように自虐を続け、タマは聞いていて気が滅入ってきたので、それを止めた。

「分かった。分かったから止まってくれ」

「あ、ごめん。本当にさ、私、話しててもこんなだし、いっつもこんな事考えてるし」

「分かった。君が自分をどう思っているのかは十分に分かった」

「本当にごめんね。嫌だよ、こんなのと四六時中と一緒にさ。そもそも何で私が選ばれたの？」

「法子の質問にタマは答えあぐねた。法子はどんどんと沈み込んでいく。恐らく学校でいつも感じている苦しみがタマと会話した事で爆発したのだろう。それを止める為に、何とか法子が駄目ではないと伝えたいのだが、今の質問の答えでは励ます事が出来ない。とはいえ嘘を吐いたところで思念が繋がっている以上ばれてしまうので論外だ。意図的に送る思念を選別する事も出来るが、これから信頼関係を築く相手に隠し事みたいな事はしたくない。仕方なしに、タマは正直に答えた。

「理由は無いよ。君が私を見つけた。運命が噛み合ったからさ」

「多分私よりももっとふさわしい人、居るよ。だから」

「法子が続けようとした思念の上に、タマが思念を覆い被せる。

「私は君が気に入った。私は君を魔法少女にする。だから君から離

れるつもりは無い」

「え、な……べ、別に勝手にすれば。でもきつと直ぐ嫌になるよ」
法子の思念は言葉上、未だに頑なな自己卑下であったが、ほんのりと嬉しそうな思念も伝わって来た。よしよしとタマも嬉しくなる。とりあえず沈み込むのは止まったし、これで良しとしよう。これ以上、言葉を重ねると逆に心を閉ざしてしまう可能性もある。でもその前にどうしても言っておきたい事があった。

「君は自分の事を駄目だ駄目だと言っていたがな、私からすれば決してそんな事は無い。この世の何処にもいない完全な人間でも目指しているのかい？ 君は何処からどう見ても可憐な女の子だ」

「嘘ばかり」

言葉ではそう言っているが、やはり喜びの感情が流れてくる。タマはとりあえず言いたい事は言ったので思念を伝える事を止めた。法子から混乱した思念が流れ込んでくる。多分、褒め言葉をどう受け取って良いものか迷っているのだろう。やがて法子がおずおずと思念を伝えてきた。

「ありがとう」

「いや、事実を伝えたまでだ」

「タマちゃんが男の子だったら良いのに」

「性別は君が勝手に決めただ。今からでも男に換えたらどうかな？」

「ううん、無理。もう私の中でタマちゃんは完全に女の子だから」

「そうかい。まあいいけど」

「タマちゃんが沢山居たらな。百本位居たら賑やかで楽しいのにな」
「やめてくれよ。自分が沢山居るなんて悪夢だろう」

タマがぼやいていると、教師が入って来た。皆が一斉に自分の席へと戻り始める。やはりいつの時代も学び舎は統率がとれているなあとタマは感心した。一方、法子は初めて楽しい朝の時間を過ごせたので満足していた。

その日は法子にとっていつになく早く時間が過ぎた。いつもであ

れば休み時間の間は早く時間が過ぎると祈り続けていたが、今日は違った。タマとの他愛の無い会話が楽しかった。いつもなら授業の時間が終わらない様に祈っていたが、今日は違った。早くタマと話したくて 授業中に話しかけるとちゃんと勉強しろとタマは取り合ってくれないから 授業が終わるのを待ち遠しく思った。会話の話題は主に本の内容で、それはタマが気を使って法子の生活の話題を意図的に避けた為であった。法子もその気遣いは気になったが、それ以上に初めて自分の趣味に耳を傾けてくれる友人を持った為に、家族に話すよりも饒舌に語った。今日という日はあつという間に過ぎた。

帰り道、法子は相も変わらず本の内容を語っていたが、それをタマが遮った。

「ちよつといいかな」

というのも、流石に今の状況を続ける訳にはいかないとタマは思ったからだ。段々でも良いから、少しずつ法子と周囲を関わらせていきたい。やはり友達が一人も居ないと言うのは歪んでいる。

タマの見た所、今の法子は外から拒絶されているというよりは、外を拒絶している。それは外への恐れと外への無関心の二つに起因している。だから少しずつでも外に目を向けさせて、興味を持ってもらえば治っていくはずだ。

だからタマは今日、別の学生の話聞き耳して得た情報を開示してみた。

「最近、この近くに大きな店の集まりが出来たそうだよ。アトランと言ったかな？ 何でもそこに国内最大の魔術専門店があるそうだから出来れば後学の為に行ってみたいのだが」

何でもそこには人が沢山集まるらしいし、学校が終わった後は学生が多いそうだ。まずは人に慣れる所から始めた方が良さそうだ。そんな意図での提案だった。だが、

「嫌」

「どうしてだい？」

「目的が透けて見える。その気持ちは嬉しいけどね。でも嫌。人ごみは苦手だし」

「そうか」

思念から迷いが読み取れた。脈無しという訳ではなさそうだ。ならばここで無理を言って拒否感を持たせてはいけない。そう思ってたマはあっさりと退いた。

「ならー先ず帰って魔法少女の訓練をするか」

「え？ ホントに！ 変身できる」

「ああ、勿論だ」

「うん！ じゃあ、早く帰ろう！」

法子が元気に走り出した。そんな姿を感じてマは現金な主だたと苦笑する。

「それじゃあ、家まで駆け足だ。魔法少女は体力が無ければならぬい」

「う、もう無理。吐きそう」

少し走って法子は立ち止まり、息も絶え絶えにそう言った。ほとんど進んでいなかった。苦しそうな姿を感じてマは、今回の主は本当に難儀しそうだたと嘆息した。

「それじゃあ、変身をしてもらおう」

「はい！」

鞆を投げ出してベッドの上に勢いよく座り込んだ法子はタマを目の前に捧げ持つて嬉しそうに笑った。

「それで、どうすれば良いの？」

「簡単に言えば、変身したいと願うだけだ。それが変身において、いや魔術において基本であり、奥儀でもある」

「でも、前に学校で習ったけど、頭の中だけで魔術をするのってとっても難しいんでしょ？」

「その通り。それが出来れば一流どころか稀代の魔術師だ。でも安心して欲しい。私が補助するからそこまで難しい事は無いはずだ」

「うんうん、じゃあ早速」

法子が勢いよく立ち上がって、気合を入れた。だがそれをタマは押し止める。

「焦らない焦らない。良いかい。そうは言っても、君にはまだ出来そうにない。今日学校で拝聴した授業のレベルを考えるとね。君が学校で習う事よりも遥かに先を独力で学んでいるのなら別だけれど」

法子が口を尖らせる。

「じゃあ、どうすれば良いの？」

「普通の魔術の様に精神統一の為の補助行為を重ねれば良い。魔法円や詠唱、踊り等々、道具を使っても良いし、とにかく変身しやすい状況を作るんだ」

「例えば掛け声とか？」

「ああ、そういうのだ。そんなに難しくしなくて良いし、難しく考える必要も無い。君が変身できそうって思える様な事を何か」

「分かった」

法子は思案する。ぐるぐると頭の中で呪文が回る。沢山の呪文が

浮かんでは消えていく。思い浮かぶには思い浮かぶのだが、実際に自分がそれを口に出すと考えると恥ずかしくて、どうにも決めきれない。

考えているだけでも段々と恥ずかしくなって、法子は我慢できなくなつて呟いた。

「私はあなたと契約する」

「確かに契約と言えなくも無いね。そんな堅苦しい物には考えて欲しくないけど」

「そうじゃなくて、呪文。私はあなたと契約する！」

「え？」

「悪い？」

「いや、悪くは無けれど」

「渋るタマに法子は言った。

「とにかく、変身させて！」

「本当に後悔しないかい？」

「しない！」

「タマはしばし悩み、

「まあ良いか。いつでも変えられるんだし」

吹っ切った。

「分かった。じゃあ、立ち上がって」

「言われた通り法子は立ち上がる。

「深呼吸をしてみて」

「法子が何度か息を吸って吐く。

「それじゃあ、呪文を唱えて」

「えーっと、私は」

途端に法子は何か不思議な体の中が渦を巻く様な感覚に襲われた。悲鳴を上げようとする法子をタマは叱責する。

「声を上げない！ 集中！ 続きを！」

「あなたと」

その後と共に法子は自分の体が溶け崩れた様な錯覚に陥った。自

分の肌がどろどろに溶けていく。そんな気がした。でも後には引けない。

「契約する」

その瞬間、法子の髪が解かれ、色が根元から次第に金色へと変わっていった。制服の色が黒く変じて、その形も少しずつ変わっていく。法子の手に握られていたタマは元の刀へと戻る。黒い衣装の上に黒いローブを羽織って、法子は魔法少女になった。

「はい、終了」

「え？ 終わり？」

「ああ、無事に変身できたよ」

「ホントに何だか実感がわかないけど」

そう言いながら、法子は自分の体を見回して息を呑んだ。

「服が変わってる」

「服だけじゃないよ。鏡を覗いて見な」

言われるままに鏡を覗くと、二つ縛りの黒髪だった自分が金色のストレートな自分に変わっていた。

「おわう！」

奇妙な叫びを上げて後ずさり、また足を踏み出して今度はしげしげと自分の姿を眺めはじめた。

「本当に変身してる」

「そりゃあね」

「でも、顔とか体は変わっていないんだね」

その言の通り、鏡に映った法子は服や髪の色は変わっているものの、その幼い顔立ちと体つきは全く変わっていないかった。

「だから絶世の美女になる訳じゃないと言っただろう」

「そうだけど……でも他の人に見られて私が魔法少女って知られるのが恥ずかしいんだけど」

「安心しなよ。正体はばれない様になっているから」

「そうなんだ」

法子は変身した自分をしばらく眺めて、顔を赤らめた。

「どう？ 変身した感想は」

「うん、実際に着てみるとこういう衣装って恥ずかしいね」

「この期に及んでそんな感想？」

「だって」

恥ずかしそうに体を小さくする法子に、タマは呆れた溜息を送る。

「まあ、良いけどさ。じゃあ、行こうか」

その言葉に法子が慌ててタマを見た。

「何処に？」

「何処につて魔物の気配を察知したからそこにさ。君は変身したら魔物を倒して人々を救うと言っただろう？」

「そ、そうだけど」

「今更怖気づいたのかい？」

「そうじゃなくて、恥ずかしいんだよ！ この恰好！ ほら今日はもう変身できたんだし、魔物退治は明日からって事で」

「アホか！ さっさと行く！」

「えー」

「文句言わない！」

タマに促されて法子は渋々と部屋から出ようとして、廊下から弟の足音の如き音が聞こえたので、回れ右をして窓を開けて、夜の闇に躍り出た。

魔法少女となった法子が民家の屋根？を踏み締めながら飛び越えていく。月明かりに照らされて仄かに見えるその表情はいつになく明るい。

風切りの音がびょうびょうと耳に木霊する。夜の冷たい空気が気持ちいい。視野は何処までも遠くを見渡せた。何百メートルも先に猫みたいな生き物を肩に乗せた女の子の後姿が見える。

「それで、何処に行くの？」

「体の赴くままに進めば大丈夫。勝手に魔物のところに着くから」

「何が居るの？」

「伝わる魔力からすると大した事無い魔物だよ。練習にぴったりのはずだ」

「楽しみー！」

一際大きく跳ぶと、そんな気はまるで無いのに、糸に操られる様にして、公園へ着地した。タマと出会ったあの公園だ。少し離れたブランコの上に、霧状の生き物が居た。猫の様な目がついている。可愛いんだか、気持ち悪いのだから分からない。

「やっぱりかなり弱い魔物だね。練習にもってこいだ」

「うーん、何だか可哀そうだけど。倒さなくちゃ駄目？」

「勿論。良いかい？ 魔物というのは、どんなに弱くても居るだけで周囲に影響を与えるんだ。その影響が積み重なれば、いずれ魔導師というもつと強いのが現れる。その魔導師が更に周囲に影響を与えて、それが積み重なると魔王が現れる」

「強い魔王って？」

「ああ、非常にね。遙か昔には幾つもの国を滅ぼした奴だっている」「そっか、倒さなくちゃそういうのが出てきちゃうんだね。それでどうすれば良いの？」

法子は刀を構えた。何だか舞い上がっているのが自分でも分かる。はしゃぎたくてたまらない。

「基本は私を使って相手を切れば良い。刀の使い方は分かるかい？」

「持った事も無い」

「大丈夫。触れれば切れる」

「おお！ 心強いよ、タマちゃん！」

嬉しそうに叫んだ法子は、刀を握る手に力を込めて、駆けた。一歩で距離を合わせ、二歩で魔物の目前に迫り、右手を柄に添えて、ふわふわと浮いている魔物に向けて見よう見まねで抜刀した。刃先は魔物へ吸い込まれ、その身を切り裂く。

切った。確信を持った法子は笑みを浮かべて、魔物の居た場所を見つめ、

「え？」

そこで相も変わらず何て事も無い様子で浮いている魔物を見て呆然と呟いた。

そんなはずは無い。そう思って、法子は刀を振り上げ、魔物へと振り下ろす。刃は過たず魔物を通り抜け、変わりのない魔物はふわふわと浮いている。

「何で？」

「いや、何でつて霧状だからだろ」

言われてみればその通りで、霧を切れるはずが無い。

「でもさつき触れれば切れるって」

「切れるよ。ただ魔力を込めなくちゃ」

「魔力を込める？」

「そう。刃先まで力を行き亘らせないと、魔力で出来た物は切れないよ」

「そう言われても」

魔力を込める方法何て分からない。

「もしかして出来ない？」

「……だって習った事無いし」

「ま、まあ、大丈夫だよ。教えるから。難しい事じゃない」

タマは励ます様にそう伝えてきた。

「まずは目を瞑ろう」

言われた通りに法子は目を瞑った。

「次に自分の手の先に私が居る事を感じて柄をぎゅつと握る。」

「君の延長に私が居る」

私の延長。

法子は自分の体の中にまた渦の様な感覚が立ち込めて来るのに気が付いた。

「それが君の魔力。それを私のところまで届かせて」

渦の先は意のままに動いた。腕を通り、手の先、刀へと流れ込んでいく。

「よし、目を開けて。それを維持」

目を開けると刀は鈍く光っていた。

「そのまま刀を魔物に！」

法子は刀を正眼に構えて、振り上げ、勢いよく振り下ろした。

「あ、駄目だ」

タマの声が響いたが、気にせず刀を魔物へと振り下ろす。だがやはり魔物は切れなかった。刀の光は消えていた。

「むー。切れない」

「力を込めた時に気を散らしたね」

「難しいんだけど」

「練習あるのみ」

その時、風切り音が鳴った。続いて土を噛む音がする。地面に映る魔物の影に一本の矢が突き立っていた。何事かと思う間もなく、風切り音は数を重ね、魔物の影の周りに新たな矢が四本突き立った。矢は甲高い音を発して光り輝き、魔物の影は光りの中に消え、光が収まった後も、影は消えたままだった。魔物が消えていた。

「帰したか。法子、後ろ！ 上！」

「分かってる」

ひしひしと背中に圧力を感じていた。振り返ると、遙か頭上、公園の隣にあるマンションの屋上に黒い人影があった。ひたすら黒い黒い鎧に黒いマント、口元だけが晒されて真一文字に引き結ばれていた。

「あれは」

「同業者、かな？」

黒い影は背を向けて飛び退り、マンションの向こうに消えた。

残された法子は街灯の薄暗い光に照らされた公園の真ん中で呆然と立ち尽くし、やがてぽつりと漏らした。

「何だか助けられたみたい」

「そのつもりだったんじゃないかな。苦戦しているみたいだから助けてくれたのかもね」

苦戦なんてしていなかった。次の一太刀で倒せたはずだ。

失敗した。折角魔法少女になったのに。早速失敗してしまった。

その上、赤の他人に助けられた。これじゃあ、いつもの自分と変わらない。

法子は悔しくなっただきく叫んだ。

「何なのよ！ もー！」

町の犬達が呼応して吠え声を上げた。

民家の屋根を飛び移る。金色の髪を月明かりに晒し、闇に夜色のロープをはためかせながら。その顔は行きの明るい笑顔とはまるで違った沈んだものだった。

「まあ、そう落ち込むな。まだ始まったばかりじゃないか。これからだよ、これから」
「うん」

法子は黙り込んで屋根から屋根へと飛び移っていく。タマもそれ以上何も言わなかった。繋がる今、法子はその胸に様々な感情を抱いて折り合いを付けようとしているのが分かったから。自分から立ち上がるうとするのなら、タマが何かを言う必要は無い。

やがて法子は沈んだ調子ながらも力の籠った意識でこう言った。
「ねえ、私はどうすれば強くなれるの？」

法子が悔しさを感じているらしい事はタマにとって良い兆候だ。法子の日常に対する接し方を見ると、悔しさを感じても押し殺してしまいそうな気がしたけれど、悔しいと感じてそれを打破したいと思う、そんな気持ちがあるのならそれは良い事だ。出来れば打破をする手段を人に聞く前に自分で探すまでになつて欲しいが、それはおいおいで良いだろう。

「そうだな。とにかく鍛える事だな」

「具体的には？ 魔術の授業をちゃんと受けるとか？」

「魔術もそうだが、体もだ。明日からは毎日走り込みだな」

「そっか。ちゃんと私自身が強くないといけないんだ」

「当たり前だよ。私の変身は持っている力を引き出すものだからね」
「分かった」

丁度家に着いた。器用に窓枠へ着地した法子は、そつと窓を開いて自室へと戻る。部屋の中に入った法子は一度鏡を見てその中の普段の自分とはかけ離れた自分を見て、タマに尋ねた。

「ねえ、元に戻るにはどうすれば良いの？」

「戻りたいと思えば良い。また呪文を設定しても良いけど、変身する事に比べれば大分簡単だから、戻りたいって思うだけでも戻れるんじゃないかな？」

法子が戻りたいと思うと、ローブは消え、服は制服に戻り、髪は黒く戻って二つ縛りになった。タマも掌に乗る大きさに戻る。

突然、法子の体が沈む。急激に身体に疲労が来て、体が思う様に動かせずに倒れ込んだ。

「何これ」

「そりゃあ、私の変身は君の魔力を使うからね。要は生命エネルギーの消耗だ。変身してるだけでも疲れるし、力を使えばもつと疲れる。特に今回は初めてだったし」

「あれ？ でも授業で自分に宿る魔力は使いすぎると危ないから使っちゃいけないって」

「まあ、使いすぎれば死ぬからね」

「な！」

法子が驚きに身をすくませた。逃げようとするが体は動かない。

倒れたままで怯えながら手の中のタマを見つめた

タマが笑う。

「安心しなよ。普通は使ったって寝れば戻るから。それに命に関わる程の魔力は使おうとしても私が使わせないよ。そもそも死んでしまっただけ使ったらこの星を滅ぼせるよ。そんなに使わないだろう？」

心臓が凍り付いた法子はしばらく頭の中を空白に吞まれていた。

やがて気を取り戻した法子は、とりあえず自分の取り越し苦労だった事を知り、その上でタマが幾分かかってきた事とそれに引っかけた事が悔しくて、一発タマにデコピンをしてから、何とか体を起き上がらせた。

「訓練を……」

「止めときなよ。今日はもう無理だ。訓練は明日から」

「そう？ でも……」

「無理したって良い事無いよ。ゆっくり寝る事も訓練の一つ。それにもう今日は十分に鍛えられたよ」

「本当？」

「本当。だから寝な。さあさ、ベッドはすぐそこだ」

「うん、分かった」

法子は箆笥を開けて、タオルとパジャマを取り出して、部屋のドアへと近付いた。

「ちょっと、何処へ行くんだい？ まさか外へ？ これ以上鍛えるなんて」

法子は左手で制服の首元を引つ張って、自分の鎖骨を反対の掌に乗ったタマに見せつける様にした。

「この汗まみれの体でお風呂にも入らずに寝る位なら、死んだ方がマシ」

その意味を計りかねてタマが考え込んでいる間に、法子は部屋を出て風呂場へと向かった。

翌朝、地響きの様な唸り声が部屋に満ちた。布団がゆっくりと動く。枕に掛かっていた黒い髪の毛がゆっくりと掛布団の中に引き込まれていく。そうしてしばらくもぞりもぞりと布団が波打って、布団の横から腕が現れ、頭が現れ、体が現れて、そのままベッドの端から落っこちた。床にへばり付いた法子が唸るように言った。

「体が重い」

法子は這ったまま枕元のタマを掴み揚げる。

「軽い筋肉痛だよ」

「全然軽くない」

頭の中にくすくすという笑いが響いてくる。それに苛立って法子は思いつきり立ち上がった。

「だっしやー！」

気合一閃。だが閃いた気合はすぐに立ち消え、法子はベッドの上に倒れ込んだ。

「無理。今日学校休む」

「ほら、さつさと用意する」

無慈悲なタマの言葉を法子は渋い顔で受け止めて、もぞもぞと動き始めた。

ぐつたりと机にへばり付く法子の耳に、転校生が来るという会話が何処からか聞こえてきた。

転校生か。法子は机に頬を付けながら思いを馳せる。

季節外れの転校生は何か秘密を持っていると相場が決まっている。何かの組織の一員だったり、特殊な能力を持っていたり、あるいは前の学校で暴力沙汰を起こしたとか。一体どんな秘密を持っているんだろう。そんな風に楽しい空想にふける。けれどふと自分の方が余程秘密めいていると気が付いてにんまりと笑う。そう法子は人々がうらやむ魔法少女なのだ。

転校生か。話してみたい。法子はにやつきながらそう考えたが、すぐにその笑顔が引つ込んだ。話してみたいけれど、でもカッコ良いと言っていた。そんな人が私と話す訳が無い。いやどんな人であっても私は話す事が出来ないか。

話せる人。そう例えば同じ魔法少女だったら。他の人と違った秘密を抱える者同士話が合うんじゃないだろうか。あるいは私と同じ様にあんなノートを書いている人だとか。いや、そんな人居る訳無いか。

法子は時々体の痛み在眉を顰めながら、ぼんやりと様々な空想に耽った。顎を支える腕の先ではブレスレットになったタマが黙りこくっていた。

教室の一角に人だかりが出来ていた。転校生に群がる人々だ。法子は振り返ってそれをちらりと見て、餌に群がる犬の様だと思った。転校生は盛大な歓迎と若干の妬みでもって迎えられた。鋭い目つき、高い背丈、最初に入って来た時はクラスの十中八九がとっつき

にくそうな威圧感を覚えた。だがその表情には薄い笑みが漂っていて、自己紹介で朗らかに元気よく挨拶を行った瞬間、ほぼ全ての後ろ向きな評価は覆され、後は好意と妬みだけが残った。

法子はと言うと、秘密を持っている（持っていなければならぬ）転校生よりも一等高い秘密を持った自分に酔いしれる心と、人と話せない自分を情けなく思う気持ちと、重い痛みに捻り潰されそうな思い、詰まる所、外の異変よりも内に対する心に惑っていた為に、外界の転校生などにはまるで興味を持たなかった。それどころか顔すら上げずに俯いて、内に渦巻く三つの障り、中でも強烈な疲労感に抗う事が出来ず、苛まれ怠惰な脱力感を覚えて、顔を上げずに一切転校生を見ないどころか、耳すらもまともに働かせる事が出来なかった。何とか得た転校生に関する情報は下の名前が将刀という事と、季節外れの転校の理由がありきたりな親の仕事の都合という事だけだった。

今も人垣に囲まれてその向こうに居る転校生の姿は見えない。顔を戻して机に突っ伏し、どうでもいいやと眠りに入る。だがどうしても耳は後方の人ばかりに向いてしまう。

その時ふと嫌な言葉が耳に入った。

「あそこで寝ているのは？」
え？

途端に嫌な汗が全身ににじみ出た。まさか私の事かと法子は焦りつつ、必死で心を落ち着けようとする。

そうだ、目の前の何とかっていう子も寝ているんだ。だからそっちかもしれない。そりゃそうだ、私になんて注目するはずが無い。

高鳴る心臓が嫌な予感を告げ続けている。

また声が聞こえてくる。

「あのおさげの子」

法子は自分の髪型を改めて考えて、数秒思考を巡らせて、ようやくおさげだという事に気が付いた。

私おさげだ。

でも分からない。まだ私と決まった訳じゃない。他の子かも知れない。

他の子であります様にと法子は祈りながら耳を澄ませ続けた。

「ああ、あれは、えーっと名前なんだっけ？」

「私じゃありません様に。私じゃありません様に。」

「なんだっけ？ えーっとね、ちよつと待って、あー、えーっと、

あ、法子だ。何とか法子」

「私だー！」

「十八娘とかいう変わった苗字の」

「いつつも本読んで誰とも話さない」

「やめてー！」

「何かいつもこそそしてるよね」

「休み時間本読んでばっか」

「たまににやにや笑ってるし」

「やめて。」

「そついや話してる所見た事無いな」

「前に話した時ずつと俯いてて感じ悪かった」

「本当に止めて。」

法子はそつとタマを肌から離してポケットの中に入れた。

陰口をたたいているのはごく少数だった。転校生の周りに集まっていた内のほとんどはクラスメイトに対するあからさまな悪口に眉を顰めて、その内の半分はその場を離れていった。けれど陰口を止めはしない。止めれば次に何かを言われるのは自分だ。

俯いて背を向けている法子にはその光景が見えなくて、あたかもクラス中が自分の事を馬鹿にして居る様な気がしていた。

「あの子、前に風呂敷持ってきた時あつたじゃん」

「あつたあつた。何かおばあちゃんが持ってきてそつな古い感じの。」

「お弁当包みだっけ？」

「そつそつ。しかもそのお弁当の中身が煮物と梅干とごはんと焼き魚だったの。婆じゃねえんだから」

「あれは笑ったね」

だって、丁度お母さんが入院してて、おばあちゃんに来てもらって、いつも通りじゃなかったんだもん。それにあのお弁当はおじいちゃん用のお弁当を私が間違っって持ってきたからだし。そのお弁当だっって忙しくて夕飯の残りをそのままお弁当にしたものだし。おばあちゃんは上手だから料理はとつても美味しいし、あの日の私と弟の為のお弁当はフレンチ風の豪華なので。

そんな言い訳を心に思い浮かべながら、法子は必死にじっとしていた。何か反応すれば、更に陰口を言われる事は目に見えていた。

「うちのクラス、みんな結構仲良いけどさ、あの子だけ何か浮いてるんだよね」

「ね。壁作ってるよね」

「しい。それ以上大きな声出すと聞こえるよ」
もう聞こえてる。

法子は俯きながら心の中で力の無いつつこみを入れた。

やっぱり私、みんなに嫌われてたんだ。

クラスに溶け込めていない事は法子自身分かっていたし、多分良い思いをされていないだろうとも覚悟していたけれど、実際に周囲の心を聞かされると覚悟なんて易々と貫いて、酷い悲しみが法子の中に突き抜けてきた。

鼻の奥が痛くなっって思わず鼻根に指先を持っていく。当然、そんな事をして痛みが取れる訳が無い。鼻根に添えた指の先に目から流れてきた液体が触れて、法子はいたたまれなくなっって更に顔を俯かせた。

「そつえばいつもノートに何か書いてるよね」

「前見たらへたつくそな絵が」

「なあ、そんな事は良いからさ」

転校生が話を遮った。

法子はようやく自分に対する陰口が終わった事に安堵しつつ、同時に転校生が自分に対して何の興味も持っていない事が分かって、

嬉しい様な悲しい様な気持ちになった。悪目立ちするのは嫌だけれど、見られないのは寂しい。普通の人は簡単に両立して自分を主張しているのに、自分にはそれが出来ないと思うとやはり悲しみの方が大きくなった。

転校生が次の言葉を接ごうとした時に、丁度教師が入って来て、同時に予鈴が鳴る。授業の始まりに当たって、クラスメイト達は各々の席に戻り、法子は自分の席についたまま俯いて震え続けた。

その日一日、法子はずっと顔を俯かせて過ごした。顔を上げればまた泣いてしまう。そんな気がして顔を上げる事が出来なかった。時間はいつもの通り、時に遅く、時に早く進み、やがては下校時刻となつて、真つ先に教室を出た法子は俯いたまま、あの公園へと足を向けた。

誰も居ない公園。四方を囲むマンションが影を作りだして、その影によつて辺りが閉ざされる気がして、法子はほつと安堵した。ここならば誰も来ない。ゆつくりと、昨日魔物が浮いていたブランコに歩み寄つて、勢いよく坐り、思いつきり漕ぎ始めた。筋肉痛の痛みすら、嫌な事を忘れる為の清涼剤に換えて、法子は漕ぎに漕ぐ。

「なあ、パンツ見えるぞ」

「びぎゃ」

思いつきり地面に靴を突き立てて、何とか急停止し、恐る恐る後ろを振り向くと、背の高い男子が居た。法子の見たところ、年頃は法子より少し上。整った顔立ちで、少し冷笑的な表情を浮かべている。

「なあ、あんた、十八娘法子だっけ？ もうちよつと周りを見て行動した方がよいよ」

余計な御世話だと沸騰しかけたのは一瞬で、すぐに相手が自分の名前を知っている事に引つかかつて何も言えなくなった。

何処で名前を知られたか思いを巡らせても一向に分からない。何処かで会つただろうか。美形、背が高い、プラス失礼。会つたら忘

れそうにない相手だ。けれど覚えがない。まさか小さい頃遊んだとか？ それで結婚の約束をしていたり？ と段々脱線し始めた思考は、記憶の引っかかりが現れた事で躓いて止まった。

この男子の声、何だか聞いた事のある声だ。一昨日じゃなく、もっと最近。法子の行動範囲は限られている。すぐに自分の関わった人々が頭の中に網羅され、そうしてすぐに思い当たった。

「あ、転校生」

「ああ、そうだけど」

変な事言っちゃった。法子は自分の口走った言葉を反省した。今日一日、ずっと俯いていた為に、転校生の顔すら見ていなかった。しかし転校生からすれば、あの時クラスに居た全員が自分の事を知ったと期待しているに違いない。その期待を裏切ればどんな逆恨みをされるか分からない。

とりあえず、ここは何とか和やかなムードにして退散しなければならぬ。法子は必死に会話の方法論を頭の中に思い浮かべて言った。

「えーっと、将刀君」

相手の名前を呼ぶ事が仲良くなる第一歩。いきなり名前も失礼かと思ったので、苗字で呼ぼうと思ったが、残念ながら苗字を知らないで仕方が無い。

「ああ、野上将刀っていう。よろしく」

「よろしく」

とりあえずの挨拶を済ませ、法子は次の会話を考える。

だが既に万策は尽きていた。

話題も何も持たない法子に会話を接ぐ力はない。興味のほとんどをフィクションの世界に向ける法子にとっては、天気の話すらも困難だ。今日が雨だろうが何だろうがどうでも良い。だからそれに対する感想も言う事が出来ない。

会話が出来ずに、法子が心の中で右往左往していると、先に将刀が口を開いてくれた。

「学校、嫌いななの？」

「え？」

「楽しそうにしてなかったから」

何で急にそんな話題を？ 今日来た転校生に言われる程、楽しそうではなかったのか。まあ、その通りではあるけれど。

法子は恥ずかしい気持ちで一杯になって、口すら満足に開けない。黙っている法子を見て将刀はふっと笑った。

「まあ、分からなくてはなないよ。俺もあんな陰口を言うクラスは嫌だ」「ち、違つよ！」

思わず法子は叫んでいた。

「あれは私が悪いだけだから」

そう、誰もががしている当たり前の事をまともに出来ない自分が悪いのだ。言われるだけの理由がある。自分がもつとちゃんとしていればあんな事は言われない。それなのにこの転校生はクラスの人達を悪く言うなんて。転校してきたばかりで何も知らないくせに。

そう考えるうちに、本当に自分は駄目な奴だなと嫌な気持ちになった。

きつとこの転校生は孤立した私に同情して気を使ってくれたのだ。それなのに、その優しさを不快に感じてしまった。もう私は他人の優しさすらまともに受ける事が出来ない。

どんどんと思考の泥沼にはまって、法子はいたたまれなくなって、その場を後にする事に決めた。

「とにかく違つから。悪いのは私だから」

ぼそぼそとそれだけ言って、法子は背向け、公園の出口へと向かう。

その背後に向けて転校生が言い放つ。

「だったら笑って話せば良いだろ。そうすればあんな事は言われな
いし、あんだだってそっちの方が幸せなはずだ」

それを聞いて、法子はもうその場に居られなくなって、走り出した。

そんな事は分かっている。そんな事は分かっているけれど、それが出来ないから苦しいんだ。それが出来れば苦労しない。それなのにあの転校生は無神経にもあんなことを言った。走って走って。

ああ、分かっている。あの転校生にとってそれは当たり前前で、至極簡単な事なんだ。だからそれが出来ない私がやっぱりおかしいんだ。

家の前まで来て、玄関を開けて、自室に飛び込んで、ベッドの上に転がって、ポケットからタマを取り出して、そうして強く握りしめた。

「今日は災難だったね。まあ、あまり思い詰めるなよ」

「良いから変身させて」

「は？ どうしたんだい？ 随分と焦っているね。今日の事なら」

「良いから変身させて。私はあなたと契約する」

タマはしばし沈黙していたが、やがて法子の服装が変わり、髪の色が変わり、法子は魔法少女になる。魔法少女になった法子は煮えたぎる様な薄気味の悪い悲しみの猛るままに、窓の外へと飛び出した。

「魔物は？ 居る？」

ひとときわ高く跳び上がり、夜の風に吹かれながら、法子は辺りを一望した。住宅地には仄かな温かみを持った光が灯っている。それがむかつく。太陽の様な輝きがあるでもなく、常世の様に暗い訳でも無い。もっと輝けるのに、人の為という名目でその力を抑えている。その実に中途半端な様が気に食わない。

遠く行く先には、爛々と照る輝きがある。ビルや繁華街の強烈な明かりが灯り、昼とまでは行かないが、文明を持つ身として精一杯に輝いている。その光に誘われる様に法子は跳んでいく。

「ああ、微弱だけれど感じる。行く先そのまま」

法子は頷いて見知らぬ屋根の上に着地して、また跳んだ。

「嫌な気分になってるのは分かるけれどね、八つ当たりは感心しない」

「うるさい」

法子は民家の屋根を跳び次ぎ跳び次ぎ、やがて駅を中心とした繁華街に辿り着いた。一際高く跳んでビルの屋上へと上り、縁に立つて駅前の広場を見下ろす。

人々はあちらへこちらへ勝手気ままに歩き回っている。遊び歩く姿、駅へと向かう姿、待ち合わせをしている姿、誰も彼もが我が物顔でのし歩いている。だが屋上に立つ法子には気が付いていない。

自分が立っている事を誰も知らないのだと思うと、法子には目の前の光景がどうにも愚かな気がして、とても嬉しくなった。

「それで魔物は？」

「視界の右端、五階建ての建物の五階」

言われるままに視線を右に滑らすと、五階建ての駐輪場があった。窓や隙間から見るに、一階から四階までは人の往来があるのに、五階にだけは人が居ない。

「何かあったのかな？」

五階に人が居ないのと魔物の存在は関係があるのか。もしかしたら五階に居た人々を丸々消し去ったのかもしれない。だとしたら相当凶悪な魔物だ。

法子は屋上の縁を蹴り、そのまま駐輪場へと飛び降りた。一度、駐輪場の屋上へと降り立ち、無駄に後方宙返りをしながら再び宙に躍り出て、壁に沿って頭から落下し、大きく開かれた五階の窓枠に手を掛けて、五階へと滑り込んだ。

誰も居ない駐輪場、ずらりと並んだ自転車の合間に一匹の犬が見える。

犬、では無い。魔物だ。

法子が見つめている前で、魔物は突然法子に吠えたてて、かと思うとお尻を向けて、その後唐突に振り返り、俄かにぐるると喉を鳴らし、いきなり跳びあがって自転車の影に隠れた。法子にはその行為の意味がまるで分からなかったが、歓迎されていない様だと思っただ。何て生意気なんだろう。

「さてと、憂さ晴らしに付き合ってもらいましょう」

法子は酷薄な笑みを浮かべて刀を抜き放った。殺す。そんな凶暴な思いが湧いた。殺す。学校での会話を思い出す。笑われ、馬鹿にされ、嫌われ。殺す。頭の中に浮かんだ嫌な映像を切り裂き、暴れだしたくなる気持ちを手に持った白刃に込めて、横一文字に構えた。辺りに気を配る。隠れた魔物はすぐに見つかった。いつの間にか背後に回っている。

即座に振り返る。魔物は自分の尾を追って回っている。法子は刀を両手で振り上げて、明確な殺意を持って切り下した。魔物の腹に切れ目が入る。悲痛な声を出して、魔物は自転車の影へと逃げ込んだ。

追う。追っている法子の胸に、後味の悪い後悔がわだかまり始めた。魔物が何をしたというのだろうか。ただ人を遠ざけただけ。確かに迷惑をこうむった者も居るだろう。だがそれが追われ、切られ、

殺される程の罪だろうか。

そんな当たり前の疑問が法子の胸に湧いてしまった。だがもう後戻りは出来ない。全てへの反感が強く？しこりとなって容易には取り除きようがない程膨らんでしまった。これをどうにかしなくては生きる事すらままならない。そう魔物を殺さなくちゃいけないんだ。心の中でそう叫ぶと、ふつふつと怒りが湧いた。魔物を殺そうとする自分は間違っている。そんな当たり前の感情に流され、後悔し、投げ出そうとする自分すら憎らしく、目の前が暗く赤く染まっっていく。自分を含めた全てが気に食わない。

今日の学校での陰口、いつも一人で居る自分、暗澹として生きつづけている自分、そんな見たくも無い光景が頭に浮かぶ。これをどうにかするには切るしかない。切って殺すしか、私は生きられない。法子は魔物を見失って、跳びあがった。体を上下反転させて、天井に着地して、隅の方で震えている魔物を見つけて、足に力を込める。刀を鞘に納め、殺気を漲らせる。そして天井を蹴りだし、魔物へと跳んだ。

震えている魔物に迫る。法子は刀の柄に手を掛けて、刀身にありつたけの魔力を込めて、目の前の魔物へと抜き放った。

しかし止められた。

必殺の意志を込めた刀は、横合いから出された杖を弾き飛ばしただけで終わり、魔物には届かなかった。

何が起こったのか。咄嗟に法子は判断できなかった。だが魔物を殺す。その凶暴な意志に支配された法子は、突発的な事象にまるで関心を払わずに、杖に当たって軌道の逸れた刀を、上段に構え直して魔物へと振り下ろそうとした。

再びそれは失敗に終わる。

突然横合いから衝撃を受けて、法子はふつとばされて転がった。その体には少女が一人抱きついている。

攻撃を受けたと思った法子は、全身総毛だつて、必死になって体に巻き付いた何かを引き剥がす。引き剥がした何かと目が合った。

良く見ればそれは先日助けてくれた魔法少女だった。丈の短いドレスの様な白い衣装を着たその魔法少女は、悲しげな顔をして法子の事を見つめていた。

「駄目だよ」

魔法少女が、そう諭す様に呟いた。法子にはどういう意味だか分からない。だが言葉に込められた切実な響きに何かしらを感じ取って、法子は魔法少女の話聞く事にした。

「どういう事？ 私はあの魔物をやっつけようとしたのに、どうして邪魔したの？」

それは本心からの言葉だったが、一方で既に法子の中にはその疑問に対する漠然とした答えも持ち合わせていた。

「駄目！ あの子は悪い子じゃないんだよ！ それを殺そうとしちゃ駄目！」

ああ、やっぱり。視線を逸らすと、魔物が震えている。

「でも、あれは魔物で」

「そんなの関係ないよ。あの子だって生きてるんだから。痛みも感じる普通の生き物なんだから」

あの魔物が何をした。殺されるだけの謂れがあつたのか。

そう問う魔法少女に法子は心の中で必死に反論した。

ある。魔物は悪だ。人を害する事しかしない。放っておけばさらに強力な魔物を呼んで、放っておけば世界が滅びる。魔物は悪だ。だから、だから殺さなくっちゃいけないんだ。

法子は何度も何度も心の中でそう繰り返す。だが声には出さない。結局八つ当たりでしか無い事など自分でも分かっていたから。だが反論は出来ないものの、止めると言われておいそれと従える程、法子のやるせない感情は軽くない。魔法少女の悲しげな目を睨み返した。

法子が魔法少女へ抱いた感情を読んで、タマが慌てた様子を伝えてきた。

「法子、君は一体何をする気だ」

「決まってるでしょ」

法子の親指が刀の鍔を押し上げる。魔法少女を敵と見定める。

「ここは退こう。これ以上衝突すると戦いになる」

「戦いは望むところだよ」

「目的を忘れたのかい？ 君の目的は魔物を倒して人を救う事だろ
う？」

「その魔物を庇うなら、排除して目的を遂げるだけ」

「このままじゃ本当に殺す事に」

「だから何？」

完全に頭に血が上った法子には、タマの言葉も届かない。ただ魔物を殺す、邪魔者を排除する、二つの事にしか意識が向かない。

法子が唸る様に言った。

「魔物は悪だよ。痛みを感じようと、生きていようと、悪さをする
なら排除するだけ」

そうして刀を構える。

魔法少女は驚いた様子で、一度振り返り、背後の震える魔物を見てから、再び法子を見て懇願する様に言った。

「それなら帰してあげれば良いでしょ？ 何も殺す事は」

その必死な姿に向けて法子は思いつきり刀を抜き放った。だが刃が届く前に魔法少女はまるでバネに弾かれた様に後ろへと跳びあがり、魔物の前に着地した。

「どうしてもこの子を殺そうとするの？」

魔法少女が幾分冷めた口調でそう尋ねてきた。それに対して法子が怒鳴る。

「当たり前でしょ！ そいつは悪い奴なんだから！」

言い終えると同時に、法子は地面を蹴った。目にもとまらぬ速さで、一気に距離を詰める。と、魔法少女は杖を掲げて応戦する気配を見せた。

もしも立ち向かってくるなら相手よりも早く切る。もしも避ける様なら、そのまま素通りしてあの魔物を切る。そんな単純な作戦を

立てて法子は魔法少女へと突っ込んだ。

突然、目の前が爆発した。強烈な熱気に晒され、思わず立ち止まると、今度は煙が襲ってきて、法子は咳き込んだ。

煙で辺りが見えない。何処からいつ攻撃されるか分からない。恐怖を感じながら、とにかく煙から脱出しようと、法子は焦って横に跳んだ。幸い煙の量は少なく、すぐに煙から抜け出せた。そうして辺りを見回すと、フロアの反対側に魔法少女が立っているのが見えた。その頭上に光で出来た人の頭大の魔法円が四つ並んでいた。

「魔法陣……あれは」

「とても基本的な魔術だね。そういえば今日の授業でもやっていたな。ただ魔力を飛ばすだけのお手軽魔術。でも込められた魔力が強大だね」

「どうしよう」

「もう一度言うよ。退きな。これ以上続けても何も良い事が無い。

魔物はその同業者に任せて、君はこの場から離れるんだ」

「嫌！ それだけは絶対に嫌！ それじゃあ、私の負けじゃない！」

絶叫して再び駆ける。折角魔法少女になれたのに、魔法少女の世界でも自分は駄目なのか。そんな思いを振り払いたくて、法子は必死に駆けた。

遙か先の魔法少女の頭上には今や四つの光球が現れて、ぎちぎちと辺りに嫌な音をまき散らしている。

「避けなきゃまずいよ」

もうタマの言葉には答えずに、法子は刀に手を添えてじつと光球を見つめ続けた。

光球が一つ飛んでくる。拍子抜けする程ゆっくりとした速度。法子はそれを横に跳んで回避した。そこに二つ目の光球が飛んでくる。今度は物凄い速さ。横に跳んで体勢を崩した法子へと狙いを済ませた一撃だった。

迫って来る光球に驚いた法子は、無理矢理地面を蹴って何とか上へと逃げる。その際に避けきれず右の足に光球が当たった。激痛が

走ったが、不思議な程動揺が無かった。痛みには顔を顰めつつ、体を反転させて、傷ついた右足で天井を蹴り、更に距離を詰める。

三つ目の光球が跳んでくる。避ければまた同じ事になる。そう判断して法子は刀を抜いて、光球を切った。魔力を込めた一撃で光球は霧散する。そこに四つ目が襲ってくる。無理な体勢から何とか刀を返して光球を切る。力はまるで入っていないが、魔力だけは込めた一撃で、触れた瞬間に光球は砕け散った。安堵して、着地し、更に床を蹴る。

もう光球は無い。魔法少女はがら空きだ。今度こそ切る。法子がそう思った瞬間、目の前にいきなり壁が出現した。止まり切れずに壁にぶつかり、全身に衝撃が走る。壁は砕け、突き破った法子は壁の残骸と共に床に転がり、何とか立ち上がった時には既に魔法少女は遠くに退き、再びその頭上に四つの光球を作っていた。

忌々しい思いで胸が一杯になる。法子は歯ぎしりしながら再び魔法少女へ向かった。ゆっくりと一つ目の光球が。法子はそれを刀で切った。そこに二つ目の速い光球が。法子は何か刀の先をその光球へ触れさせた。光球は砕けた。触れさえすれば防げる事に気が付いた法子は刀を前に構えて、そのまま駆けた。そこに三つ目の光球がやって来る。触れて壊れる。四つ目がやって来る。触れて壊れる。今だとはかりに力強く踏み出そうとして、足をもつれさせて転んだ。床に擦れて皮膚がそぎ取られるが、すぐに治っていく。見れば先程光球が当たった足から痛みが無くなっていた。体の傷が治っていく。そのくせ体は動かない。

「限界だね」

タマの声が伝わる。法子がそれを無視して弱々しく立ち上がると、魔法少女の頭上には既に四つの光球が用意されていた。

「初めての本格的な戦闘にしては良く動いていたよ」

一つ目が飛んでくる。法子は何とか刀を掲げて光球に触らせ打ち破る。

「でも疲労が極まった」

二つ目が飛んでくる。法子は刀を触れさせて、だが光球に変化はなく、そのまま突っ込んできて、法子は衝撃を食らって後ろに飛んだ。

「残念ながら君の負けだ」

三つ目は飛んで来ない。代わりに魔法少女が近付いてきて、腹這いになって何とか顔を上げる法子の鼻先に杖を突き付けた。魔法少女の目は驚く程冷たい。

殺される。咄嗟にそう思って、法子は後ずさろうとした。だが動けない。手足を微かに動かしただけ、惨めな姿をさらしただけだ。

魔法少女の杖に光が灯る。魔力が込められていく。それが放たれれば、死ぬ。

殺される。再びそう思って、法子は目と鼻から液体を流して、手足を少しずつ動かして逃げようとする。だがそれすらも次第に出来なくなつて、体は完全に床へ這いつくばり、顔も上げる事が出来ず、顔をくしゃくしゃに歪めながら法子は助けてと心で願っていた。

法子が心の中で必死に助けると繰り返していると、やがて頭上から優しい声がかけられた。

「どう？ 殺されそうになるのがどれだけ嫌な事か分かった」

その声音に、自分の命が救われる可能性を見出して、法子は顔を上げようとした。だが上げられない。体が言う事を聞かない。口から涎が垂れるだけ。

「ね？ もう二度と酷い事はしようとしなくて、約束して」

最後の言葉だけ妙に底冷えしていた。動かないはずの法子の体が動いて、何度も頷いた。

「分かってくれてありがとう。それじゃあ、ばいばい。あ、そうそう、あの子は大丈夫。私がちゃんと帰しておくから」

足音が離れていく。それから何か音が聞こえて、しばらくして止んだ。後には外からの喧騒が聞こえてくるだけだ。

魔法少女は居なくなった。命の危機が去って安堵した法子は、急に悔しくなった。流れていた涙が更に多くなる。何かにすがりたくて、法子はタマに尋ねた。

「ねえ、タマちゃん。私間違ってたの？」

「押し通せない正しさなんて存在しないよ。でも、私はあの同業者の言葉も間違っていると思うね」

「どういふ事？」

「理由は二つ。

一つ目は授業で習ったかもしれないけれど、魔物は向こうの世界の概念に守られているからそう簡単に死なない。首を切るうが真つ二つにしようが時間をかければ元の状態に戻る。だから君がさつき何をしようとかあの魔物を殺す事は出来なかった訳だ。だからあの同業者が魔物を殺す罪で君を糾弾したのは間違っている。起こりえなかつたんだからね。

二つ目に、魔力を有するものは魔術に対する抵抗が備わっている。魔物だって魔力を持っている。だから魔物を向こうの世界に帰す送還の魔術を行っても、魔物の抵抗力が働いて上手くいかない。だから抵抗力を少なくしないといけない訳だけど、その一番簡単な方法が肉体を痛めつける事だ。君やあの同業者程度の力量じゃそれしか選択肢が無い。つまりあの同業者だって抵抗力を落とすには結局暴力に頼る必要がある。君がやろうとした事と、意識の差はあれ同じだ。

あの同業者が君の心を読んで、その上で送還の為に傷付ける自分と、憂さ晴らしの為に傷付ける君との、意識の差を説いたなら分かるけど、そういった様子も無かったし。結局あの同業者は目の前で行われる残虐性のみに着目して、それを批判しようとする理屈を付けただけだ。だから間違っている、と私は思う」

「そっか」

タマの長々しい説明は法子の頭にほとんど入って来なかった。けれどその言葉が法子を励ますためのものである事は分かった。だからこそ、それに法子は感謝して、同時に悔しい思いが強くなった。

魔法少女になれば変われると信じていた。魔法少女になれば自分は何か豪い人間になれて、学校生活にだって変化があるって信じていた。でも現実はこちらだ。学校では前にもまして居心地が悪くなり、外では自分勝手な八つ当たりで魔物を殺そうとして同じ魔法少女にそれを諷められ、更にその魔法少女に楯突いて完膚無きにまで叩きのめされた。

魔法少女になったから酷い目に遭ったんじゃないで、魔法少女になっても変われなかった。それが悔しくて悲しかった。テレビでは日夜魔法少女の活躍が採り上げられ、その華々しい戦果を誇っている。一方で自分は地面にへばり付いて惨めな姿を晒している。その差が悔しかった。魔法少女になって変わる人間が居る一方で魔法少女になっても変われない自分が居る事が悔しかった。

惨めな自分の中に縷々として残っていた最後の希望、魔法少女に

なれば自分も変われるという幻想が取り払われ、後にはいつも通りの無力な自分に対する悔しさだけが滲んでいる。それが虚しかった。法子はうつ伏せになったまま唇を噛んで、涙を袖で拭いた。だが涙は後から後から流れてくる。

「法子、君が悔しいと感じるのは分かるよ」

タマの優しい思念が法子の心に響いた。

「でもね、前にも言ったけれど、まだ始まったばかりだ。これから幾らだつて強くなれるし、これから幾らだつて豪くなれる。勿論、魔法少女だけじゃないさ。君はまだ子供だよ？　これから幾らだつて良い方向へ向かえるんだ」

優しい言葉が胸に沁みた。鼻の奥が痛くなって、とうとう法子は泣き声を上げ始めた。

それに対してタマが更に励まそうとした時、遠くで人の声が聞こえた。魔物が帰った事で人払いが解かれたのだ。

「人が来るみたいだ。もう体は回復している。辛いだろうけれど、立ち上がって。すぐにここから立ち去ろう」

法子は言われるままに立ち上がり、人目を忍ぶようにこそそと窓枠に足を掛けて、跳んだ。

屋根の上を伝いながらの帰り道。出来るだけ人に見られない様に帰る自分の姿がまたも惨めに思えて、法子は嫌になった。

「星が綺麗だよ」

唐突にタマがそんな事を言ってきた。

星空なんてどれも同じ、ただ暗い背景に白い点が散らばっているだけ。常々そんな事を思っ取らたてて感動をした事が無かった法子は、今回もだからどうしたのだろうと投げ遣りな事を考えながらぼんやりと上を見上げて、そこにある星空の美しさに打ちのめされた。それは本当に初めての事で、法子はあまりの衝撃に跳び移る屋根を踏み外しそうになった。

法子はしばらく夜空の美しさに見惚れていたが、それも長くは続かず、これは今日の惨めさの所為で心境が変化したからだろうと分

かって、また涙が出てきた。けれどそれは悲しいばかりの涙では無かった。

「もう泣くのはお止しよ」

「うん」

法子は涙を拭う。

そして、でも、と思う。確かに魔法少女になっても私は何も変わらず惨めな思いをしただけだった。でも一つだけ変わった事がある。それはタマの存在だ。初めての友達。いつも一緒に居て落ち込んだら励ましてくれる友達。タマの方は私の事を友達だなんて思っていないのかもしれないけれど

「友達だと思っっているよ」

モノローグに横やりが入って少し興が削がれたけれど、とにかくタマという友達が出来た。それだけは今日の惨めさを全部覆して余りある収穫だ。

法子はそう考えて、そこでふと気が付いた事があって、不安げにタマへと尋ねた。

「タマの目的は何なの？」

「だから何となくだよ。誰かを魔女にして世界を救うっていう使命があるにはあるけど。結局私が何となく人を変身させたいから……かな？」

「そうなんだ。それで、その」

「ずっと一緒に居るよ」

タマが法子の言いたい事を読み取って先に答えた。

「本当に？」

「ああ」

「見捨てたりしない？」

「君がどんな状況にあっても見捨てたりしない。ずっと一緒に居る。約束するよ」

その言葉で今日の苦労は全部消え去った。十分だ。私は幸せだ。そう考えて法子は方向転換をして、一際大きく跳ねた。

あの公園へとやって来た法子にタマが尋ねた。

「どうしたんだい？ 帰るんじゃないかったのか？」

「ううん、ちょっと修行をしていこうかと思って」

「動ける位に回復したとはいえ、まだ疲労は強いだろう。帰った方が良いと思うけれどね」

「もう今日みたいな思いはしたくないから」

「そうか。なら何も言わないよ」

法子は空を見上げた。先程美しいと感じた星空はいつもの無機質な夜空に変わっていた。

さて修行をしようと気合を入れた時、背後に気配を感じた。続けて声が投げられる。

「何だ。魔物かと思ったら同業者か」

振り返ると、昨日の騎士が居た。全身を黒い鎧で覆い、黒い兜で顔を隠し、黒いマントをはためかせている。その口元には皮肉気な笑みが浮かんでいた。

「あなたは」

「あなたの同業者だよ。魔物が居ないなら」

そこで騎士の言葉が一瞬途切れる。

「あんたやけに傷ついているな。魔物との戦いで消耗したのか？」

法子は自分の体を見回した。だが何処にも傷は見当たらない。もう治ったはずだけれど。

不思議そうにする法子にタマが言った。

「きっと魔力が減っているのを見てそう言っているんだよ」

成程、そういう事かと思って、騎士の問いに答えようとして、それが敗北という自分の恥部に当たる事だと気が付いて口を噤んだ。

「どうした？ まさかまだ辺りに居るのか？」

騎士の声音が段々と真剣味を帯びたものになっていく。法子は慌てて首を振った。

「違います。もう魔物は居ません」

「そうか、やっぱり魔物が居たんだな。それであんたが追い払ってくれたのか」

「いえ、別の人が」

騎士はしばらく黙って法子を見つめてから、やや声を落とした。

「あんた負けたのか」

痛いところを突かれて法子の顔が歪む。それが答えとなる。

騎士は少し申し訳ない気持ちになって（自分では）優しい（つもりの）言葉を掛けた。

「みたところ、まだ変身出来る様になってから日が浅いだろうか？
一つの負け位で気にする必要は無い。闘っていれば嫌でも敗北は付きまとう」

そう言われても悔しいものは悔しいのだ。先程までの法子なら反発を抱いていたかもしれないが、タマとの絆を感じて穏やかな気持ちになっていた法子は、その言葉を素直に受け取った。

とはいえ、やはり続けたい話題ではないので話を変えようと、法子は昨日自分を助けてくれた事について尋ねようとして、やっぱり止めた。相手は法子の事を憶えている様子は無い。昨日の事は本当にただ魔物を退治しようとしただけなんだろう。そう考えて、何故だか法子は残念な気持ちになった。

「敗因は？」

「え？」

唐突な騎士の言葉に法子は聞き返した。

「負けた理由」

何だか遠慮のない人だなと思ったが、不思議と不快感は湧かなかつた。相手の方が同じ変身ヒーローとして遥かに格上の様子だからかもしれない。

「負けた理由と言われても、相手の方が強かったから？」

「それじゃあ、何にもならないだろう。自分がどうして負けたのかを冷静に分析しなくちゃ」

法子は駐輪場での戦いを思い出す。思い出しても圧倒された記憶

しかない。力の差がありすぎたからとしか言いようがない。

そこにタマのつつこみが入った。

「いや違うだろう」

そう言われてもどうしてだか分からない。考えあぐねる法子に騎士は助け船を出した。

「なら、どんな戦いだったか教えてくれ。第三者の目から見れば分かる事もあるだろう」

そう言われても、負けた事を話すのは恥ずかしい。まして同じ魔法少女に負けた等とは言いたくなかった。でも負けた原因というのは確かに気になる。

どうしよう。

「話してみれば？」

何故だかちよつと怒っているタマの言葉に促されて、法子は迷った末に駐輪場での戦いを騎士に話した。ただし戦った相手は魔法少女ではなく、あくまで魔物という事にして。

法子が話し終わると騎士が一つ頷いた。

「成程な。どうやら相当強力な魔物だったみたいだな。あるいは魔導師か。聞けば初めての戦闘だったんだろう？ それにしては良く戦ったと俺は思う」

「えっと、ありがとうございます」

ちよつと上から目線ではあるけれど、褒められたのは確かで、何だか法子は気恥ずかしくなった。

「でだ。肝心の敗因だけど、それは接近戦にこだわった事だろうと思っ」

「接近戦……」

「そう、不用意に近付いた結果、相手の魔術にしてやられた。遠くから攻撃する手段があればもつと慎重に闘えていたはずだ」

騎士の発言にタマが法子の心の中で噛み付いた。

「そんな風に慎重に闘ったらすぐに魔力が尽きただろうけれどね」
勿論騎士には聞こえない。法子にはどちらが正しいのか分からない

いので、おろおろとしながら成り行きを待った。

「どうやら遠方に届く攻撃は持つていない様だな」

騎士がそう言っつて、離れた場所にある砂場を指差した。

「見ててくれ」

すると砂場から柱がせり上がってきた。それに対して騎士は剣を抜き、体を半身にして、剣を持った腕を体に巻き付かせるようにして一呼吸置く。構えた剣に魔力が蓄えられていく。そしてその貯めた力を、剣を振ると共に解放した。風切り音が鳴って、再び静寂が訪れる。一拍遅れて、柱の中心が横一文字に砕け散り、弾けて、柱は真つ二つになった。

「おお」

法子の口から思わず感嘆の吐息が漏れる。

騎士は法子に向き直つて、口元を微笑させた。

「魔力を剣に込めて放つ。単純だけれど、その分使い勝手が良い。遠くにあるとはいえ、切る事に違いは無いから魔術として意味づけもし易い。だから簡単に出来る」

法子はしきりに頷いた。その様子に騎士は笑みを強くした。

「そんな大した助言じゃない。ま、役に立つと良いな」

法子はまた頷いて、ふと首を傾げた。

「あの、教えてくれるのはありがたいんですけど、どうしてこんなに優しくしてくれるんですか？」

法子が疑問をぶつけると、騎士は背を向けて歩き始めた。

「ヒーローだからさ」

そう呟いて、騎士は剣を納める。

「それじゃあ、君に世界の祝福があらん事を」

騎士は何故か無駄にマントを翻して高く跳んだ。そしてすぐに夜の闇にまぎれて消えた。

「何だかきざつたらしいというか恥ずかしい変な奴だったね」

注意を騎士の消えた闇夜に向けながら、タマは法子へそう思念を送った。

「カツコ良かったね」

法子がそれに対してぼーっとした様子で答えた。

「は？」

「ヒーローか。私もあんな風になりたいなあ」

「いやいやいや。あんな気取ったのが良いの？」

タマの否定に耳を貸さずに法子はしばらく騎士の消えた方角をうつとりと眺めてから、やがて砂場に立つ柱に目を向けた。

「それでさ、タマちゃん」

「どうしたの？」

「さつき教えてもらった技、どう思う？」

法子としては直ぐにでも覚えて使いたかったが、タマが騎士に対して良い感情を抱いていなさそうだったので、遠慮してそう聞いた。それに対してタマはちよつと不機嫌そうに答えた。

「まあ戦術の幅が広がるし、覚えて損は無い」

「そっか！」

法子は早速刀を構える。

「それでどうすればいいの？」

「それぞれの感覚によるから何とも。とにかく対象を切りたいたいと思えば良い。あの騎士も言っていたけれど、とつても簡単だから、やってみればすぐに出来るんじゃないかな？」

「分かった」

法子は刀に魔力を込めた。そうして砂場の柱を見定め、体をゆつくりとねじって、思いつきり解放して刀を振り回した。勢い回って一回転して倒れ込み、しりもちをつく。

目を回しながら砂場を見ると、柱に切り込みが入っていた。

「やった！ 出来た！」

「お見事。でも、あそこを狙ったの？」

切り込みが入っているのは端の方である。法子が狙ったのは柱の中央だ。

「ちよつと違うかも」

「百発百中で当たる様にしないとね」

「むっ」

法子は立ち上がって刀を構え、それから何度も刀を振った。柱の傷がどんどん増え、時に切れて柱がどんどんと短くなっていく。

しばらく経って、ようやく狙い通りに切れる様になった頃に、タマが言った。

「はい、そろそろ止め」

「ええ！ ちょっと待って。ようやく当たる様になってきたんだから」

「気付いてないのかな？ また倒れるよ？ 間違いなく、明日は今

日よりも体が重くなるからね」

「うっ」

「帰る為の力も残しておかなくちゃいけないし、今日はもう切り上げ」

「はい」

法子は渋々刀を納め、公園の時計を見上げた。

「あ、もうこんな時間！」

「どうしたの？」

「夕飯の時間だよ！ 早く帰らないと」

法子は急いで跳びあがり、屋根の上を渡りながら、家を目指した。その途中で法子が嬉しそうに言った。

「何とかあの技をちゃんと使える様になりたいなあ」

少し前の落ち込み様など無かったかの様な嬉しそうな声にタマは少し不思議に思う。どうしてこんなに元気になったのだろう。あの騎士の影響か、あるいは新しい技を身に付けたからか。良く分からない。

「やる気を出してくれたのは嬉しいけれどね。自分の体は大事にしてよ」

「分かってるよ。でもね」

「でも？」

「私はヒーローだから多少苦しいのは我慢するよ」

「そういうもの？」

「そういうもの。今はまだ未熟かもしれないけど、これから沢山の人を救って、みんなの笑顔を守る立派なヒーローになるから」

タマには法子の語る言葉が何処となく子供っぽく思える。実際に学生と言えば大人から見れば子供なのだし、当然と言えば当然かもしれない。

とはいえ、子供っぽいかもしれないが、法子の明るい言葉がタマには嬉しかった。傍に居る者が明るくなれば自然と嬉しくなるものだ。

「か、体が……動かな」

法子は立ち上がったから体を硬直させて今さっきまで寝ていた布団へと倒れ込んだ。

布団が浮き沈み、跳ね上げられて、それから仰向けになって大字になる。

「だから今日はもう起き上がらない」

そう厳かに宣言した法子に対して、タマが呆れて呟いた。

「昨日もそんな事を言っつて、一日中寝ていたよね」

「うん、でも今日も無理」

「はあ、若いのが何て様」

「タマちゃん、おばさん臭いー」

法子は体を丸めて掛布団に絡みつくと、二度目の睡眠に入ろうとする。

そこへ外から声が掛かった。

「法子ー、起きてー。昨日も一日寝っぱなしだったんだから、今日
はもう起きなさい！」

「う」

「法子、ちよつと頼みたい事があるんだけど」

母親の声が聞こえてくる。それは亡者を駆り出す狩人の声。聞けば抗う事は出来ない。

そうして面倒なお使いを頼まれる。

「おや、母君からだよ？」

「もう！」

法子は不満を込めて起き上がった。

「おや、今日は起き上がらないんじゃないのかい？」

「行くしかないでしょ」

法子が痛みに耐えるぎこちない動きで用意をしている姿に、タマ

は笑った。

「大変そうだね」

「本当に動きたくないのに。お母さんの馬鹿」

「私としては中に籠られるよりは外に出てもらった方が嬉しいけど」
苛立つ法子と笑うタマ。そこにまた母親の声が届いた。

「ねえ！ 法子ー！ 起きてるー？」

「今行く！」

法子は大きな声で答えてから、部屋の扉を開けて、体を引きずりながら下へと降りていった。

「全く、何で私があいつのお弁当を届けなきゃなんないの？」

「まあまあ。可愛い弟君の為だろう」

「全然可愛くない！」

「そうかねえ。良い弟君だと思っけれど」

休日の河川敷、法子は土手の上を歩きながら愚痴りつつ、下で行われているサッカーに目を向けた。

今日は河川敷でサッカー大会をやっている。幾つかあるコートに小学生、中学生、高校生、社会人と分かれて、大声を張り上げながらボールを追っている。法子の弟も小学生の部に参加しているはずだ。法子はサッカーにまるで興味が無かったので、どうでも良さそうにわらわらと動く選手や、わやわやと野次っている観客を眺めてから、視線を逸らし、そして凄い勢いで視線を戻した。

見れば土手の下、座って観戦している人々の中に見知った顔があった。同じクラスの生徒だった。何人かで固まって時折はしゃぎながら、中学生のコートを眺めている。名前も分からないが確かにその顔を毎日の様に見ている。

見つかりたくなかった。元より学校の人と喋るのは怖い。もし取り囲まれたらどうしていいか分からない。一対一で話す事も無理なのに、複数人に話し掛けられたら、それこそ地獄を見る事になる。例え、相手にいじめの意志が無く、端から見てもただ単に話しかけ

ているだけでも、それは法子にとってこの上ない苦痛になる。

まして昨日の事がある。法子は出来るだけ見つかる事の無いようにこそそそとした滑稽な足取りで、コートに熱い視線を送るクラスの他人達の後ろを通り過ぎた。

小学生達のトーナメントが行われている場所では法子よりも幼い子供達が掛け声を上げ、ボールを追っている。ボールが高く飛んだ選手も観客もその行方を追うが、法子だけはコートを見回して弟の姿を探す。辺りから喚声上がる。俄かに色めきたった観客達の間には視線を這わせていると、ようやく弟の姿を見つけた。

ようやく面倒なお使いから解放されると安堵して、法子は重たい体に鞭打って弟の所に向かおうとして、足が止まった。

コートの真ん中に獣が居た。獅子の頭に、人よりも二回り大きい筋肉質な肉体、両手両足には鋭く長い爪が生え、如何にも危険な様子を漂わせている。唸り声を張り上げながら、敵意を漲らせて、辺りを睨みまわしている。

魔物だ。

魔物の周りには囲む様にして沢山の人が集っている。遠巻きにして眺めている。何処か不安そうに、されど楽しそうに、猛る魔物を囲み、ある者は語らい、ある者は感嘆し、ある者は写真を撮り、ある者はある者は笑っている。余裕に満ちた顔で不安げに楽しそうに魔物を眺めている。

彼等が魔物の危険を知らない訳ではない。実際に彼等は思考の片隅で、人を殺す魔物の恐怖を思い、胸を弾ませている。ただ彼等は出来ないだけなのだ。被害者が自分になる可能性をひたすら想像出来ないだけなのだ。

更に土手の上にも沢山の観客が居る。こちらの観客達は、魔物から離れているし、暴れ出してもまず殺されるのは土手の下で魔物を遠巻いている人々だろうと信じて、あからさまに余裕の表情を浮かべている。

法子はそれらの顔が鼻についた。

「馬鹿じゃないの、こいつ等」

「まあ気にするな。こういうもんだ」

「むー」

「それよりも魔物が現れたんだよ。君にはやるべき事があるだろう？」

「それじゃあ、早速変身しよう」

「それは良いけど。良いのかい？」

タマが尋ね返してきた。法子にはその意味が分からない。

「何が？」

「辺りに結構な数の人が居るけど、魔法少女だつてばれて良いのかい？ 流石に変身するところを見られたら正体がばれるよ」

「あ」

法子が辺りを見回すと、確かに多くの群衆が居る。そのほとんどが魔物を見つめて、目を逸らす様子は無いが、中には別の場所を向いている者も居るし、いつなとき注目されるか分からない。

「どうしよう」

「自分で考えなつて」

「でも」

法子はまた辺りを見たが、人目を阻めそうな、変身に適した場所は無い。

「どうしよう。人に見られない場所なんて無いよ」

「いやいや、あそこに丁度良い建物があるだろう」

タマの意志に促されてそちらを見ると、確かに小さな建物がある。だが法子はその建物をあえて無視していた。

「やだよ、あれトイレだもん」

「ああ、そうなのか。でも別に良いじゃないか」

「いやー。汚い！」

「そんなに汚く見えないよ。うん、大丈夫」

「トイレで変身する魔法少女なんて嫌！」

「そんな事を言っただって他に無いだろう。減るものでもないし大丈夫」

夫

「プライドが減る！」

「文句があるなら代案を出してくれ」

「うう。で、でもさ、例えば私がトイレに入って、その後に変身した私が出てきたら、それを見ていた人にばれちゃうかもよ？」

「その点は安心してくれよ。前にも言ったけれど、変身さえすればばれる事は無い。もっと言えば、変身する所さえ見られなければ、例えどんなに怪しい状況だろうと変身前と変身後が結び付けられる事は無い」

「むづ」

遂に退路は極まって、法子は渋々と言った様子でトイレへと歩み始めた。

「魔法少女がトイレ……か」

「嫌なら魔法少女を止めるかい？」

「やだ。続ける」

法子がトイレに入って十数秒、トイレの中から魔法少女が現れた。突然の魔法少女の出現に人々は好奇と期待の視線をその魔法少女へと注ぐ。沢山の視線に晒された魔法少女の表情は晴れやかな笑顔だったが、少しだけ悲しげだった。

法子が恰好を付けて跳び上がり、人々の頭を越えて再び魔物の居るコートへ戻ると、事態は全く変化していなかった。

相変わらず魔物は唸り声を上げるだけ。観客達は楽しそうにそれを取り巻き、写真を撮っている。凄惨な様子はまるで無い。

「何だかほのぼのしているんだけど」

「そうだね」

「襲つたりとかしないの？ あの魔物」

「まあ、魔物の考えは一つじゃないからね。あいつは別に人を襲おうと考えている訳じゃないんじゃないかな？」

法子の表情に微かに困惑が浮かぶ。

「じゃあ、良い奴なの？」

「良いも悪いも無いけれど。何にせよ、魔物は追い返さなくちゃいけない。前にも言っただろ？ 魔物って言うのは居るだけで場を汚染する。それが魔導師を呼び出して、魔導師が場を聖別して、最後に魔王が出現する。とにかく居るだけで悪い影響を及ぼすんだ」

「そういえば言ってたね」

「これ位、魔術に携わる者なら知ってて当然だと思っただがね」

「だって学校で習ってないもん」

溜息を吐いたタマを無視して、法子は剣を抜いた。周囲からおおという歓声上がる。

ちよつと気分を良くした法子をタマがたしなめる。

「気を付けるよ法子。あれは魔導師だ。どうやらこの辺りは大分汚染が進んでいたらしい」

「魔導師って強いの？」

「少なくとも普通の魔物よりは。周囲の汚染された魔力を吸い上げるから、魔力の量は桁違い。それにほとんどが固有の力を持っている」

「成程ね。一筋縄じゃいかないんだ」

「ああ、けど今は出現したばかりでまだまともに動けないはずだ。だから倒すなら今」

「そうなんだ。じゃあ」

法子は剣を腰に据えて魔物へと向かう。

「あ、おい、ちよつと待て」

諫めようとするタマの言葉も聞かずに法子は走る。

魔物は腕をだらりと下げて、尚も雄叫びを上げている。法子を見る様子すら無い。

行ける。と確信した法子は剣を力強く握り、魔物の目前で力強く大地を踏み締め、その刃に魔力を通し、

「防げ！」

タマの思念に反応して法子は咄嗟に刀を止めた。刹那、巨大な衝撃

を受けて法子は跳ね飛ばされた。

着地した法子は理解する。法子が魔物の目前に迫った瞬間に、魔物が垂れ下げていた腕を振り上げて法子を跳ね飛ばしたのだ。刀が先に当たったお蔭で飛ばされるだけで済んだが、それで無ければ爪によって切り裂かれていた。

「大丈夫か？」

タマの言葉に法子は頷いた。

周囲から喝采が湧いた。どうやら法子と魔物の戦いを面白がっているらしい。法子は自分に注目が集まる事を嬉しく思う反面、危険な戦いなのに楽しむ観客を忌々しく思った。

法子が苛々としてしていると、頭の中にタマの小言が響いた。

「あのな、幾ら相手の力量が下だからって、攻撃してこない訳でも攻撃をくらわない訳でも無いんだ」

「分かってるよ、そんな事」

法子はタマの換言に不機嫌な調子で答える。

「分かっているなら良いんだけどね。それでどうするんだい？」

「どうすれば良いの？」

法子が更に不機嫌な調子になって尋ね返した。

「は？」

流石にタマも啞然とする。

「私は戦いの事なんて分からないもん。タマちゃんの方が詳しいでしょ？ どうすれば良いの？」

「いや、もつと自分で考えてくれよ」

「分かんないよ。良いから教えてよ。どうすれば良いの？」

タマは一度溜息を吐いて、

「甘やかしすぎたかな」「うるさい」

沈んだ調子で答えた。

「良いかい？ 今度だけだよ」

「はいはい」

「まあ、見た所、相手は接近戦が得意みたいだ」

タマがそう言った途端、魔物が腕を振り上げた。嫌な予感がして、タマの思考が止まる。

続いて、魔物は腕を振り下ろした。タマの中の嫌な予感が加速する。

「とにかくこの場から離れる！」

タマの叫び声が法子の頭に届いた後、一拍遅れて法子はその場から飛びのいた。法子が一瞬前に居た場所がひずんだ。何も無い空間に爪痕状のひびが入り、まるでガラスでも割れるみたいにはじけ割れた。

「何？ 今の」

「おそらくあの魔物の能力、というか技だろうね。離れた空間に自分の爪を届かせるんだ」

魔物がまた腕を振り上げた。法子は狙いを定めさせない様に動き回りながら反撃の機会を窺う。

「それで？ 向こうは接近戦だけじゃなかったみたいだけど」

「ああ、そうみたいだね」

「どうすれば良いの」

「はあ、ホントちょっとは自分で考えてくれないかな」

「良いから」

「君さ、昨日覚えた事も忘れたの？」

「昨日？ あ」

昨日教わった遠距離まで届く剣撃。確かにあれを使えば近寄る事無く相手を切り裂ける。

「でも相手も同じ様な事やって来るけど勝てるかな」

「実力は君の方が上なんだ。同じ事をすれば勝てる」

「そっか」

法子は笑って刀身に魔力を込め始めた。昨日覚えたての新しい技。新技のお披露目だ。出来れば派手に、カッコ良く決めたい。そう、漫画で良くある様に見開きの大ゴマを使う位のど派手さで。

「良いかい？ 狙いは正確に。辺りには人が居る。絶対に当てちゃ

いけない」

「分かつてる。昨日たくさん練習したもん。はずさないよ」

法子は尚も笑って魔力を込め続ける。だがほんの僅かに緊張がよぎった。当てる自信はある。はずすとは思えない。けれど失敗してはいけないと思うと、何だか薄ら寒い気持ちになった。

法子は走り回り、跳び回りながら機を窺う。しばらくして狙いをつけ損ねた魔物の腕が止まった。好機とばかりに法子が込めた魔力を斬撃に換えて、魔物へと打ち放った。

「馬鹿！」

斬撃は過たず魔物を切り裂いて、法子はほつと安堵する。魔物は完全に切り裂かれ、胸と腹が分かれたれ、体の右端が辛うじて繋がっているだけとなった。

安堵した法子の視線の先で、魔物の体はずれ落ちながらゆっくりと倒れていく。

「やった！」

「良い訳あるか！」

「な、何で？」

困惑する法子の視線の先で、魔物はゆっくりと倒れ伏す。倒れた瞬間に土埃が舞い。すぐに風に運ばれていく。土埃が消えた向こう、血を噴き出して倒れる魔物の向こうに、観客が居る。

「強く打ち過ぎだ、馬鹿者」

観客の中に子供が居る。血を流して倒れている子供が居る。

「あ」

倒れた子供の血だまりはどんどんと広がっていく。泣き声が聞こえる。母親らしき人物が泣きながら子供の傍らに座って何かを叫んでいる。周りの人々が子供の元へ集まっていく。

やがて子供は担架に乗せられた。緊張した空気の中、群衆が割れて、子供は輪の外へと運ばれていく。まだ救急車は来ていない。どこかで応急処置をするのだろう。生死の境は時間に依って区切られている。

運ばれていく子供の傍を母親が泣きながらついていく。そのまま子供と共に群衆の向こうに消えるのかと思いきや、ふと母親が顔を上げて法子の事を見た。燃える様な目付きだった。怒りと悲しみと悔しさと恨みの籠った母親の痛々しい視線に晒されて法子は思わず目を逸らした。

逸らした先の観客達もじつと法子の事を見つめていた。

視線を逸らす、その先にもまた目が。目が。目が。沢山の目が法子の事をじつと見つめていた。

人通りの無い道に法子は着地した。そこで力尽き変身を解く。闇夜に溶ける様な衣装は、私服となる。法子は汚れる事も構わずに道の上で跪き無念そうに頂垂れた。

結局あの後、子供を切った法子は再び戦う気力を湧かせる事が出来ず、魔物の方もまた深手に動く事が出来ず、膠着したまま、ただ周囲だけがざわついていた。そこにあの法子を負かした魔法少女がやって来て、魔物を送還して喝采を浴びながら帰っていった。

法子は、魔物と魔法少女が消えてからしばらくの間動けずに呆然と何処でもない何処かを見つめ続けていたが、タマの言葉に促されて立ち上がり、取り囲む群衆の頭を越えてその場を離れた。

離れる際に、悪罵の音が響いたが、心あらずの法子にはその言葉は聞こえず、されど悪罵は法子の耳に届いて確かに心を抉った。

そうして帰る途中、精神と魔力をすり減らし切った法子は遂に力尽きて変身を解いた。誰も居ない闇夜の中で、街灯の頼りない硬質な光に照らされて、法子は呆けた調子から立ち直れずにぼんやりと呟いた。

「何でこうなっちゃうんだろう」

誰にもなく吐き出した呟きは風に紛れて消えていったが、タマだけは聞いていた。けれどタマは答えない。今は傍観に徹し、法子に成長してもらおうと考えていたからだ。自分で答えを見つけて自分で先に進む。法子はまずその当たり前前の事が出来る様にならな

ればいけない。タマはそう考えていた。

今迄タマが変身させてきた者達は皆耐え難い情動を変身の核に据えていた。ある者は復讐の為に、ある者は友を助ける為に、ある者は一族を再興する為に。だからこそその目的の為に皆必死になって変身し目的に邁進した。一方法子の情動はと言えば、きつい言い方をすれば子供の気まぐれの延長である。その理由が悪い訳ではないが、必死になれないのであれば、やはり問題がある。

このままいけば、法子はタマが支えていなければ歩けない人形になっってしまう。

「結構さ、頑張ったんだよ。私にしてはかもしれないけどさ。魔法少女になれて嬉しかった。だから一所懸命頑張ってたさ、でも全然上手くないんだもん。なんでだろうね」

法子が引きつった笑いを浮かべる。タマはそれに何も答えない。

「今日なんてあの子を」

一瞬言葉が途切れた。法子の目から涙が零れ落ちる。

「どうしよう、人切っちゃったよ」

法子が必死に目を擦る。泣きじゃくる。

「死んじゃったらどうしよう」

法子は自分の手を見つめた。直接切った訳ではない。それでも何故だかその手には切った時の感触が残っていた。生温い柔らかい物を切る感触。それは単に料理の際に包丁で鶏肉を切った感触を思い出したものでしかなかったが、今だけは確かに子供を切った感触で、それを感じ続けている内に、自分の頭が狂っていく様な気がした。法子は思わず頭を振って、手の感触を払いのけようとする。

タマは何も言わない。法子が人を殺したとしてもどうこう思わない。今迄の契約者の中にも人殺しは幾人か居た。法子がどんな事をして、どんな法律を破り、どんな倫理観を蹴り飛ばしても、タマはそれを悪い事だとは思わない。

「ねえ、タマちゃん、私どうすれば良い？」

ただこれだけはやめてくれと思う。法子はどうしてこんなにも頼

ろうとするのだろう。今迄一人ぼっちだったから、それを埋めた相手に殊更依存しているのだろうか。それなら下手に励まそうとしてきた事は失敗だったのか。

悶々としつつ、タマは答えた。

「さあね。それは君の問題だろ？」

「冷たい」

法子の沈んだ言葉に苛々してタマは怒鳴った。

「勝手にしろよ！」

法子の呼吸が止まる。

「何でそうなんでもかんでも私を頼ろうとするんだ！」

言い切ってからタマは言っちゃったなあと思った。多分法子は傷ついただろう。それでも自分の欠点に気が付いてくれれば。そう期待してタマが法子の言葉を待っていると、やがて法子が言った。

「……ごめん」

そう謝った。まだ何か言いたそうにしている。タマはもうしばらく待つ。これから頼りつきりにならない。もつと自分の頭で考える。そう言ってくれるだけで良い。そんな言葉を待っている。

けれど法子の言葉はタマが期待したものとまるつきり違うものだった。

「……私、魔法少女辞める」

「は？」

「だって、私、何やっても上手くいかないし、これ以上続けても良くなるなんて思えないし、自分で考えてなんて出来ないし、それに……それに人……切っちゃって、何だかやになっちゃった」

タマは絶句した。本気か？ 一瞬、何か意志伝達の魔術に不具合でもあるんじゃないかと疑う位に、信じられなかった。

「だから魔法少女辞めたい。……あ、勿論、ずつつて訳じゃないと思うけど、多分またやりたくなるだろうし。でも……しばらくの間は魔法少女……辞めたい」

法子が遠慮がちに伝えてくる。その思念を受けて、タマは駄目だ

と思った。

こいつは駄目だ。

「ね？ だからしばらくの間だけ」

「分かった」

「ホントに？」

「ああ。君との契約は打ち切ろう」

「うん！ ありがとう」

嬉しそうに言った法子へ、タマは溜息を伝える。

「やっぱり甘やかしすぎた」

申し訳なさに身を縮こまらせる法子へ、タマは尚も伝える。

「あんまり甘やかすのは良くないみたいだね。次の参考にさせても

らうよ」

「う、うん。きつとまたすぐに元気になると思うから、その時に、

ね」

タマが不思議そうに尋ねた。

「その時？」

「え？」

「どうして君は次があると思っているんだい？」

「だって……タマちゃんが次の参考につて」

「私の次つて言うのは次の契約者つて意味だと思わないのかい？」

法子の思考が止まる。

「何か勘違いしてないかな？」

「勘違いつて……」

「私は人を変身させる使命を持っているんだ。変身しない人間の傍に居続けるなんてあると思う？」

法子が手に握るタマを驚愕の目で見つめた。

「で、でもタマちゃん」

「君が私の事を友達だろうと何だろうと思うのは勝手さ。私だつてそういった関係になる事にやぶさかではないよ。けれどね、いの一
番はまず契約なんだ。一緒に居る者は契約者じゃなきゃ意味が無い

んだよ」

「タマちゃん待って」

「それで君が私との契約を止めると言うのなら」

「違うよ。ほんの少しの間だけで」

「同じ事だよ。君は契約者じゃなくなるんだから」

「タマちゃん、分かった。私が間違ってた。魔法少女辞めないから、だから」

必死に縋る法子をタマは冷徹に振り払う。

「君はヒーローになる事を望んでいたね。けれど今の君の姿はヒーローから掛け離れすぎている」

「ごめん、タマちゃん、ごめん」

「君の言葉にも一理あるよ」

皮肉気な笑いを伝えながら、止めの言葉を放つ。

「これ以上続けても良くなるなんて思えない。全くその通りだ」

タマと法子の繋がりが途切れた。意志伝達の魔術が途絶え、今迄伝わって来ていた相手の精神が伝わらなくなって、法子は狂わんばかりに剣の形をしたアクセサリーに縋る。

「ごめん。ごめんタマちゃん。待ってよ。嫌だよ」

許して欲しい。また話して欲しい。けれど幾ら謝っても答ええない。タマちゃんは完全に怒ってしまった。ならどうすれば良い？ タマとの最後のやり取りを思い出す。タマちゃんが望んでいたのは、私がヒーローになる事だ。私がヒーローになればきっとタマちゃんは許してくれる。

一瞬湧きかけた希望は、すぐさま、けれど、と沈められた。けれど私はヒーローになれなかった。強くなろうと頑張った。人を助けようと頑張った。けれどそれをした結果が、今なんだ。ヒーローになろうとしてもなれなかったんだ。ならどうすれば良い？ どうすればヒーローになれる？

「分かんないよー」

法子が情けない言葉を吐きだした。

出来れば誰かに教えて欲しい。けれどいつも教えてくれたタマチやんはもう居ない。相談出来そうな友達だっついていない。

一人ぼっちなのはずっとだった。だからいつもの日常に戻っただけなのだ。今迄だっって一人ぼっちを寂しいとは思いつつも、嫌だと思いつながらも、それでも何処か慣れた自分が居て、一人ぼっちでも平気だと思いつ自分が居た。

だからおかしかったんだ。私に話し相手がいるなんて。タマチやんと出会ったこの数日間だけが異常だったんだ。また元に戻るだけなんだ。昔と同じになるだけなんだ。けれど、それでも、その異常な数日間が、この上の無い幸福感を感じた数日間が、確かに法子を変えていて、一人ぼっちな自分を思うと死にたくなるくらいに、嫌になった。

朝起きて、いつもの通り用意をして、剣の形をしたアクセサリーを手に取って、アクセサリーから流れて来るはずの精神が感じ取れなくて、そこでようやくはつきりと覚醒した。昨日の事を思い出して、朝の清々しい気持ちから急転直下、鬱々しくなる。

幾ら話しかけても答えてくれない。何度謝ってもうんともすんとも言ってくれない。悲しくなって目に涙が浮かんだ。

昨日、あの公園からどう帰ったのかあまり覚えていない。泣きながらブランコを漕いでいたところまでは憶えているのだが、それ以降は曖昧だ。多分放心しすぎて、無意識の内に帰ってきたに違いない。

結局、タマは法子と繋がってくれなかった。タマはただのアクセサリーになった。

憂鬱な気分を強くして外を見ると、晴れ晴れとした青空が広がっていた。外はあんなにも明るいのに、自分の心はなぜこれほどに暗いのか。

溜息を吐いて、昨日の事に思いを巡らせて、子供を切った事を思い出して、吐き気がした。近くのビニール袋を急いでとって、その中に口を突き出す。幸いにも涎が少し垂れただけで、吐瀉する事は無かったが、何だか酸っぱい味が口の中に広がって、気持ち悪くなった。

切った。人を切ってしまった。大きく広がった血だまりが思い出される。慌ただしく運ばれていく子供が思い出される。自分に向けられた恨みがましい目が思い出される。

殺してしまった。人を殺してしまった。そう思うと更に気持ち悪くなった。涙は出ない。ただ吐き気が酷い。頭が痛い。壁にぶつかりたくなった。体を傷つけたくてしょうがなくなった。我慢できなくなつて、思いつきり頭を後ろに引いて壁にぶつける。ぶつけると

後頭部に最初は生暖かい張り締める様な感覚。それがやがて鈍い痛みに変わっていった。けれどそれで何が変わる訳でもない。心も全く晴れない。

虚しいだけだった。

部屋を出て一階に下りる。この期に及んで日常生活を送ろうとする自分が浅ましく感じられた。制服を着た自分が何だか許せない。けれど日常生活を捨てる勇氣は、法子に無かった。

リビングに入ると、弟は既に朝ごはんを食べ終わっていた。

「おはよう、姉ちゃん。昨日はどうだった？」

弟の質問は姉が将刀と上手くやれたか気になつての言葉だったが、法子には人を切った記憶が喚起された。顔を俯かせる。答える氣力は無い。

弟はそんな姉を見て、どうやら将刀と上手くいかなかったらしいと早とちりして、話題を変える。笑顔を向けて、楽しそうに語る。

「そっぴや、あの魔物騒ぎ大変だったみたいだよ」

だが法子の反応は無い。その事に焦つて、弟は更に朗らかに言った。

「何だか、怪我人も出たらしくてさ。幸い生きてるみたいだけど、やっぱり姉ちゃんの言った通り、危ないんだな。姉ちゃんが止めてくれて助かったぜ」

そこでようやく法子はのろのろと顔を上げた。

「生きてるんだ」

「え？ うん、意識も取り戻したとか何とか、さっきニュースで言ってたよ。もしかしてその場面、姉ちゃん見てたの？」

「うん、ちよつとね」

法子が元氣無さそうに答えるので、弟はそれ以上話題にするのを止めた。きつと姉は怪我人が出たところを見てしまつてショックを受けているのだろうと思ひ、無神経な話題を反省した。

「じゃ、俺もう行くから」

弟は氣まざくなつて、法子の脇を通り抜け、出て行つた。

残された法子はほつと安堵した。どうやら一命は取り留めていたようだ。人殺しにならなくて済んだ。応急処置を施した人や病院の人達に感謝する。

だがすぐに自分を戒めた。切った事には変わりない。命が助かったとはいえ、傷付けたのは確かなのだ。罪が軽減される事は全く無い。一步間違えれば死んでしまっていた以上、人殺しの称号が晴れる事は無い。

法子が酷く沈んだ様子で入って来た時、その様子にクラス中のみんなが注目した。そしてほとんどが早とちりする。法子さんが落ち込んでいる。あれはきつと一昨日の悪口を本当は聞いていたからに違いない。悪口を実際に言っていた者達は何も感じず無遠慮な視線を投げかけたが、それ以外の者達は何だか申し訳なく思っ、すぐに目を逸らした。

法子はそんな形で注目を浴びている事なんて全く気が付かずに、ひたすら下を向きながら自分の席についた。すぐに教師がやって来て、学校が始まる。

法子はいつもの様に俯きながら学校生活をやり過ごす。だがタマと出会う前の諦念と羞恥の入り混じった無心に近い心ではいられなかった。タマという話し相手が居たという事実は決して心から離れる事は無く、本を読んでも頭に入らず、寝ようとして周りの音が大きく聞こえる。孤独が酷く浮き上がって、法子は涙が出そうな位に悲しくなった。

話したい。話し相手が欲しい。タマちゃんに戻って来て欲しい。そう考え続けているのだけれど、そんな切なる願いもまた自分が一人ぼっちだと実感する為の材料にしかならず、法子はひたすらタマが戻ってくる事と今日という日が過ぎる事を祈りながら、俯いて学校生活を送り続けた。

時は進み帰りの時間にさしかかり、最後の関門ホームルームが始まった。それも教師のちょっとした話が終われば解放される。そう

考えて、法子は早く帰りたいと思い続けたが、事はそう上手くいかなかった。

「あ、そうだ、学園祭ももう一週間前だ。お前等そろそろ準備しとけよ」

教師がぶつきらぼうな調子でそう言った。

法子は嫌なイベントが迫って来たなとやさぐれた気持ちになった。今の最低に沈んだ気持ちで孤独な学園祭を迎えたら死んでしまうのではないだろうか。

「出し物は前に決めたよな。えーっと……何だったかな？」

教師の恍けた発言に、周囲が一斉にカフェだと突っ込む。法子にはその予定調和なやり取りがうっとうしくてたまらない。

やさぐれている法子を余所に、学園祭の話がどんどん纏まっていく。中にはめんどくさそうな人も居るけれど、その人も含めてクラス全体は楽しそうに、学園祭に向けてはしゃいでいる。

ただ一人自分だけが何も喋らずに一人ぼっちで俯いている。本当は周りと同じ様に楽しくやりたいのに。本当は周りの人達と親しくしたいのに。

いつもクラス一丸となる様なこういったイベントは嫌で嫌で仕方が無かったが、今日は何だかいつもより色々と考えてしまう。どんどんと嫌になる。その原因であるタマの失踪を思うと、更に嫌になった。

法子は文化祭に向けたやり取りを聞きながら胸の奥に何か重い者が詰まっていく様な心地がしていた。

きっと私がこんな風にみんなで楽しくする事なんて一生ないんだろっな。

時は早いもので、ついこの間、一週間前に迫ったと謳われていた文化祭がもう明日に控えていた。法子のクラスの準備は着々と進み、既にほとんど出来上がっている。先程看板を作り終えて、後は片づけをしつつ、残りのこまごまとしたところを飾り付けているところだ。

この一週間、法子の心境も様々に変化した。法子の様子は以下の通りとなる。

初めの二日はひたすら落ち込むだけだった。初日はあのホームルームが終わった後、ずっと暗澹とした想像をしながら、自分の駄目さ加減を呪って、家に帰り、何もする気が起きずにそのまま寝た。

二日目、ほぼ初日と一緒だが、ホームルームが終わった後に学園祭の準備があつた。ほとんどクラスとの繋がりが無い法子はまともに立ち動く事も出来ず、ほとんど役に立つ事が出来ず、辺りをうろろしながら、手持無沙汰に仕事をしているふりをしていた。クラスの意見は、この前の陰口で傷ついたので仕方が無い可哀そう、やっぱりあいつは役に立たないクラスのゴミという二つに分かれた。それらの評価はほとんど法子に届かなかつたが、最後の最後、丁度帰ろうとした時に、あいつ本当に使えないな、そんな言葉が聞こえて法子は思わず振り返ってしまった。意地の悪そうな顔達が法子を見て笑っていた。法子は逃げる様に走って帰った。何もする気が起きずそのまま寝た。

三日目、タマを失って沈む気持ちに加えて、更に学校に行きたくないという憂鬱までが混じって、朝からどん底に陥っていった。だが底まで来たのなら後は上るだけで、登校している内に法子の心境に明確な変化が表れる。前日まではタマの事を考えても、ひたすらタマが居ない事に沈むだけだったが、その日はどうすればタマは戻って来てくれるだろうと前向きに考える様になった。必死に頭を働

かせてタマとの会話を思い出しながら、タマが戻って来てくれる為の方法を考えて、学校に着く頃になってとりあえず自分の欠点を直していこうと結論付けた。欠点とは何か。それこそ数えきれない位にあるのだが、法子はその中で一番気にしている事、非社交性を治そうと考えた。そうだ、クラスの人と話してみよう。私が他の人と喋れる様な位にまともになったらタマちゃんは戻って来てくれるかもしれない。まずは挨拶を。心に久しぶりの火を灯らせて、教室のドアを開き、そうして大きく息を吸って、大きな声で朝の挨拶を言い放とうとして　結局声を出せずに自分の席へと座った。駄目だった。話そう話そうと強く思うのだが、実際に行動に起こす事がまるで出来ない。結局、何度も話そうとしては諦めて、放課後まで誰とも話せなかった。学園祭の準備では相も変わらず積極的な参加は出来ないが、せめて少し位は役に立とうと、前日よりは大分働いた。だが頑張ったところで、端から見れば結局少し役に立った位であり、ついでに手伝いの中で相手から話しかけられても法子は喋る事が出来ずに黙っていた為に、クラスの評価は前日より更に明確に分かれた。辛い事があったのに頑張ってくれている。今更何やる気出してんだよ。同情と嫌悪の割合は全く変わらないが、前日よりも法子に注目する人数が増えて、評価は両極端になった。教室から向けられる二種類の視線。法子がもしその視線に気付いたらいつもの如く後ろ向きに捉えて落ち込んでいたであろう。だが幸いにも法子はその視線には気が付かず、ついでに心にはほんの僅かながらも達成感が湧いた。今日は頑張った。これならもしかしたらタマちゃんも。そんな期待をして家に帰るのだが、結局タマは反応をみせてくれず、がっかりしてまた沈んだ気持ちになり、そうして前日と同じで何もする気が起きずにそのまま寝た。

四日目、ヒーローになろうと思った。別れる際にタマは法子がヒーローになれないと失望していなくなつた。ならヒーローになればまた戻って来てくれるんじゃないだろうか。一度は否定した答えを再度吟味して、法子はこれこそ答えだと確信した。答えを見つけた

つもりの法子は何処か嬉しい気持ちで学校へと向かった。学校での様子は前日と変わらない。文化祭の準備もほぼ同じ。今日は加えてヒーローについて考えた。ヒーローにはどうすればなれるのだろうか。帰り道の途中、ヒーローの条件とは強さと優しさではないだろうか。と思いついた。誰にも負けない強さと人を助ける優しさ。そうだ、そうに違いないと勇んで、法子は人助けをしようと思いを固くしながら家に帰る。だが特に困っている人は見つからず、最終的に家の前に落ちているポイ捨ての空き缶を拾っただけで終わった。優しさが駄目なら強くなろうと、腕立て伏せを開始し、三回目で力尽きて、疲れ切った法子はそのまま寝た。

そうして今日、五日目、クラスの人々はほとんど帰り始めて、残りは有志達だけが残っている。法子もこそそとした様子で家路についた。帰り際に、ホントキモいよな、あいつ、という声が聞こえたが、今日は振り返らなかつた。顔が熱るのを感じながら、急いで教室から離れた。結局この一週間、タマは反応してくれなかつた。もしかしたら今持っているのは既に何でもないアクセサリーに過ぎず中身のタマはもう別の所に行ってしまったのではないか。そんな不安が心をよぎる。だがそれを考えても仕方が無い。今はとにかく自分が出来る事をするだけだ。

どうすればタマは戻って来る？ 再び頭を巡らせて、ふと思いつく。アトランという巨大なショッピングセンターがある。最近出来たその商業施設には国内最大の魔術専門店がある。そこにタマは行きたがっていたのではなかつたか。もしかしたらそこへ行けばタマが興味を持って戻って来てくれるかもしれない。

人通りの多い所に行きたくは無かつたが、タマが戻って来る為になら仕方が無い。法子は意を決して道を変えた。

しばらく歩いただけで、法子は死にそうになりながら道脇の石堀に手を掛けた。まだ着かない。一体何処にあるのだらう。情報に疎い法子はショッピングセンターがどの位離れているのか知らなかつた。近いとだけ聞いていたが、それは専用のバスや車で行く場合の

話であつて徒歩で行く距離ではない事を知らなかった。荒い息を吐きながら、そもそも道順すら知らない事を思い出して絶望的な気持ちになつた。

ふと近くから人ごみ特有のざわつきが聞こえてきた。その賑やかさに思わず踵を返したくなつたが、踏みとどまる。シヨッピングセンターに行けないまでも人通りの多い所に近付いてみよう。そんな決意が心に湧いた。そうすれば何かが変わる気がした。

一歩踏み出そうとした時、

「あ、お前」

傍から聞こえてきた呼びかけの所為で足が止まつた。聞き覚えのある声だ。見れば、そこに転校生の野上将刀が居た。

将刀を見た瞬間、法子は苦手だなと思つた。思つた瞬間、その思ひは爆発的に広がつて、法子の中で将刀に対する明確な苦手意識が育ち上がった。

「……野上君」

辛うじて法子は言葉を発する。法子が名前を呼んだのは決して話し合いの為の緩衝剤ではない。それは相手に主導権を持たせまいとする、拙い隔意だ。相手に一方的に喋らせればどんどん相手の会話は調子上がり、それに比例して自分の苦痛が増えていく事を法子は知っていた。けれど法子の隔意は何の効力も無く、将刀は気安い応答と受け取つて、朗らかに笑つた。

「どうしてこんな所に？」

友達が居なくなつて寂しくて、だなんて言える訳が無い。しかし咄嗟の嘘も思いつかずに、法子は顔を伏せた。

「そつちこそ、どうして？」

「俺、は……まあ、何となく」

将刀が歯切れ悪く答える。

「じゃあ、私も何となく」

法子も不愛想に答えた。

沈黙が下りる。

将刀は思いのほか弾まない会話に戸惑いつつ、気まづくなった
雰囲気を変えようとした。

「そういえば、文化祭は明日だな」

将刀は無難な話題を出したつもりだったが、法子は文化祭に苦痛
と無関心しか感じない。笑顔で文化祭の話題を出した将刀に法子は
怒りすら感じて押し黙った。

将刀は法子が話題に食いついてこない事を訝しみつつも、まさか
怒っているとは思わず、何とか法子の琴線に触れる話題を手繰り寄
せようとする。やはり笑顔のまま将刀は言った。

「そういや、文化祭の準備頑張ってたな」

将刀は法子の振る舞いを頑張りと見ていた方で、単純な励ましの
つもりだったのだが、後ろ向きな法子には将刀の言葉が皮肉にしか
聞こえない。瞬間、沸騰した感情のままに叫ぶ。

「分かってるよ！ あたしが役に立ってないってのは！ みんなに
嫌われてるのも分かってるから！ いちいち言わなくても分かっ
てるよ！」

「な！ そんな事言っていないだろ！」

「うっさい！ 自分でも分かっているよ、こんなんじゃ駄目だつて！
でもしょうがないでしょ！ どんなに頑張ったって人並みに出来
ないんだから！」

急な剣幕に圧されて何も言えずにいる将刀へ、法子は尚も言い募
る。

「良いよね、野上君はさ！ 楽しいんですよ？ 生きてて！ 明日
の文化祭だつて楽しみなんだよね？ でもね、世の中にはあんた等
みたいな恵まれた人間ばかりじゃないの！ 何をしたって、皆に嫌
われる人が居るの！ 明日の文化祭だつて、生きてる事だつて辛く
て仕方が無い人が居るんだつて分かってよ！」

ぶちまけられた一方的な物言いに今度は将刀が逆上する。

「お前な！」

そこで感情が高ぶり過ぎて一瞬将刀の声が詰まる。突然の将刀の

大声とほんの一時の悲しげな間に法子は虚を突かれた。そこに将刀の言葉が突き刺さる。

「そんだけ後ろ向きに考えてれば、誰だってうっとうしいと思うに決まってるだろ！ こっちが楽しくしようとしてるのに、そっちがそれをぶち壊して、しかもそれを他人の所為にして不満に思ってる！ 何で嫌だと思つたら自分を換えようとしななんだよ！ どうして物事を前向きに捉える努力をしないんだよ！」

それはまさしく法子が日頃から自分に対して抱いている悪い評価その物だった。法子は何も言い返せずに、目に涙を浮かべて顔を俯けた。

法子の頭の中に言葉の衝撃が鳴り響いている。視界が揺れて安定しない。首筋から悪寒と熱が奇妙に縋い交ぜになりながら這い上がって、息が荒くなる。法子はよろめいて、後ずさった。もう将刀の声は聞こえていない。

「あんたはみんなに嫌われているって言っているけれど、そんな事は あ、おい！」

法子はその場に居られなくなって、背を向けて人通りの多い道へ走り出た。将刀の言葉など聞いていられる余裕は無く、法子は涙をこぼしながら、後ろ向きな自分を責め、それを指摘した将刀を責め、自分の周囲を責め続けて、人通りの多い道を駆け抜けた。先程の将刀の言葉に、自分という存在と今迄の生き方とこの一週間の頑張りを否定された気になって、法子は心を瓦解させながらひたすら頭の中で呟き続ける。

嫌だ、もう全部嫌だ。

直ぐに息が切れて走れなくなり、丁度良く在った時計台を囲むベロンチに腰かけて、ふさぎ込んだ。

嫌だ、嫌だ。

段々と思惑は曖昧になり、もう何が嫌なのか明確に思い浮かべぬまま、むしろ明確な思考に結びつかぬ様に頭の中を塗り潰すそうと、嫌だ嫌だと思いつけた。

そこに声がかげられた。

「ねえ、一人？」

見上げるとスーツを着た中年男性がにやにやと笑いながら法子の事を見下ろしていた。脂ぎった毛深い手が法子の肩を掴む。

「ちよつと見ててよ」

そう言つて、中年男性はもう片方の手で懐から銃を取り出して、こめかみに当て、引き金を引いた。音も無く男性の頭が破裂して消えた。

狂っている。

狂っていた。

頭の破裂した男は手を鳥の様に羽ばたかせ、往来にぶつかりながら何処かへと消えていった。ぶつかられた一人の女性は、猿の様な声を上げながら、近くで店の呼び込みをしている男性に掴みかかる。それをはやし立てる男達が手に手に箒を掲げて踊っている。別の場所では電柱に掴まってけたたましく笑う女が居る。それをしきりに眺めながら何やら画用紙に絵を書きながっている男が居る。他を見れば、裸になって抱き合う姿も見えた。嘔吐しながら転げまわっている者も居る。

狂っていた。

狂っている。

「恐ろしくなつて逃げようとした時に、横合いから腕を掴まれた。さつき頭を破裂させた男だった。男は無くなった頭に満面の笑みを浮かべて、優しげに語りかけてきた。頭が無いはずなのに、何故かそこに笑顔が見える。」

「さあ、君も一緒に」

法子は悲鳴を上げて掴む手を振り剥がそうとするが、力が強く引き剥がせない。男は蛆の湧いた瑞々しい首の断面を法子に近付けてくる。

法子がかく。男は放さない。

助けて。思わず法子は祈っていた。具体的な姿にはない。イメージは湧いたが、そのイメージに明確な姿は無かった。浮かんだのは、自分に語りかけてくれた刀の優しい声。助けてともう一度繰り返す。だがタマは反応しない。男の傷口が迫って来る。

その時、乾燥した木の枝を複数まとめて押しつぶしたような、そんなひしゃげた音が響いた。目の前の頭の無い男の頭があるはずの

場所に、一本の矢が突き立っていた。

次の瞬間に、世界がひび割れ、崩れ落ちる。気が付くと何ら変わりの無いネオンの灯った繁華街。ただ通行人は居ない。その代わりに道路には沢山の人が倒れている。そして法子の目の前にピエロが立っていた。頭には矢が突き立っている。

「ひひ、僕の邪魔をするのはだあれ？」

ピエロが奇妙にねじくれた動きで横手を見上げた。法子の視線もそれに釣られる。

ビルの上に誰かが立っていた。良く見えないが、人の様だ。黒い姿が闇夜に滲んで、おぼろげにしかその姿を把握できない。

その人影が消えた。法子がビルの上の人影を見失った瞬間、法子の体に衝撃が走った。続いて宙に浮く心地がして、気が付くと元居た場所から遠く離れていた。遠くにピエロが見える。訳が分からない。足がつかずに混乱した。

「大丈夫か？」

法子へ優しい声がかけられる。その声の出所は法子のすぐ前にあった。法子に技を教えた漆黒の騎士が子を抱きかかえて西洋兜の間から見える口元を微笑させていた。

「大丈夫……です」

熱に浮かされた様にはつきりしない頭で、法子はそれだけ答えた。騎士は頷くと、法子を地面に下ろして呟いた。

「危ないからそこから動くな」

剣を構えてピエロへと向く。ピエロが腹を抱えて笑いながら、近くに転がる人間を蹴り上げた。その瞬間、騎士が消えた。

ピエロが宙に浮かぶ。一拍遅れて、ピエロが居た場所に、剣を払った状態の騎士が現れ、大きな破裂音がした。

それが、剣で切ろうとした騎士と回避したピエロの一瞬の攻防だったと法子が気付いた時には、ピエロは近くのビルの中へと逃げ込み、騎士もそれを追って消えていた。

ビルの奥から笑い声と金属音と爆発音が断続的に聞こえてくる。

しばらくしてビル窓という窓から何か流れ出てきた。それは血だ。鉄錆の匂いが外にまで充満する。

やがてビルの内部が光り輝き、しばらくしてから騎士が飛び出してきた。そうして法子の前に着地する。

「とりあえずあの魔物は帰した」

騎士がそう言った。法子は安堵して騎士を見上げた。人と面と向かえない法子だが、兜に隠れて目が見えないから、平気でその顔を見る事が出来た。

「で、何で君はここに居るんだ？」

突然、騎士がそんな事を言った。法子はその意図が読み取れず、何とも答えられない。

「中……いや、君はまだ学生だろう？ 夜にこんな所に来たら危ない。早く帰……りなさい」

心配してくれてるんだ。敵めしい鎧を着たまるで物語に出てきそうな騎士が、そんな素敵な存在が自分なんていう惨めな存在を心配してくれていると思うと、法子はそのちぐはぐさがおかしくて、そして嬉しかった。

「はい、帰ります。どうせ用事なんかなかったから」

「ならどうして」

「それはアウトレットに行こうとしたけど、どう行けば良いかわからなかったから、とりあえずここに」

高揚した気分の所為でそこまで言ってしまったから、自分がとても恥ずかしい事を言っている事に気が付いて法子は口を噤んだ。

笑われるかなと思った。けれど騎士は微笑を崩さず、そうかただけ言っただけに背を向けた。

「とにかく早く帰った方が良い。じきに皆起きて混乱するだろうか」
「ら」

その言葉を残して、騎士が闇夜に消えた。

法子が空を見上げていると、辺りからうめき声が聞こえてきた。

確かに騎士が言った通りの様だ。混乱する前にと、法子は急いでそ

の場を離れた。

家への帰り道、法子はぼんやりと空を見上げながら、騎士に助けられた事を思い出していた。カッコ良かった。悪党から人々を守るヒーロー、まさにそんな感じだった。まさしく法子になりたい理想の姿だ。

あんな風になれたら良いなと思った。その為にどうすれば良いのかは分からない。けれど何となく具体的な目標が見つかって、法子は満足していた。いつそあの騎士に弟子入りしようかと考える。

人を守るヒーロー。誰かが危険な目に遭っていたら、真っ先に駆けつけて守ってあげる。数あるヒーロー像の内の最も単純で最も普遍的な姿だ。けれどその見飽きたヒーロー像が今の法子にはとても新鮮に感じられた。心の底に確かに灯る英雄の形が出来た。

朝、昨日の事がニュースでやっていった。意識の混濁や怪我等の軽症者が多数に、重傷者が幾らか。最近の魔物の事件ではかなり大規模な被害だったと告げている。魔物の出現は増え始めると加速度的に増加するので一帯に住む人々は注意するよう呼びかけている。

そんな大事件だったのかと今更ながらに恐ろしくなった。だが法子の顔はにやついてしまう。騎士に助けられた事と明確なヒーロー像が浮かんだ事を思い出して。

準備をして外に出ると、寒さが昨日よりも一段と強まっていた。寒さに体を縮こまらせながら、さっきの嬉しさは何処へやら法子は今日の事を思つて憂鬱な気持ちになる。

法子が裝飾された教室のドアを開けると、そこには沢山の物が置かれていた。教室の中はキッチン側と客席側がカーテンで区切られている。法子は今キッチン側に居る。荷物を置いて、手持無沙汰になつて、カーテンを潜つて客席側に行った。客席側では生徒達が思い思いの場所に座り、立ち、だらけた調子や高揚した様子で文化祭の始まりを待っている。

法子は居心地が悪いので、教室の外へと向かう。だが外に出る為の引き戸に生徒が数人、まるで塞ぐ様にして立ち話をしていた。行きづらかった。塞ぐ者達は以前法子の事を大声で批判していた者達だった。益々通り抜ける事が出来ない。法子は途方に暮れて、立ち止まる。

その時、教室の戸が開かれた。

登校時間で出入りの多い今、誰もそんな事気にしない。目もくれない。戸の前に立っていた者達と戸を見ていた法子だけがそれを見た。

ピエロが立っていた。それはまさしくピエロ。何処からどう見てもピエロ。そして、昨日大量の負傷者を出したピエロの魔物と同じ姿をしていた。

昨日の事を思い出して法子はすくみあがる。逃げる事も、周囲に避難を促す事も、魔物に立ち向かう事も出来ずに、法子はただその場ですくみ上って動けなかった。

一方で扉の前に立っていた生徒達は入って来たピエロを見て、文化祭の出し物だと思った様で、おかしそうに笑いながらピエロの事を取り巻いた。

「笑うな」

甲高い声が響く。ピエロの言葉だった。その言葉を聞いたピエロの周りの生徒達は更に大きな笑いを響かせた。

次の瞬間、ピエロの前に立っていた一人が吹き飛んだ。血を吹き散らしながら教室の中を飛び、ガラス窓に激突して突き破り、ベランダに飛び出した。ピエロが生徒の腹を殴り飛ばした所為だった。

唐突な非日常に、教室中のざわめきが止まる。ピエロの周りに集っていた生徒達が後ずさりをし始めた。客席側に居る生徒達がピエロに視線を送り始めた。キッチン側の生徒達が物音を聞き付け、客席側を覗き始めた。

そして悲鳴があがった。まず初めに、客席側の生徒達がキッチン側から覗き込む生徒を突き飛ばしてカーテンの奥へと逃げ込み始め

た。続いてピエロの周りを取り巻いていた生徒達がその後続いた。最後にキッチン側から覗いていた生徒達が慌ててキッチン側に引込んだ。最後の最後に法子が急いで、客席とキッチンを区切るカーテンをくぐる。

カーテンを潜る瞬間、背後を振り返ると、ピエロは法子の事など気にせずに、ベランダに倒れた生徒へ近付いていくところだった。きつと酷い事をしようとしている。きつと酷い事になる。

怖かった。これから行われるだろう事も、自分が標的になってそれと同じ目に遭わされる事も。食い止めたいという思いも微かにあった。だがそれ以上に怖かった。見ていられなかった。

法子は振り切る様にしてカーテンを閉めて、キッチン側を走る。廊下に通じる扉を目指す。キッチンにはもう誰も居ない。みんな逃げてしまっている。廊下の方から悲鳴が聞こえ、それが次々と連鎖した。きつと逃げた人達の混乱が伝播したのだ。法子は急がなければと焦った。このままではきつと、学校の外に逃げるまでの道程は大混乱になる。その混乱に阻まれていた間にピエロが次の標的を探しに来るかもしれない。もしそうなれば混乱で逃げられない中で、襲われる事になる。

法子が急いで戸に向かおうとした時、甲高い金属音が響いた。音の出所は足元で、見れば剣型のプレスレットが下に落ちていた。手のプレスレットが落ちたのだ。だがそんな事に構ってられない。今は何よりも逃げる事が優先だ。プレスレットは後で取りに来ればいい。

ふと頭の中に英雄という事が閃いた。けれどそれはすぐに霧散して、しかし確かに法子の心に明確な重さを残していった。ここで逃げては取り返しのつかなくなる予感があった。

法子の足が止まる。法子の頭は呆然としていて、今自分が何をしているのかもわからない。ただ逃げなくちゃと頭の中で繰り返しながら、体だけは無意識の内に立ち止まっていた。

その背後、カーテンの向こうから何かを引きずる音がする。きつ

とピエロが生徒を引きずっている。それが分かって、法子の中に言いようのない焦りが湧く。英雄という言葉が再び頭の中に閃いた。

法子の足が動いた。

教室の外へ向けて、法子は再び走り出した。今の自分に何が出来る？ 何も出来ない。助けに行っても返り討ちに遭うだけだ。二人共死んでしまう位なら、一人だけでも生き残った方が良い。誰だっと同じ様にするはずだ。だから、だから逃げて悪くない。法子はそう心の中で念じながら、背後の物音を聞かない様に必要以上に足を立てて、教室の外へと逃げ出した。

背後から獣の唸り声の様な悲鳴が響いた。

凄絶な悲鳴に法子の足が止まる。教室の中からだ。さっきの生徒の悲鳴だ。何をされているのか分からない。あるいは殺されてしまったのかもしれない。分からない。分からないから恐ろしい。

恐ろしさで足が震え誰も居ない廊下で立ち止まり、その瞬間法子は何もかもが嫌になる。

教室の中で行われる惨劇も魔物が次々と現れる異常事態も、ピエロの様な恰好をした魔物も自分の事を非難した生徒も、誰も居ないこの廊下も沢山の人間に溢れるこの学校も、学校で行われる学園祭もそれに参加する事を憂鬱に感じる自分も、誰とも喋れない自分も誰とも関われない自分も、タマに愛想を尽かされた自分も人を傷つけてしまった自分も、いつまでも落ち込んでいる自分もきつと立ち直れないと諦めている自分も、そしてここで逃げようとしている自分も、全部が全部嫌だった。

逃げる事も嫌だ。立ち向かう事も嫌だ。知らぬふりも嫌だ。見捨てる事も嫌だ。戻るのは嫌だ。やられるのは嫌だ。迷う事も嫌だ。悩む事も嫌だ。苦しむ事も嫌だ。何もかも、全部が全部嫌だった。嫌になつて嫌になつて、この世界に居る事すら嫌になった。消えてしまいたい。そう思った。もう全てを放り出したい一心で、法子は再び教室に駆け込んだ。こうなつたらあのピエロに挑んで死んでやる。死ねば全てから逃げられる。でもただでは死なない。せめて一矢報いて死ぬ。せめて襲われている生徒を逃がして死ぬ。

自暴自棄な心で、法子は駆ける。武器は無いか。あのピエロに突き立てる武器は。

数歩先に剣型のアクセサリが落ちている。目にも刺せばきつと痛い。理性は出来る訳ないと断じるが、そんな事に頓着する暇はない。法子は駆けながら身を低くして刀をとる。体勢を崩して倒れそうになるが、自分の背丈よりも長い刀を杖にして自分の体を支え、

勢いを殺さずにそのまま駆ける。ああ、もう何でもいい。とにかく襲われている生徒を助けよう。それでこそ我が主。どうせこの先、私なんかが生きていても碌な事にならない。それならばきつと未来の広がっている別の誰かに人生を預けた方がきつと良い。いや、それはどうかと思うけど。

黒を基調とした丈の短いドレスを身に纏って法子は駆ける。目の前のカーテンを刀で切り裂き、その向こうへと跳びだす。

生徒が襲われていた。口から血を流した生徒はピエロに顔面を掴まれ、無理矢理目を見開かされていた。けれどまだ生きている。何をされているのか、法子には分からない。分からないが、襲われている、そしてまだ取り返しのつかない事にはなっていない、それだけで十分だ。

法子は敵意を持ってピエロを見据える。

ピエロの魔力は微弱。雑魚だ。そう見て取った法子はそのまま駆けて、刀を抜いて一閃し、ピエロを切り裂いた。ピエロの体が切り裂かれると、何故かピエロの首も手足も体から離れ、バラバラになった。ピエロは溶ける様にして消えた。

あまりにも呆気無い。もしかしたら油断させる為の罠だろうかと警戒するも、気配はまるで感じられない。まさか本当に終わったのだろうかと法子が気を抜いた時、頭の中に声が響いた。

「いや、まだまだ」

タマの声だった。

「た、たま、たつ、たた、たま、た」

「落ち着いて。乱れすぎていて心が読み取れない」

「ふぉふほほうふへ」

「だから落ち着けて」

落ち着いてなんかいられる訳が無い。

「タマちゃん？」

「どうした？」

「本当にタマちゃんなの？」

「勿論。だからどうした」

「どうして？ 戻って来たの？」

法子が自分の体を見ると、魔法少女の衣装を着ていた。いつの間
に。

タマが笑う。

「戻ってくるも何も私はずっと君の手首に垂れ下がって居ただろう
？ 私が居なくなつた事は無いよ」

「でも話してくれなくて」

「それは黙っていただけ。君があんまりにも私に頼りつきりだから
お灸を据えようとね」

法子が刀をゆっくりと自分の目の前に掲げた。

「どうした？ そんなに懐かしいのか？ まだ一週間も経ってない
だろうに」

そしてそれを膝の上へと叩きつけた。折れない。だからもう一度
膝へ。膝へ。何度か試みるも刀は折れそうにない。

「待て！ 待て！ 何をしているんだ？」

「タマちゃんを折ろうと」

法子が静かに答える。

「怖いよ！ 君、本気で言っているだろ」

「うん」

「うんって」

ふいに法子の目から涙がこぼれた。

「本当に寂しかったんだから」

一転した湿り気のある法子の思念に、タマは流石にたじろいだ。

「ああ、悪かったよ」

「本当に寂しかったんだから！」

また法子が膝に刀を叩きつけた。

「ああ、もう！ 分かった！ 分かったから落ち着けて。今はそ
れよりも魔物の方に集中しよう。文句は後で聞いてあげるから」

「そうだ！ 忘れてた」

忘れんなよとタマは思ったが、伝えなかった。今は事態に対応する事が先決だ。法子は襲われていた生徒に駆け寄って容体を確認する。

目立った外傷は無い。だが口から血を流し、意識も落ちている。息はある。どうなのだろう。素人の法子には危険なのか大丈夫なのかも分からなかった。タマが答える。

「気絶しているだけだね」

「本当？」

「ああ。臓器が潰れているかもしれないけど、致命傷じゃなさそうだ」

「それって問題なんじゃ」

「大丈夫。とりあえずこの人間は置いておこう」

タマはあっさりと怪我人を置いていく事を主張した。法子がそれに対して非難の意志を送るがタマは飄々としている。

「とりあえず死にはしないよ。それよりも魔導師が先だ。あいつは厄介だから」

「もう倒したよ？」

「いや、さっきのは偽物だ。あいつは自分の偽物を作りだすんだ」

「じゃあ、まだ終わってないんだ」

「ああ。だから早く行こう。被害が広がる前に」

「でも」

法子は尚も怪我人を気にしてその場から離れようとしなない。それをタマは諫める。

「目の前の事に溺れちゃいけない。あの魔導師を逃す事の方がよっぽど不味い。本当に死人が出る」

「でも」

でも目の前には血を流して倒れている怪我人が居る。法子にはそれを放っておく事がどうしても出来なかった。

その時、突然、教室の壁が爆発した。吹き飛んだ壁の向こう、白煙の立ち昇る先に、人影が立っている。

まさか魔物かと法子は剣を構えるが、現れたのは魔物ではなく、以前闘った魔法少女だった。

「あれ？ あなたは前に会った」

法子の体が緊張で震えた。前に会った時は、こてんぱんにやられた時だ。嫌な思い出に法子の体は固くなった。

「ここに居た魔物は？」

「……さつき、私が倒しました」
思わず敬語になる。

「ホントに？ なんだ、変身する必要なかったな」

「ち、違います。あいつ一人だけじゃなくて、いえ、確かに一人なんですけど、沢山居て」

「どういう事？」

「そのつまり、さつきのは偽物で、本物は別の所に」

その時、外から悲鳴が聞こえてきた。法子ともう一人の魔法少女が窓に駆け寄って外を見ると、沢山のピエロが校庭の生徒達を囲んでいる。

「まずいな。後手に回るぞ、このままだと」

タマの切羽詰まった思念が法子の心を焦らせる。焦るだけで何も出来ず、おろおろと辺りを眺めまわし、それだけ。具体的にどう行動すればいいのか法子には分からない。

「ねえ、あなた」

魔法少女が法子に語りかけてきた。

「何ですか？」

「あの魔物に詳しいの？ 本物の居場所は分かる？」

分からないと答えようとした時、タマが分かるよと囁きかけてきた。それにつられて思わず答える。

「分かります」

「そっか。じゃあ本物は任せた。私はみんなを守るから」

「え？ あ、はい」

法子が賛同したのを見て、魔法少女はにこりと笑うと、その場に居るもう一人、怪我をして倒れている生徒に近付いて、その体に手を翳した。生徒は光に包まれ、痙攣が収まった。

「この人の事も任せて。あなたは行って」

「はい」

何だか急な事態に法子は焦る。とりあえずどうすれば良いだろうと考えながらおろおろとしている法子を、魔法少女が怒鳴りつけた。

「早く！」

「は、はい！」

法子は慌てて壁の穴を通り、廊下へと飛び出した。

「どうしよう、タマちゃん。ああ言ったけど、私本物の居場所分からないよ」

「大丈夫。私に分かるから。扉を出たら右へ」

「さっすがタマちゃん」

法子は勇んで東に向かう。風のように廊下を走り抜ける。

「止まれ！」

タマの急な制止に法子が立ち止まろうとして、つんのめって転んだ。そのまま擦れながら廊下を転げまわって、しばらくして止まる。

「痛い」

「さっきの部屋からおかしな魔力を感じた。多分そこだ」

法子が顔を上げて、今駆け抜けてきた廊下を眺める。それぞれの入り口を順繰りに眺めて、タマに問いかけた。

「何処？」

「あの、音楽室って書かれた所」

「分かった」

法子が立ち上がって一息に跳び抜け、音楽室の前に着地する。

「居るんだよね？」

「十中八九」

法子が気合を入れて、刀を握る手に力を込め、扉を蹴り破った。

ピエロが鍵盤の上で踊っていた。さっき倒したピエロと寸分違わ

ぬ。ピエロだった。

ピエロがとても楽しそうに悲しそうに鍵盤の上で踊っている。

不気味だった。狂った様に踊るピエロ。滑稽で、とても滑稽で。

何故今、踊りなんて踊っているのか。敵対者が目の前に居るというのに。まるで人間とはかけ離れた精神を持っている様な。不気味。負ければ、捕まれば、どうなるかは分からない。

「安心してよ。魔力の量で言ったら君よりもずっと少ない。真正直に戦えば、君の方が強いよ」

「本当に？」

「実を言うと、前の主があいつと闘った事がある。だからあいつの事は分かっている」

「ホントに？　じゃあ、教えて！　って駄目？　あんまり頼っちゃいけない？」

「いや、そんな事言っていられないよ。あいつは厄介だから」

「厄介？」

「そう、魔力こそ少ないけど、能力が厄介。偽物を作りだす能力と もう一つ鏡の中に入り込む能力」

急にピエロの動きが止まった。かと思うと、鍵盤に乗ったピエロが三人に増えた。背後からも気配を感じる。振り返ると、更に多くのピエロが居た。

「早速取り囲まれたね」

「でもダミー達なら余裕」

法子が振り向きざまに一步踏み込んで、刀を振るった。法子の背後をとっていたピエロ達がまとめて消し飛んだ。踏み込んだ足で跳ね上がり、天井に手を突いて無理矢理方向を変え、ピアノの上のピエロに切りかかる。刀を振るうとピエロが二人消し飛ぶ。本体には一瞬前に避けられた。

「外した」

「まあ、本体は偽物より強いから」

ピエロが音楽室を飛び跳ねながら、偽物を次々と増やしていく。

偽物達も跳び回ってどれが本物のピエロなのか、眩惑する様な動きを繰り返して本物と偽物は入り混じっていく。

「さて、どれが本物の僕が分かるかな」

沢山のピエロが一斉にそう言った。

「奥で笑ってる奴が本物」

タマが伝えてきた。

法子が鞘に納めた刀に手をかけてピエロ達へと躍り込んだ。そして跳ねているピエロ達を無視して、一番奥で笑っているピエロへと切りかかった。

ピエロが刀を避けようと横に跳ぶが避けきれず、脛に半ばまで切れ込みが入った。

「痛い、痛い！ 運が良いよ、一発で正解を当てるなんて。でも次は当てられるかな？」

そうしてまたピエロが増えていく。今度はさつきよりも多い。皆、脛に傷がついている。

「ちょっと待つて」

部屋を埋め尽くすピエロの大群。法子は一步も動かず、近づくピエロだけを切り裂きながら、待った。待っていると、

「あれだ！」

タマの思念がダミーの合間に一周だけ見えたピエロを指した。

その時を見逃さず、法子はダミー達を押し飛ばしながら本物へと瞬く間に近付き、思いつきり刀で薙ぎ払った。今度はピエロの腹が真一文字に切り裂かれる。ピエロの腹から玩具がゴロゴロと飛び出し始める。

「良くやった、法子。このままいけば帰す事が」

タマの言葉が途切れた。ピエロは大きく後方に跳躍して、ピアノの上に立つ。また最初と同じ構図。辺りに犇めいていたピエロ達は皆消えて、今はピアノの上の一人だけになっていた。何だか薄気味悪い。何かしてくる。そんな気がして法子はうかつに飛び込めない。相手の出方を待つのが賢明だ。

「何しているんだ！ 早く！ あいつを鏡に入れさせるな！」

タマの叫びに法子が動く。刀を構え、踏み出し、ピエロの元へ、だがそれよりも遙かに先に、ピエロは後ろに倒れ、そうして窓に触れ、そのまま鏡面を通り抜けた。

「イツツシヨータータイム！」

窓の中に入ったピエロは楽しそうに飛び跳ね、側転し、隣の窓へと移る。楽しそうに楽しそうに、窓の中を飛び跳ねている。

「入られたか。まずいな」

タマがぼやく。法子は楽しそうなピエロをぼんやりと眺めている。「あれ、窓の向こうに居る訳じゃないんだよね？」

確かにピエロは一見窓の向こうで飛び跳ねている様に見える。だが良く見れば、それはあまりにも平面過ぎた。

「ああなる前に、仕留めたかったけれど」

「どうしよう」

「どうしようもない」

音楽室にまたピエロが増え始めた。今度の増殖は緩やかで、一人また一人、少しずつだけけれど確実に、ピエロの数が増していく。

「鏡に入っている間、分身は精度が落ちる。けど、こちらの攻撃が届かない所から延々と攻撃されるのは面倒だぞ」

「あれさ、窓を壊しても駄目なんだよね？」

「ああ、近くに他の鏡がある限り。この学校もそれに町も鏡ばかりだろ？ 無駄って言って差し支えないよ」

偽物のピエロが襲い掛かってくる。法子はそれを一步退いてから、上から下へ切り裂いた。更にもう一人、横合いから飛び掛かって来る。下に振り下ろした刀を逆手に持ち替えて、下から上へ切り裂いた。続けて、二人、左右から襲い掛かってくる。法子は刀を順手に持ち替えて、綺麗に一回転して二人切る。キリが無い。

今度は頭上から。身を低くして切り上げる。四方から同時に。回転して切り裂く。時間差で前後、上から。後ろを突き、頭上の攻撃を避け、着地したのと前からのを一息に突き刺す。キリが無い。

今度は上から。切る。右から、左にも、切る切る。右、左、上、切る切る切る。上、前、左、前、右、斜め、前二人、後ろ、右、斜め、五人、六人、キリが無い。

一人一人はとても弱い。攻撃は単調で遅く、一度切れればそれだけで消える。けれど数が多い。幾ら切っても幾ら切るっても、新しいピエロが増えていく。そしてその大本は安全な窓の中で寝転がり、意地の悪い笑いを浮かべながら泣いている。

切る。切る。切る。だが増える。更に多く、増殖する。キリが無い。

法子の手元が狂い切り損なった、ピエロが目の前へと迫る。危うい所で、かわして、切り飛ばす。法子は自分の魔力が少しずつ減っていく事を自覚していた。あの魔法少女と闘った時よりも更に早く魔力を消耗していく。それでもあの魔法少女戦より長く闘っていた。成長したという事だ。けれどそれでも、限界は見え始めていた。

「どうすれば良いの、タマちゃん。疲れてきた」

「正直、どうにも」

「どうにもって！ 前に闘った時はどうやって勝ったの」

「前に闘った時は、こちらの魔力の量も扱いも君よりずっと長けていた。だから三日三晩闘って、あの道化師の魔力が尽きるまで待った。でも魔力切れを待つにしても、怪我を負っているからあの時よりは早いだろうけれど、それでも一日は見ないと」

「そんなの無理だよ」

「分かっているさ。だからどうしようも無いんだよ。現状を打開するには、あの本体を叩くのが一番だけど」

法子が窓に入った。ピエロに視線をやった。ピエロが大きくあくびをして、笑っている。

「でも鏡の中を攻撃するなんて無理だろ？ だから、とりあえず撤退して、同業者に代わってもらうってのはどうだい？ あの魔女にあっちはもしかしたら鏡の中に攻撃する手立てを持っているかも」

「絶対に嫌」

それは嫌だ。それでは悔しい。折角タマちゃんが戻って来てくれたんだから、これ以上失望させたくない。今回位は良い所を見せたい。

「そうは言ってもね。鏡の中を攻撃するなんて」

法子は必死で考える。鏡の中を攻撃する方法を。誰にも頼らず、必死で考える。

その思考を覗き見て、タマが嬉しそうにほくそ笑んでいるが、法子は気付かない。ひたすら襲い掛かってくる偽物のピエロを切り裂きながら、思考に没頭する。

鏡の中の敵を攻撃する方法は？ 法子は今まで読んだ漫画や小説、見たアニメや映画を思い出しながら、考える。大抵鏡の中に入った敵は攻撃しようとして鏡から出た時に倒される。結局鏡の外に干渉するには鏡の外に出るしかないから、相手が攻撃してくる時を狙い澄まして反撃すれば良い。

しかし目の前のピエロは違う。確かに鏡の中の本体が鏡の外に直接攻撃する事は出来ないみたいだが、鏡の外に偽物を生み出す事で攻撃を行えている。

では他に對抗策は無いだろうか。例えば鏡を割るという方法。鏡を割れば鏡の中に居る事は出来ない。鏡を割って外に出て来たところを叩く。だがその作戦は先程否定されたばかりだ。

例えば鏡の中に入るという方法もある。相手が鏡の中に入れたのなら、こちらだって何らかの方法で中に入れるという道理だ。鏡の中は相手の舞台で敵しい戦いになるかもしれないが、それでも相手に干渉する事が出来るだけマシだ。

「それだ！」

「え、ちよっと、法子、流石にそれは」

法子が駆け出した。偽物ピエロ達を避け、飛び越え、ピアノの上に着地して、そしてピエロの居る窓へ飛び込む。法子は窓に触れて、そのままガラスを突き破った。甲高い破裂音が響く。飛び出した法子はそのままベランダを越えて、中空へと飛び出し、危うい所でベ

ランダの手すりを掴んで、下に落ちる事だけは避けた。

手摺を力強く引いて、体を浮かせ、軽やかに手摺の上に着地する。音楽室の中の沢山のピエロが法子の事を笑っている。割れた窓の隣の窓の中に本体のピエロが居た。そいつも法子の事を笑っている。腹が立った。

ふと外の様子が気になって振り返って下の校庭を見ると、あの魔法少女とそれから昨日助けてくれた黒い騎士が校庭に集う生徒達を守る為に奮戦していた。ピエロの数は多いが、それを全く近寄らせない。けれどやはりキリが無い様で、危なげは無いものの、打開出来る様子も見えない。

私が何とかしないと。改めて気合を込めた法子は、背後から飛び掛かって来たピエロの首を視線もやらずに跳ね飛ばして、くるりと回り、音楽室を見据えた。

鏡の中のピエロをどうすれば倒せるか。

思考する間にもピエロが襲い掛かってくる。二人の腹を切り、もう一人の腕を切り、ベランダの下へと落ちて行くピエロには目もくれずに考える。

最も単純な方法は純粹に魔力をぶつける事だ。窓に入るには作品世界でのエネルギーを使っている場合が多い。そしてその鏡の中に入るエネルギーを遥かに超えたエネルギーをぶつける事で、相手を鏡の中から無理矢理追い出すと言う方法だ。

これは良いんじゃないかと、飛び掛かって来たピエロの腕を跳ね飛ばしながら、内心で得意になる。あのピエロは自分よりも魔力の量が下らしい。ならばこちらが相手の持つ魔力よりも大きな魔力をぶつければ外に追い出せるのではないだろうか。

「無理だよ」

タマの否定が入った。

「駄目？」

「ああ、無理。魔力だけで追い出すには膨大な量が必要だからね。

万全でも無理なのに、今君はあのピエロよりも遥かに消耗している」

「じゃあ、八方塞り？」

「だからさつきそう言っただろ」

「そんな」

法子がしよげ返って、思考が途絶える。簡単に落ち込む法子に苛立って、タマガがしまいと助言を思わずしてしまった。

「あのさ、魔力って何だか分かっているの？ 魔術って何か分かっている？」

「え？」

「学校で習わなかった？」

「習って……ない」

「あのね、魔術っていうのは概念の力を別の力に変える方法な訳で、魔力って言うのはその概念の力の事」

「概念の力？」

「だから、因果の、いや、原因と結果って言った方が分かり易いか？ もっと平易に言えば、ああすればこうなるっていう繋がりが概念。その繋がりの結びつきが概念の力」

「良く分からないんだけど」

「まあ何となくで良いよ。で、逆に言えば魔術を使えば概念を無理矢理付け加える事が出来る訳だ。例えば、そうだな、初歩的なので言うと、羽が勝手に宙に浮いたりとか」

「それは授業でやった！」

「物凄く簡単に言うと、何かに新しい機能を付けられるんだよ。例えば君がいつも使っているドライヤーから熱風じゃなくて水を流したりね」

「うん」

「勿論もつと複雑な事も出来る。例えば、飲んだら人の感情を変える水だとか、切ったら物が消える包丁だとか、絵の中の人を撃てる銃だとか」

「うんうん。で？」

「だから」

タマの言葉が止まった。これ以上言えば、ヒントどころか答えになってしまう。今ので充分、与え過ぎな位ヒントを与えたのだ。これ以上は、少し位は自分で考えてくれなくては困る。

「いや、それだけ」

「え？ どういう事」

「ああ、もう良いから！ そんな事より、さつさとあの道化師を倒す方法を考えな」

法子は混乱しながらも、偽物のピエロを切り捨てながら鏡の中の本体を攻撃する方法を考える。

そして突然大きな声を上げた。

「分かった！ 分かったよ、タマちゃん！」

「良く気付いた」

答えに行きついた法子をタマが褒めた。

法子が思わず口に出していたので、ピエロがそれを聞きつけて、首を傾げて尋ねてきた。

「分かったってなーに？」

「うっさい！ 覚悟しなさい、あんた達！」

法子がタマを握りしめる。

「それでどうすれば良いの？ 何か呪文が居る？」

「いや、今の君じゃまだ無理だよ。本当に高度な概念だから。魔術の式はこちらで組み上げる。魔力も私が今まで蓄えてきたものを使う。君はとにかく私との間の流れを保ち続けて。どれだけ流れが乱れよう」と

「分かった！」

と気合を入れて応じたが、法子には流れというのが良く分からない。何となく感じるタマとの繋がりだろうかと思うのだけれど、その繋がりはいまいち掴みよしの無い感覚で、乱れというのも保つというのも良く分からない。

まあ、なる様になるさと、法子が気楽に構えて、襲い掛かってくるピエロを切るうとすると、

「待て。概念を付与すると魔力の消費が激しくなる。概念を付与した刀で切れば更に。だから魔術が完成するまで、いや完成してからも本体を切るまで他のは切るな」

法子が慌てて手首を無理矢理動かして切っ先を逸らし、迫って来るピエロの胸倉を掴んで後ろに放り投げた。

「そういう事は早く言つてよ！」

「悪い。じゃあ、始めるぞ」

その瞬間、法子の中に何か仄明るい違和感が灯った。何だろうと思っているとそれはどんどん大きくなって、胸を圧迫してきた。何だ何だと思つている間に、それはどんどんと広がって、胸の奥が削られる様な錯覚が起こった。削られていく。痛みは無いが、やるせない気持ちの悪さが胸から喉へせり上がってくる。削られる振動で視界が揺れる。

怖い。何だか自分が壊され、作り変えられてしまう様な怖さを感じた。だが法子はそれに耐えて必死にタマとの繋がりを確認しながら、襲い掛かるピエロを避け、蹴り飛ばし、投げ飛ばした。

頭の中で何か音が鳴っている。それは手の先から流れて来る音で、ひたすらに不快で、意識が遠のきそうな程、抑揚が強くかつ単調な長く聞いていれば発狂しそうな音だった。それにも耐える。不安はあった。だが同時に信頼があった。タマが自分に変な事をする訳がないという信頼、タマが失敗するはずが無いという信頼。だから耐えた。耐えられた。反響する不快感が法子を苛んでいく。それに抗つて、法子は必死にピエロと闘った。

そして、

「よし、出来た。法子！ 後は本体を切るだけだ」

不快感が消えた。代わりに刀へ力を吸い取られていく感覚があった。

「分かった。でも」

だがいつの間にか本体のピエロは居なくなっていた。法子達がおかしな動きをしていると気付いて既に逃げ出したのだ。

「早く追いかける」

「うん、でも」

目の前にはダミー達が犇めいている。刀を使えない今、そこに道を作るのは困難だ。「私がもう一人いたらな。こいつ等ばっかり増えてくれるよ」

「アホな事言つてないで」

法子とタマの意識が同時に法子の手の先に注がれた。手の先には刀がある。法子が魔法少女になってから使い続けてきた刀だ。だが反対の手にも刀が握られていた。それも全く同じ刀が。

「私がもう一本？」

タマが呆然と呟く。全く同じ刀が二本。だが法子にしてみればその二つは明確に違う。一本がタマで、もう一本はタマでない。

「まさか友達欲しさに私を増やしたんじゃ」

タマが気味悪そうに言った。

「知らないよ！ この刀、タマちゃんみたいに意識は宿つてないよ。それより今は武器が増えた事を喜ぼうよ！」

「そうだね。そっちの刀には概念を付与していないから、切っても消耗は少ないだろ」

「よし！ じゃあ行くよ」

法子がベランダの手すりを蹴って音楽室に踊り込み、新しく生まれた刀を一閃する。それだけで周囲のダミーは消え去った。法子が進む。刀を振るう。ダミー達が消えていく。音楽室を飛び出すと廊下にも同じ顔をしたダミーが犇めいている。法子が刀を振るいながら右の廊下を突破していく。曲がり角を左に曲がると遠くに本体が見える。足と腹を怪我して思う様に動いていない様だ。追いつける。だがさつきよりも沢山のダミーが足の踏み場もない程犇めいていた。法子は横に跳び、壁に足を着け、壁を蹴って一気に前へと跳んだ。ダミー達の頭上を跳び越え、落ちそうになるとダミーの頭や肩を蹴って、ダミーの上を走っていく。法子が本体に追いついたのと、本体が傍の教室に逃げ込もうとするのが同時だった。

「もう逃がさない！」

法子が逃げ込もうとする道化師の背中を切る。だが傷は浅く、ピエロはそのまま教室の中に駆け込み、そして窓の中に入った。

「ひひ、残念！」

ピエロが高らかに得意げに宣言する。だが法子は駆け寄って窓ガラスに思いつきり刀を振り下ろした。窓の中に宿る存在を切るという概念を付与した刀を。

窓の中のピエロは袈裟に切られ、理解出来ないといった表情で法子を見た。法子が更に切ろうと刀を構えたのと同時に、背後から追いついてきた大量のダミーが法子目掛けて襲い掛かる。

法子は舌打ちしつつ、構えた刀を戻して、反対の刀でダミー達を切り払う。ダミーは消えたが同時に刀も折れた。

「え？」

折れた刀の先を眺めて法子が呆然とした。

「壊れやすいみたいだな」

使える武器は無い。そこへダミー達が再び襲い掛かってくる。かと思うと、法子は折れた刀を床に刺して、新たな刀を生んだ。法子自身も驚く程、まるでいつもそうしてきたかの様な必然さで法子の手に新しい刀が生まれていた。

「けれど簡単に作りだせる。便利な能力だな、それ」

ダミー達を切り払う。消えたダミーの向こうからまたダミーがやって来る。一体いつまで切れば良い？

「法子！ やったぞ、あいつの魔力が尽きた」

本体が窓から抜け出していた。魔力が尽きて鏡の中に居られなくなっただ。

法子がそれを追う。ダミー達が壁を作ろうとしたので、それを切る。すると再び刀が折れた。折れた刀を床に突き刺して、再び新たな刀を。

教室の外に逃げ出そうとしている本体に先回りして、その前を塞ぐ。本体が反転して逃げようとする。ダミー達が本体を守ろうとする。

る。立ちはだかるダミーを切る。刀が折れる。それを突き刺して新たな刀を。そして逃げる本体に先回る。

そんな事を繰り返している内に、ついにダミーが居なくなった。魔力切れでもうダミーを生む事も鏡に逃げ込む事も出来ない。

「チエツクメイト」

法子が恰好を付けて言い放った。

ピエロが笑う。

「残念無念」

諦めた様に腕をだらりとしたに垂れ下げて頂垂れる。

かと思つと、飛び掛かって来た。

不意を打とうとしての事だったが、法子は薄く笑って剣を真つ直ぐにピエロの鼻先へ向けた。

タマの声が頭に響く。

「そのまま、帰りたいと願うんだ」

法子は一つ頷くと、ピエロに向かって意地悪そうに笑った。

「イツツシヨータイム」

ピエロの口調を真似て、そう皮肉気に宣言する。

すると教室の中に突き立つ折れた刀達が光りで結ばれて、巨大な魔法円を描いた。その光が爆発して、光が満ちる。そして光が消えた時には、ピエロが居なくなっていた。

もう気配は感じない。間違いなく帰した。魔物の恐怖は去ったのだ。

法子が後ろに倒れる。頭を打ち付けたが満面の笑みだ。

「勝った！」

「ああ」

「初勝利！」

「良くやった」

法子はしばらく天井を見上げて荒い息を吐き、それから息を整えてタマに尋ねた。

「見直した？」

「何度か危ないと思った場面もあったけど、そうだね、素晴らしかった。見直したよ」

「私、英雄になれた？」

「ふふ、外に行ってみんなの前に出てみなよ。きっとみんな君を英雄視してくれるだろう」

法子が危なっかしくふらつきながら、窓辺に寄った。外には沢山の生徒が居る。ピエロのダミーはもう居ない。生徒達の視線は魔法少女と黒い騎士に集まっている。どうやら生徒達は二人を褒め称えているらしい。

「ほら、校内の戦いを知らない彼等は、魔導師を倒したのがあの二人だと思っているよ。ここは君が出て行って、私が倒したってびしつと言わないと」

「やだよ。そんな浅ましい真似」

「英雄になれないよ？」

法子が微笑む。同時に魔力が尽きて、変身が解けた。

「良いの。人前に入るなんて恥ずかしいし。それにね、私はみんなに称えられる英雄じゃなくて、みんなを守る英雄になりたい。孤独でも何でも良い。誰よりも強くなって、みんなを守れるようになりたい」

「そうかい。なら何も言わないよ。君が人知れず世界を守る英雄になると言うのならそれも良いだろうさ。ただね、一つ気に食わない」

「何？」

「孤独という点さ。まさか今回勝てたのは全部自分一人の力だなんて思っていないだろうね？ 誰が君を見捨てようと、私が居るだろう。君は孤独なんかじゃないさ」

「そうだね。うん。私、一人じゃない」

法子が素直に頷いた。頭の中に満足そうなタマの思念が流れてくる。それに釣られて法子もまた満足そうに笑った。

「切った人間への見舞い？ 止めておいた方が良いと思うけれどね」
「でも、このままじゃ後味ばつかり悪いし。ちゃんと私があの魔法少女だって事を知ってもらって謝らないと」

「変身した状態で行くのかい？ 言っとくけど、今の君の評価は子供を切ったやり過ぎヒーローだよ？ 未だにテレビでやってるじゃないか。変身ヒーローの在り方についてとかそんな題名が付いて。それで病院なんか行ってみなよ。死神が迎えに来たって騒ぎになるよ」

その言葉に法子は傷ついたという顔をして、沈み込んでしまう。

「いや、一応最後のは冗談だから笑ってほしいんだけど」

タマの言葉に法子は首を振る。

「ううん、タマちゃんの言う通りだよ。私は今、悪役だし、それで人前に出たらまずいっていうのも分かってる」

「だから、昨日みんなの前に出て高らかに宣言すべきだったんだよ。今からでも遅くないんじゃない？」

魔物を倒した後、法子は本当に何も言わずに皆の元に戻った。校内に隠れていた生徒達に混じって、さも怖くて隠れていたという風を装って。

タマには何とも歯がゆかった。どうしたって解決した事を知らしめておいた方が、法子にとって良いはずだから。

でも法子は拒む。

「私は、陰ながら人を助ける事に決めたの。人前に出るなんて性に合っていないもん」

「まあ、君がそう言うなら良いけど」

法子だって分かっている。確かにタマの言う通りで、昨日みんなの前に出て自分が倒したと言って、子供を切ったという汚名を僅かなりとも払拭すべきだったのだから。そうしなかったのは、結局法

子の我が儘だ。違うと思つたからだ。華々しく人前に出て賞賛を浴びる偶像と身命を賭して人々を守る英雄は全く違つたもので、相容れない。何となくの漠然とした思いではあるけれど、法子はそう思つていた。そう、どちらかと言えば、助けたほんの一握りの人にだけは分かつて貰えて、残りの大部分には忌み嫌われる、そんな英雄になりたいと思つた。苦しむ人々を守る存在なのに、自分だけが幸せの絶頂を目指す事は、何となく嫌だつた。自分が苦しむからこそ、苦しい人を分かつてあげられる助けてあげられる。魔法少女になつて苦楽の感情に浮き沈んだ二週間は、法子にそんな考えを閃かせた。「変身した私が出て行つて混乱するなら、変身しないでお見舞いに行つて、傷付けちゃつたあの子にだけ正体を明かせれば良いでしょ?」「あのね、ああもう、本当に分かつているのかな? その子にとつて君は、自分を切つた憎い奴なんだよ?」

「分かつてるよ。だから謝りに行くんでしょ?」
「だから、そんな奴が来たつて嫌なだけで、そもそも謝られたつてそんな簡単に許せる問題じゃ無いし」

「それでも行くよ。だって今のままじゃ、私、英雄なんかじゃなくて、切り裂き魔だもん。助ける人と倒す敵を区別しないと。だからあの子供とそれからあの魔法少女、二人にちゃんと謝らないと私は英雄になんか絶対なれない」

法子がそこまで決意しているのであれば、その正誤はともかくタマに何か言える事では無かつた。

「法子、病院に着いたけど、心の準備は?」

「まだ、あんまり」

法子は苦い顔をして病院の門を眺めた。

「今更?」

「だって」

タマが呆れながら病院を見上げた。白い建物は何だか泰然と乾燥していて、とても中で粘液に塗れた人の生き死にが繰り返り広げられて

いるとは思えない。

法子が玄関を通り抜け、中に入る。人の数は多い。タマは目当ての子供をどう探すのだろうと疑問に思った。

「ああ、でもあそこに並んでいる病院の人間に聞いてみれば良いんだな」

入ってすぐそこに看護師が並んでいるのを見てタマはそう結論付けたが、法子は否定した。

「赤の他人の私にはきつと教えてくれないよ」

「そうなのかい？ 君が人見知りして話し掛けたくないだけじゃなく？」

「それもあるけど……でも教えてくれない」

「じゃあ、どうするんだい？」

「どうしようね」

法子は受付を過ぎて病院の奥へ進んでいく。だが目的に向かつて進んでいる様にはとても見えない。辺りを見回しながらさ迷っている。

本当に何も考えていなかったのか、こいつ。呆れたが、すぐに考えを改める。見つからないならそれに越した事は無い。法子が目的を果たすのではなく、法子が無事で居る事が大事なのだ。

「じゃあ、帰ろう。こんなに人が居たんじゃ見つかる訳が無いよ」

「うーん、そういう訳にも」

そう言って、法子が何気なしに廊下の途中の休憩スペースを見た。そこに居た。

法子が切った少年がそこに居た。パジャマ姿の少年が点滴を脇に立てて顔を顰めてお腹を押さえていた。

その苦しそうな顔が、切られた直後の少年の顔と重なって、法子の頭の中が真っ白になって駆け寄った。

「大丈夫？」

すると少年は顔を上げ、法子を見つめて、不思議そうな顔をした。

「誰？」

「えっと私は」

「まあいいや。俺、今暇なんだ。話し相手になってよ」

さっきの苦しそうな顔は何処へやら、少年は嬉しそうに笑って、自分の隣のソファを叩いた。

「怪我は大丈夫なの？ 痛そうにしてたけど」

「うん、お腹に傷があるんだけど、そんなに重い怪我じゃないから。たまにさっきみたいに痛くなるけど平気」

「そうなんだ」

何と答えていいか、法子には分からなかった。

「お姉さんは誰かのお見舞いに来たの？ あ、俺、後藤純って言うんだ。よろしく」

「あ、十八娘法子です」

「ねごろ？ 珍しい名前だね。それで、誰かのお見舞い？」

「うん、まあ、そんな感じ」

法子が曖昧に答えた。あなたのお見舞いに来たとは言えなかった。純は嬉しそうに身体を揺すりながら、楽しそうに語り始めた。

「俺はね、今入院してるんだ」

「うん」

「あのね、俺、この前魔物が出た時に魔法少女に切られたんだ、お腹」

法子の心臓が止まりそうになった。まさか向こうから核心を突いてくるとは思わなかった。驚きすぎた反動で、勝手に言葉が口を衝いて出た。

「その魔法少女の事、恨んでる？」

自分で言った言葉なのに自分で傷ついて、法子の視界が揺れた。緊張で呼吸が荒れて、酸欠気味になっていた。ああ、聞いてしまった。後戻りは出来ない。そう思うと、胃に詰め物をされた様な不快感があった。

純は笑う。

「全然！」

明るく言い切った純の言葉が信じられずに、法子は重ねて聞いた。
「本当に？ 切られたの？」

「うん！ だってあれ、魔物を倒す為に仕方が無い事だったじゃん。むしろ凄い事だよ。友達も羨ましがってたし」

その感覚が法子には理解出来なかった。

純が悪戯を思いついた様な、秘匿と稚気を孕んだ笑いを浮かべた。
「あのね、これ、お母さんには内緒にしてね。俺、変身ヒーローになりたいんだ」

「ヒーローに？」

「そう！ エリーパーって知ってる？」

法子は知っていた。少年漫画に出てくる架空のダークヒーローだ。さっぱり人気が出ずにすぐ打ち切りとなったが、法子はそれなりに好きだった。

「分かるよ。読んでたから」

「ホントに？ 俺、それになりたいんだ」

「ダークヒーローに？」

純は首を振る。さっきからずっと笑顔。よっぽどヒーローの話題を喋るのが嬉しいらしい。

「そうじゃなくて、あんな風にみんなに分かってもらえなくても、みんなにいじめられても、それでもみんなの為に闘うヒーローになりたいんだ。みんなにちやほやされてる普通のヒーローより、よっぽどカッコ良いじゃん？」

その思いを法子は良く理解出来た。何せ、法子が目指しているヒーロー像と全く同じだったから。

「エリーパーの事、友達はずまんないしカッコ悪いって言ってたけど、でも俺はなりたい。あんなヒーローに。変かもしれないけど」
「変じゃないよ」

「本当？」

「うん。だって私も同じ。そんなヒーローになりたいもん」

その時、突然純が顔を顰めた。どうやら傷が痛くなっただらしい。

「あ、大丈夫？」

法子が気遣わしげに俯いた純を覗き込む。純はそれに笑って答える。

「大丈夫。ちよつと痛かつただけ」

法子があんまりにも不安そうにしているので、純は元気づかせる様に言った。

「本当に大丈夫だから。傷はすぐ治るって言われたし、それにこの傷は勲章だし」

「勲章？」

「そう、怪我は男の勲章なんだよ。この傷は魔物を倒す為の傷だから、だから誇りに思えってお父さんも言ってたし」

「そう、なんだ」

それは法子には理解出来ない観念ではあつたけれど、でも、法子はその少年の言葉に、安堵して、心が軽くなって、情熱が湧いて、頑張ろうと思った。頑張ってみみんなを救おうとそう思った。

「あ、純君！ こんなところに居た」

三人が声のした方を見ると、看護師が一人、誰も乗っていない車椅子を押していた。

「まだちゃんと直つてないのに出歩いて、駄目でしょ」

「あーあ、見つかつちゃった」

純は残念そうに呟いて、立ち上がった。

「怪我、早く治したくないの？」

「はい、ごめんなさい」

「もう」

看護師に促されて車椅子に乗って、純は摩子と法子に手を振った。

「じゃあね、楽しかった」

そうして看護師に押されて、去っていった。

それを見送ってから法子は病院を後にした。

「良かったじゃないか、向こうは恨んでいなくて」

病院を出て、ショッピングセンターに直通するバスに乗り込んで、人心地ついた法子に向かってタマが笑って言った。

「うん」

病院に行つて良かったと法子は同意する。これで罪が償えた訳ではないけれど、それでも少年に行爲を肯定された事で心がとても軽くなった。

「でも結局謝らなかつたんだね」

「う」

痛い所を付いてくる。

「何ていうか、私が魔法少女だつて言つちやまずかつたと思う」

「そう？ 向こうは恨んでいない様だつたけど」

「そうじゃなくて、私がああの時のヒーローだつて分かつたら、きつとがっかりしただろうから」

「そんな事無いと思うけど」

法子の劣等感は根深いなとタマは残念に思った。あの少年に肯定された事で一気に明るくなってくれないかと期待したのだけれど。

「まあ、何にせよ、病院に行つて良かったね」

「うん」

「これで心置きなく、タマちゃんが行きたがつてたお店に行けるね」

「そうだね」

同意してから、タマはどういう事かと不思議に思った。何がどう折角なんだろうか。それは良いにしても、行きたがつていた店？

「行きたがつていた店つて、もしかして国内最大の魔術専門店の？」

「そう、そこ！ アトランだっけ？」

タマは一瞬思考が遠ざかり近付いては遠ざかる様な錯覚に陥つた。振り子の様に揺れ動く掴めそうで掴めない思考をようやく掴み取つた時、タマが法子に短い強烈な思念を伝えた。

「え！」

「えって何？」

「いやだつて、え？ 本当に？ 何で急にそんな。いや、ありがた

いんだけど」

「何でって、分かんないけど、何となく、嬉しくて」

タマは更に追求したい気持ちもあったが、法子の思念のトーンが落ち始めた事に気が浮いて、これ以上言い重ねるのを止めた。今は素直に喜ぶべきだ。

「うん、私も嬉しいよ」

「何だか凄く腹立つんだけど」

バスが止まり、ショッピングセンターに着いた。

ショッピングセンターに降り立ってタマはまず人の多さに驚いた。こんなに沢山の人間がこった返す場面を今まで見た事が無かった。

実際のところ、日曜日にしては客の入りが随分と少なかった。というのも連日の魔物騒動で近辺に強力な魔物の到来が予想されていたから。それでもタマにとっては、そして法子にとってもこんなに大勢の人間の最中に紛れ込む事は初の体験だった。

「ちよつと酔ってきた」

人ごみの中を歩き始めて早速法子は気分が悪くなる。

「大丈夫かい」

だが今更戻ろうにも法子に人の波を掻き分ける力は無く、流されていく事しか出来ない。

更に歩くと人波が三つに分かれた。ようやく人との間に隙間が出て、法子はまばらになった人波の合間を抜けて壁に寄りかかった。

「本当に人が多いね」

「大丈夫かい？」

「うん、何とか」

「しかし沢山店があるな。場所は分かるのかい？」

「うん。事前に調べておいたから。一番上の階の、って言っても二階しかないけど、その真ん中に噴水があるんだけど、その近く」

法子は壁を離れて再び歩き出した。エスカレーターに乗って二階へ上り、更に奥へ進んだ。丁度ショッピングセンターの中央まで来

ると、そこに大きな噴水があった。

「もうちよつとだよ」

「大丈夫かい？」

「う、うん。頑張る」

少しずつ足取りの重くなってきていた法子だが、何とか力んで先へ進もうとした。

ふと視線の先、噴水の一角に黒い影が立ち上った。何も無い所から、突然現れた様に見えた。

何だろうと思っていると、タマの叫びが聞こえた。

「まずい！ 逃げろ！ ここを離れる！」

法子はぼんやりと影を見つめ続けた。影は段々と人型になって、何だか揺らめいている。

影の周りに居た人々がその影に気が付いて、驚いて、叫び声を上げて、逃げ始めた。それが連鎖して、辺りの人々が一斉に噴水から駆け離れる。

法子はそれでもぼんやりと影を見ていた。

「おい！ 法子！ 早く逃げろ！」

影は段々と大きくなって、それが人位の大きくなると、顔の辺りにぼつかりと穴が開いた。

あ、ヤバいなと思って、現実感の無いままに逃げようとした。けれど法子が逃げる前に影のぼつかりと空いた口に光が集い、それが放たれた。法子に向かって。

その光が法子の直前に迫った瞬間、法子の目の前の空間が歪み、光を抑え込む。そうして光が破裂して、辺りに炎と爆音が広がった。そこでようやく法子の頭が現実を追いついた。

「な、何？ 今の」

困惑する法子はいつの間にか魔法少女に変身していた。

「何とか間に合った。良いから、法子逃げるぞ」

「タマちゃん、あれ何？」

「魔王だよ、魔王。遂に現れたんだ」

炎の向こうに、更に大きくなって天井に付こうとする影とその周りに生み出された沢山の魔物が見えた。

二体三体と魔物を切る。だがその何倍もの魔物が向こうから押し寄せてくる。

学校で道化と戦った時の様な不毛さだが、まるで違う。一体一体が道化なんかよりはるかに強い。そして切っても消える事が無い。しばらくすると傷が塞がってまた襲い掛かってくる。数自体は道化の分身と比べると少ないが、手強さは段違いだった。

法子はまともに戦う事すら出来ず、ひたすら自分を追って来る魔物をひきつけながらシヨツピングモールの中を逃げ続けた。弱音を吐かず魔物を切っては逃げるを繰り返す。

タマはもう何も言わない。言っても無駄であるし、何か言えば法子の気が散ってしまうから。手助けをする事は出来ない。出来る事は祈るのみだ。せめて死なないでくれる様に。

時は戻って、魔王が顕現した直後、

「魔王？」

目の前で次第に大きくなり始めた影を見て、法子は呆然と呟いた。

「そう。あの強力な魔力は間違いなく魔王だ」

タマの言葉を受けて、法子はぎゅっと唇を噛みしめると、タマに向かつて変身の呪文を唱えた。

「タマちゃん、私はあなたと契約する」

だがタマは黙っている。

「タマちゃん？」

「もう変身しているよ」

法子が自分の体を確かめると確かに魔法少女に変わっていた。

「よし！ じゃあ」

「やめろ！」

タマに怒鳴られて法子の体が震える。

「ど、どうしたの？」

「戦うなんて無茶に決まっているだろ」

確かに駆け出しの自分が魔王に太刀打ちが出来る訳が無い。それは分かるのだが、法子は納得出来なかつた。目の前に魔王が居るのだ。どれだけ勝ち目がなくとも英雄を目指すのなら闘わなくてはならない。そう思った。

「でも」

「あのね、君は魔法少女になって何がしたいの？」

「何って……英雄に」

「英雄っていうのは？」

「みんなを守る……」

「だったら勝ち目のない闘いに挑まないで逃げ遅れた人を助けるのが先決だろう」

それは、分かる。分かるが、逃げ遅れた人を助けている間に、あの魔王に襲われたらどうしようもない。誰かが止めなくちゃいけないのだ。

「大丈夫だよ。魔王は今、動けないから」

「動けない？」

「そう。詳しい事は省くけど、強力な存在が世界を越えた時はその反動で、まともに動けなくなるんだ。さつき君に攻撃したので恐らく限界。今はあの魔王も、それから取り巻きもまともに動けないよ」

見れば、魔王は天井を突き抜ける程、大きくなっているものの、同じ場所から一步も動いていない。取り巻き達も、立っているのがやっとの様子で、足を震わせてその場から動けない様だ。

「なら今の内に倒しちゃえば」

「無理だって言っているだろ。大規模な送還魔術が君に出来るのかい？」

「それは……でも今の内に弱らせておけば」

「大して変わらないよ。今、あいつ等は自分の体や力を上手く使えていないってだけだ。あいつ等が膨大な魔力を持っている事は変わ

らない。だから君が攻撃したところで山を水滴で切り崩そうとする様なものだよ」

「でも、このまま何もしないで居たら、あの魔王は強くなっちゃう訳でしょ？」

「あれだけ膨大な魔力なら、完全な本調子になるには、一日そこ等じゃ無理だよ。何日もかかるはずさ。それまでに現代の魔術師達が集まるのを待とう。今はとにかく辺りに居る人を避難させる事だ」

反論できなくなって、法子は納得した。

「分かった。今はとにかく逃げ遅れた人を助ければ良いのね」

「うん。まずは少し奥へ行ってみよう」

法子は刀に手を添えて、魔王達へ向けて走り出した。

「おい！」

「大丈夫」

そうしてすれ違いざまに魔王と数体の魔物を切り裂いてそのまま魔王を尻目に走りぬける。魔王から離れきった法子は笑う。

「これなら大丈夫でしょ？」

「上に飛べ！」

タマの叫びに反応して、法子は飛んだ。一瞬前に法子が居た場所に光が着弾して爆発する。廊下に大きな穴が開いていた。

「油断するなよ」

「ごめん。まだ動けたんだ」

「みたいだね」

下から悲鳴が聞こえた。

「落ちた瓦礫に当たったか？ 助けに行かないと」

タマが言い終わる前に、法子は穴を抜けて下の階に下りた。散乱した瓦礫を取り巻いて人々が怯えた様子で震えていた。だが瓦礫に潰された者は居ない。

ほっと法子が安堵したのもつかの間で、辺りに居る人々が法子を見てあからさまに恐怖の表情を浮かべ、悲鳴を上げて逃げ始めた。その内の一人が倒れ、逃げ惑う人々に踏み潰される。倒れた者を誰

も助けようとはしない。法子が助け起こそうと慌てて駆け寄ると、倒れた者は近寄る法子を見て恐怖の悲鳴を上げ、擦れた許しを請いながら、必死の体で後ずさりし始めた。法子がそれにショックを受けて立ち止まると、倒れた者はそのまま壁にまで後ずさり、手を這わせて立ち上がり、人々に踏み潰された所為で明らかに折れている腕の痛みなど感じない様子で、泣きながら走り去っていった。

「そういえば、君、汚名があつたね」

法子はあまりの苦しさに答えられない。

泣き声が聞こえた。

見ると、子供が一人倒れて泣いていた。

法子がまた駆け寄ると、子供は怯えた様子で法子を見つめ、母親を呼び始めた。これでは近寄れない。

「タマちゃん、どうすれば良い？」

「無理矢理抱えて逃がせばいいんじゃないかな」

「それは」

目の前で子供が泣いている。恐怖に染まった表情で泣き叫んでいる。

「出来ないよ」

その時、声がした。

「どうしたの？」

声のした方を見ると、かつて法子を倒した魔法少女がやって来た。

「その子、怪我したの？」

魔法少女は子供へ駆け寄って体を検めた。

「うん、大丈夫みたい」

魔法少女が子供を抱きかかえる。すると子供は安心した様に魔法少女へ体を預けた。その様子を見て、法子の心が痛む。

魔法少女は屈託のない笑顔を法子に向けて尋ねてきた。

「あなたも逃げ遅れた人を避難させようか？」

「そ、そうです」

「そっか。さつきね、黒い鎧の人と会って協力してみんな逃がそう

って事になったの。あの魔王、あ、えっと、強力な魔物がこのシヨッピングモールの真ん中に居るんだけど、シヨッピングモールは東西に長く伸びているから、東と西の二手に分かれようって言われて私は西側の人を逃がす事に決めたの」

黒い鎧。法子は一人のヒーローを思い浮かべる。きっと自分を助けてくれたあの騎士だ。

「だから、あなたも一緒に逃げ遅れた人を助けに行こう」

そう言って、魔法少女が手を差し伸べてきた。

その誘いを受けようと手を伸ばして、さっきの怯えた人々の表情を思い出して、伸ばした手を下ろした。

自分が居たらむしろ混乱してしまう。

だから、言った。

「私は、あの魔王を止める」

途端に頭の中にタマの罵詈が響いた。

「馬鹿か、法子」

だが自分に出来る事はこれしかない。もう決めたのだ。

「やめた方がよいよ」

魔法少女も止めてくる。

「魔王は動けないみたいだけど、周りにも魔物が沢山居て動き始めているから。危ないよ」

活動を開始した。そうとなれば、ますます行かなくてはならない。みんなが逃げ出す時間を誰かが稼がなければ。

「私が食い止めるから、その間にあなたはみんなを逃がして」

法子が決意を込めてそう言った。魔法少女はしばし逡巡してからやがて頷いた。

「分かった。すぐにみんなを逃がして迎えに来るから。無茶はしないです」

魔法少女が拳を突きだしてきた。法子にはその意味が分からない。

「約束だよ」

魔法少女が重ねていった。そうして更に拳を法子へ近付けた。意

味は分からないが、何となく拳を突き合わせた方が良い気がして、法子は相手の拳に自分の拳を当てた。

すると魔法少女は頷いて、子供を抱えて去っていった。最後に一度振り返って、

「絶対に無理しちゃ駄目だよ！」

そう叫んで消えていった。

残された法子は気合を入れて、魔王の所へ向こうとして、

「ちよつと待て」

タマに止められた。

「止めても無駄だよ」

法子が言った。

「みんなを逃がす役になれないんなら、今私に出来る事は魔物を食い止める事」

「大人しく引き上げる選択肢は？」

「無い」

法子の決意が固い事を感じ取って、タマは諦めた。

「分かった。でも良い？ さっきあの魔女も言っていたけど、絶対に無茶はするなよ」

「うん」

法子は天井の穴を抜けて二階に戻ると魔王の居る噴水へと向かう。強大な敵に向かう今の状況は憧れていた英雄の姿に酷似していたが、法子の心にはその事に対する高揚はまるで無かった。緊張もまた無い。心は凧いで何の感情も湧いていない。ただ駆けた。

視界の先に魔王と魔物達が居た。魔法少女の言った通り、魔物達は活発に動き始めている。何かを探す様に辺りを徘徊している。

人間を探しているのかもしれないと法子は思った。だとすればやつぱり食い止めに来て正解だ。

「違う、法子」

「何が？」

「あいつ等は君を探しているんだ」

一体が法子を見つけた。途端に噴水の周りに居た十数体の魔物達が法子を見て、そして襲い掛かって来た。

「数が多いな」

「タマがぼやく。」

「うん、でも何とか」

「注意してね。目の前のだけじゃない。下の階にも何匹か。それに後ろからも迫っている」

法子が後ろを振り向くと、確かに四体、魔物が居た。下の階から唸り声が聞こえた。囲まれている。

「とりあえず囲みから逃れよう」

法子は来た道を戻る。四体の魔物が向かってくる。

「倒す事は考えなくて良い。とにかくあの四体の向こう側へ」

法子は刀を構えて、四体との距離を詰め、直前で横に跳んで、壁を蹴り、魔物達の斜め上を通り抜けようとした。そこへ、反応した一体の爪が襲い掛かってくる。法子はそれを切り払い、魔物の囲いを抜けた。

一度立ち止まって振り返り、襲い掛かってくる魔物達へ法子は刀を構える。

その時、タマの声が響く。

「後ろへ跳んで」

言われた通りに後ろに下がると、廊下が突き破られ、下から魔物が現れた。その魔物を刀で切りつける。

「ちゃんと魔物の気配を探りながら」

着地した法子は気を研ぎ澄ます。辺りに居る魔物の気配を感じ取れた。まだ下に何体か居る。前からも沢山の魔物が迫って来る。

速度の違いで三体が集団を抜け出して法子に迫って来た。襲い掛かってくる魔物へ向けて、機先を制す為に法子は踏み込んで一体を真上から切り裂き、更にもう一体を下から切り上げる。後ろに跳躍して距離をとってから、刀を振って斬撃を飛ばし、三体目を切り裂く。

だがいずれも大した痛手を負わせられず、三体はすぐさま体勢を整え向かってきた。

「一回切った位じゃ駄目か」

「当たり前だよ。はつきり言って、何回切ろうと無駄」

「もつと魔力を込めれば」

「多少は動きを止められるかもしれないけど。きつとすぐに回復するよ。君が力尽きるのを早めるだけだ」

法子は考える。この場にいる魔物を倒すにはどうすれば良いだろう。そうして思い出す。あの道化戦で使った刀に概念を込めるという方法なら倒せるんじゃないだろうか。

「無理」

だが相談する前にタマが切って捨てた。

「あれを作るのにどれだけ魔力が必要だが分かっている？ あの時は私が溜めていた魔力があつたけど、今はもうほとんど無いよ。君の魔力を使っても一本作れるかどうか。維持するのにも魔力が必要で、二体か三体切ったところで終わりだね」

二体か三体。だが目の前からは十数体の魔物が迫って来ている。

全く足りない。

「どうしよう」

「良い？ 君の目的は魔物を食い止める事。魔物が君だけを狙っている今の状態は、他に危害が加わらないという意味で、願ってもない事だ。魔物が君を見失わない程度に逃げながら、この状態を維持しつつ、逃げ遅れていた人々が完全に逃げるのと救援が来るのを待つのが一番だ。だから余計な事は考えずに逃げる事に集中すれば良い」

「分かった」

また数体が抜け出してきた。法子はそれを切ってやり過ごそうと、真一文字に切り付けた。だが一体だけ切られても全く怯まずに襲い掛かってくる者が居た。棘がびっしりと生えた拳を突き出してくる。法子は反射的に思いつき魔力を込めて、魔物の拳を刀で跳ね飛ば

し、返す刀で魔物を切り下した。

魔物は崩れ落ち。動かなくなる。倒したのだろうかと法子の心に僅かに光明が差しした。

「タマちゃん、もしかしたら倒せるかも」

「無理だよ。じきに治る」

また別の魔物が二体、襲い掛かってくる。法子は魔力をありったけこめて二体を切り飛ばした。そうして、さっき倒した魔物を見てみると、タマの言った通り傷が治っていくところだった。

「まあ、どんな魔物でも概念を破壊しない限り殺す事は出来ないし、どんなに切ってもいずれば回復するけど……でもこいつ等は特に回復が速いね」

タマの呟きに法子は絶望的な気持ちになった。

「倒せないんだね」

「言っただろ」

そうして法子の逃走が始まった。

逃げに逃げに逃げ続けて、次第に法子の魔力は費え、もう限界に差し掛かっていた。

口を出すまいと決めていたタマもここに至って口を出さざるを得なくなる。

「もう限界だよ、法子」

「うん、分かってる。もうみんな逃げ切れたかな？」

「どうだろうね。君がああ魔法少女と別れてから十五分、普通に歩けば外には出られているだろうけれど、この状況は普通に歩いて外に出るのは訳が違うし、微妙なところだね。混乱でも起こっていたら、多分まだ」

「まだ十五分？ 二時間位は戦ってたつもりだったのに」

「残念ながらね」

目の前に迫った魔物を避ける為に、法子は大きく上に跳んだ。

法子は天井へと着地する。すぐさま魔物が迫り攻撃を放ってくる。

すんでのところで法子は天井を蹴って、下へと落ちた。天井の一部が魔物達の攻撃で吹き飛び、天井に巨大な穴が開く。ぽっかりと空いた天井を見上げて、法子は戦慄した。段々と魔物の攻撃が強くなっている。

「もう無理だよ、法子。外に逃げよう」

「外に逃げてどうするの？」

「少なくともあの魔女ともう一人黒い騎士が居るだろう？ 一人より三人の方がまともに相手できるだろう」

「でもそうしたら普通の人は」

「それを何とか食い止めるんだよ」

だがそうは言っても魔物の中には遠距離まで届く攻撃をしてくる者も居た。少年を切った時の嫌な記憶が思い出される。守りきれぬだろうか。

「三人なら、勝てる？」

「無理だね。食い止めるのもきついかもしれない」

「じゃあ、外に出たって」

「でも出るしかない。このままここに居ても仕方が無い。今、魔物は君だけを狙っている。君が居なくなれば魔物は無差別に人を襲うだろう。君が生きのびれば生きのびるだけ周囲への被害が少なくなるんだ。だったら生存確率の高い方を選ばなくちゃ」

「そうかもしれないけど」

その時、大気が鳴動した。うねる様に空間が歪む。甲高い音が世界の全てを切り裂いた。

天井がばらばらに崩れ落ちてくる。法子はそれを避けながら、何事かと辺りを見回した。

「もう……ここまで」

頭の中でタマが呟いた。

「どうしたの？」

「魔王が起き出した。何だこれ、異常な魔力だ。尋常じゃない速度でこの世界に慣れ始めている」

「でも、さつき」

「私の見立てが甘かった。これは、まずい」

タマから絶望の思念が流れ込んでくる。事態を理解した法子は迫って来る魔物から逃げながら、怯えきつた思念でタマに尋ねた。

「どうすれば……良いの？」

「逃げる」

「外に？」

「違う。とにかく何処までも。奴等が追ってくる限り何処までも。もう周りなんか気にするな。とにかく逃げろ」

ふっと空が陰って、辺りが暗くなった。見上げると、建物よりも何倍も大きくなった魔王が太陽を隠していた。

その巨大さに法子が震えていると、更に変化が起こる。

辺りが枯れ始めた。廊下や壁が茶色や灰色に変色していく、瓦礫もまた茶色と灰色に浸食され、浸食されつくすと粒子となって溶けて崩れた。爆発音が聞こえた。見ると、電化製品が次々とショートして破裂し、中から緑色の液体を流し始めていた。隣のフードコートでは散乱している食べ物も紫色に変色していた。

「何これ？」

「知らん！ 良いから逃げろ！」

植物は枯れ果て、それなのに奇妙にねじくれながら成長していく。ペットシヨップから奇妙な泣き声が聞こえる。見たくない。本が全てどろどろの白いスープになっている。インテリアのコーナーがお化け屋敷と見まがうほど。服が全て糸状の絡まり合った何かになっている。その合間から何かの目が覗いている。

世界が狂い始めていた。

「どうにかしないと」

「どうにも出来ない！ もう君がどうこう出来る次元は遥かに超えているんだ。とにかく逃げる。もうそれしか道は残されていないんだよ」

法子は嬉しく思う。タマの言葉が全て法子の為を思っているものだ

と思念で分かるから。相手の考えている事が分かるって言いなあと
思う。

タマの気持ちがとても嬉しい。嬉しいからこそ、ここで逃げて情
けないところを見せたくない。

「法子？ 何だい、その魔術」

そう思うと、何としても、新しい道を切り開きたくなった。

「君の生命を魔力に換えているのか？」

だからその為に、力が欲しいと思った。

「それにしたって変換する量が桁違いだぞ。死ぬ気か！」

法子が駆けた。魔王へ向けて。金色の髪が常よりも光り輝いてい
る。衣装の丈が伸びて、ローブの様になっていた。

「馬鹿か？ 馬鹿か馬鹿か馬鹿か？ 死ぬぞ？ 本当に死ぬぞ？」

目の前に、沢山の魔物が迫る。法子は刀を握り、ただ一度振った、
それだけで遠近大小強弱構わず魔物達は切り裂かれ、

「やめろ！ やめてくれ！ どんどん君の命が削れている。ここま
でだ。取り巻き達を倒したんだから、ここで」

同時にその周囲を魔法円が囲み、光と共に全ての魔物が消えた。

「嫌だ！ 嫌だ！ 私はもう、納得のいかない形で主と分かれるの
は嫌なんだ。お願いだからやめてくれ！」

走る法子の前に魔王が迫る。天を摩す様な巨体を見上げて、法子
は笑う。今生きている事が堪らなく嬉しかった。そして死ぬ時に大
好きな友達が傍に居てくれる事が嬉しくてしようがなかった。

「ねえ、タマちゃん。今迄ありがとう」

「止まってくれよ、お願いだから」

「ねえ、タマちゃん。タマちゃんと会えてね、初めての友達になっ
てくれて、とっても嬉しかった。きつとタマちゃんと会わなかつた
らずっと嫌な思いをして、小さくなって生きてたと思う。でもね、
タマちゃんと会えて、物語みたいな生き方が出来て、短い間だつた
けどとっても楽しかった」

「お願いだからそんな事言わないでくれ」

「だからね、タマちゃん。私はここで死んじゃうと思うから、次の人と仲良くしてあげて。きっと世の中には私みたいな人が沢山居ると思うから」

「やめてくれ、私は君と」

「だからね、タマちゃん。さようなら」

法子は底抜けの喜びを胸に抱きながら魔王へ向けて駆け抜けた。

法子は魔王を睨みつけた。巨大な魔王は四つん這いとなって法子を見下ろしている。その状態でもちよつとした高層ビル位ある。何だか怪獣の様だ。法子は試しに剣撃を飛ばしてみた。遙か遠くの魔王の脛に当たるが損傷を与えられた様子は無い。まともによつても勝てなそうだ。

魔王の巨大な拳が迫って来た。横に跳んで逃げる。爆発が起こる。だが煙が晴れた後、拳が振り下ろされた場所を見ても破壊の跡は無い。良く分からない。分からないから危険だと思った。

魔王の周りを光球が舞い始め、それが法子へ降り注いできた。見た所、込められた魔力は少ない。当たっても痛くない位に、けれども用心してそれを避ける。避けた先に、また拳が迫ってきた。拳には恐ろしい位の魔力が込められている。食らえば死ぬ。始めから死ぬ気の法子は冷静に、剣に込めた魔力を開放して爆発させて、その爆風で後ろに飛んだ。

楽しい。楽しかった。極限の状況に身を置いている。その特異さに酔って法子は笑った。

振り下ろされた魔王の拳の皮膚が伸びて、無数の蔦になって法子へ襲い掛かって来た。やはり膨大な魔力が込められている。避けきれそうもない。そう判断して、法子は切り落として消滅させるという概念を刀に付与して、蔦を切り落とし消滅させた。蔦に繋がる皮膚も僅かに消滅させる事が出来たが、それだけだった。本体ごと消すには魔力が足りなかった。

また光球が降り注いできた。更に魔王の口に光が集い、巨大な光球となった後、法子へ向けて射出された。

如何せん数が多い。避けきれずに、光球の一つが腕に当たった。だが当たっただけで痛くもかゆくもない。

何となく分かった。恐らくまだ魔王はこの世界に完全に慣れた訳

ではないのだ。動きは何処かぎこちない。それに遅い。魔力を外部に放てば即座に発散してしまう。だから光球に威力が無い。

魔王の周りにまた多数の光球が生まれ始めた。数はほとんど増えて、辺りをまばゆく照らす。幾つあるのか数えきれない。少なくとも避けきれぬ数ではない。だが避ける必要が無い。法子の心は余裕を持って、更に分析を進めた。

どうやら魔王の体は人間と同じ様な構造を基準にしている様だ。足と手で体を支えている。手を使って攻撃してくる。こちらを認識するのに顔に付いた目を使っている。頭をこちらに近づけようとはしない。多分重要な器官が集まっているのだ。外見が人間に似ているのでもしかしたらと思っていたが、どうやら人間と同じ様な構造で、同じ様な場所が弱点らしい。だとすれば、首を飛ばして頭を潰せば相当の痛手を与えられる。

後はどうやって頭の部分まで上ったものか。腕が横から迫って来る。法子はそれを飛んでかわし、腕の上に着地した。丁度良いと思つて、法子は腕を伝って上っていく。

これで頭まで近付けると思つたのだが、途中で腕の皮膚が伸びて鳶状になり襲い掛かって来た。法子は慌てて跳び上がり空中に躍り出る。

どうやら体を伝って行くのは困難だ。どう近づいたものか。あまり制御の利かない空中に浮いていたくはない。

こんな風に攻撃されるから。

魔王の口から光球が射出され、法子へ向かってきた。何とかすれば避けられるかもしれないが、所詮威力の無い攻撃だ。刀で切つてしまえば良い。

法子は刀を構え、

そして切つた。地面に着地する。

こうなつたらとことんやってやるうと、すつと体から力を抜いた。そして目を閉じる。集中し、イメージを喚起し、世界に共鳴させる。目を開くと、辺り一面に刀が浮かんでいた。浮かんでいるという

よりは空中に突き刺さっている。どの刀も、刀身が半分ほどない。試しに法子が一本引き抜くと、刀身の残りの半分が現れた。まさしく空中に埋まっていた。

法子が空中に突き刺さっている刀の上に乗る。かなり固く埋まっている状態で、力を込めても揺るがない。

法子が一面の刀を改めて見回した。どの刀にもそれぞれ違った概念が付与されている。今法子が持っている刀は切り落として消滅させる刀と切った物を凍らせる刀。

今のままじゃ倒せそうにないと悩んでいると、悩む暇を与えないかの様に、魔王の拳が再び迫って来た。でもやっぱり遅い。簡単に避けて、別の刀の上に着地し、更に迫る光球を避ける為に、刀の上を乗り継ぎながら空中を縦横無尽に跳び抜ける。

跳び続けながら魔王を倒す方法を考え、じゃあこうしようとかの中で呟いて、法子は自分の周囲に無数の刀を生み出した。

込められた概念はただ一つ。消滅。纏った刀は法子の動きに合わせて付いてくる。これを魔王の頭に突き立てる。一本では消せないかもしれないけれど、複数あればきつと出来る。

さらに法子は空中の刀を選別して、消滅と生成を行った。刀の配置で送還の魔法円を作りだす。頭を吹き飛ばしたら、すぐに魔法円を発動させて帰す。そうすれば終わりだ。

法子は成功を確信して口の端を持ち上げて笑った。その体が僅かに揺れた。

自分の体に相当ガタがきているのだと分かった。早く闘いを終わらせなければならぬ。この分だともう長く持たない。今は生み出した魔力で辛うじて命を支えている状態だ。多分変身を解けば、きつと支えが無くなって死ぬだろう。悲しくは思っただけけれど、それは綺麗な終わりだと何だか納得する気持ちがあった。

魔王が一際大きな雄叫びを上げた。闘いに引き戻される。見れば魔王は体を大きく伸ばして隙を晒していた。

今なら行ける。そう判断して法子は足元の刀を蹴った。刀を蹴り
継いで、魔王の顔の前まで来て、引き連れた無数の剣を突き立てる
為に、気合を入れて息を止めた。

その時、魔王の口に光が宿った。また効きもしない光球かと法子
は呆れたが、どうやら違う。込められた魔力がいやに多い。今迄に
無かった軋む様なノイズ音が発せられていた。

まずい。そう思った。だがもう避けられない。後戻りは出来ない。
体がもう限界に近かった。今回を逃したら無数に生み出した刀を維
持する事が出来そうにない。

だから法子はそのまま刀を突き立てる事に集中した。元より死ぬ
身だ。恐れる事は何も無い。

魔王の口にどろりとした粘質の何かが集っていく。それは人の形
をとって、その背に生えた翼を大きく広げた。それが何だか分から
ない。分からないがもう関係ない。

法子は纏っていた無数の刀を魔王の顔に向けて放った。更に自身
も身を躍らせて、魔王の口元へ向けて、その一番危険に思える羽を
生やした粘質の人型へ向けて、ありったけの魔力を込めた消滅の刀
を突き立てた。

その瞬間、法子の体が軋んだ。見れば体が茶色と灰色に浸食され
ている。ああ、さつきシヨップینگモールを枯れ果てさせた魔術か。
そう気づいて、自分の死を悟った。

でもまだ終わらせない。消滅の刀を更に深く突き立てる。次第に
粘質の人型は消えていく。それだけでなく魔王の頭も刀を突き立て
た箇所を中心に消え始めた。

法子の意識が霞んでいく。

霞む意識を何とか繋ぎ止めて、最後に送還の魔術を発動させた。

宙に浮かんだ刀と刀の間から闇が生まれ、それが巨大になり、魔
王を取り囲み、圧縮されて、魔王を消した。

魔王の居なくなつた空を法子が落下する。体はもうほとんど枯れ
てしまっている。地面に落ちて体が崩れる。崩れた体は元に戻らず、

そのまま砂の様になって風に流れて消えていく。

そして法子は完全に消えた。

魔王を倒したという功績を残し、英雄という称号を得て、法子は消えた。

時は戻って、法子が魔王へ駆け出した直後、

法子は魔王を睨みつけた。その巨体に圧倒されぬ様に力を込めて法子は試しに剣撃を飛ばしてみた。遙か遠くの魔王の脛に当たるが損傷を与えられた様子は無い。まともにやっても勝てなそうだ。

魔王の巨大な拳が迫って来た。横に跳んで逃げる。爆発が起こる。だが煙が晴れた後、拳が振り下ろされた場所を見ても破壊の跡は無い。何かの魔術だろうか。考えるが分からない。分からないから考えても仕方が無い。

魔王の周りを光球が舞い始め、それが法子へ降り注いできた。魔力が込められている様には見えない。牽制だろうか。用心してそれを避ける。避けた先に、また拳が迫ってきた。拳には恐ろしい位の魔力が込められている。食らえば死ぬ。始めから死ぬ気の法子は冷静に、剣に込めた魔力を開放して爆発させて、その爆風で後ろに飛んだ。

振り下ろされた拳の皮膚が伸びて、無数の蔦になって法子へ襲い掛かって来た。やはり膨大な魔力が込められている。避けきれそうもない。法子は避ける事を止めて、刀に消滅の概念を付与して蔦を切り落とし消滅させた。蔦に繋がる皮膚も僅かに消滅させる事が出来たが、それだけだった。本体ごと消すには魔力が足りなかったか。逆に言えば、魔力を込めれば効くという事だ。

また光球が降り注いできた。更に魔王の口に光が集い、巨大な光球となった後、法子へ向けて射出された。避けきれずに、光球の一つが腕に当たった。だが当たっただけで痛くもかゆくもない。

何となく分かった。恐らくまだ魔王はこの世界に完全に慣れた訳ではないのだ。動きは何処かきこちない。それに遅い。魔力を外部

に放てば即座に発散してしまう。だから光球に威力が無い。

魔王の周りにまた多数の光球が生まれ始めた。数はどんどん増えて、辺りをまばゆく照らす。幾つあるのか数えきれない。少なくとも避けきれぬ数ではない。だが避ける必要が無い。

更に分かった事がある。どうやら魔王は人間と同じ様な場所が弱点らしい。だとすれば、首を飛ばして頭を潰せば相当の痛手を与えられる。

後はどうやって頭の部分まで上ったものか。腕が横から迫って来る。法子はそれを飛んでかわし、腕の上に着地した。丁度良いと思つて、法子は腕を伝つて上っていく。

これで頭まで近付けると思っていると、途中でまた皮膚が伸びて鳶状になり襲い掛かって来た。法子は慌てて跳び上がり空中に躍り出る。

どうやら体を伝つて行くのは困難だ。どう近付いたものか。あまり制御の利かない空中に浮いていたくはない。狙われれば避けられない。

魔王の口から光球が射出され、法子へ向かってきた。何とかすれば避けられるかもしれないが、所詮威力の無い攻撃だ。刀で切つてしまえば良い。

法子は刀を構え、

「悪いけど、ここまでだ」

タマの言葉が頭に響いた。途端に体中から力が失われた。光り輝いていた髪はただの金髪に戻り、服装も丈の短いドレスの様な衣装に戻ってしまった。

法子が発動させていた生命を魔力に変換する魔術をタマが止めた所為だった。

どうして？ 法子の頭に疑念が湧く、まさか裏切られた？ タマちゃんは魔王の仲間？

詮索している余裕は無い。光球はすぐそばまで迫っている。さっ

きまでの大幅に強化された状態ならともかく、力を失った今食らえばひとたまりもない。

何とか刀に魔力を込めて、光球を切り付けた。焼け石に掛ける水よりも効果が無かった。光球が迫って来る。目の前の空間が歪んで光球を包み込んだ。だが止めきれずに突き破られ、光球が法子にぶち当たり爆発する。

吹き飛ばされた法子は瓦礫となった地面に叩きつけられ何度か跳ねて最後は瓦礫の合間に埋もれて止まった。変身が解ける。血を流す法子はぼんやりと遠くの魔王を見つめた。

「どうして？」

「君は良くやったよ、法子」

「どうして？」

「目的は果たした。だからもうお終いだ」

遠くの魔王は無数の光球を生み出している。魔王の目は法子を睨んでいる。ああ、殺されるんだなと法子は思った。

その時、魔王の体が爆発し、背中に巨大な槍が突き立ち、更に二筋の光線が魔王の体を貫いた。

唐突な展開に目を疑っていると、人の声が聞こえた。

「居た！ こつちだ！」

しばらくして法子の顔を覗き込む者がいた。髭面の青年と如何にも善良そうな中年女性。

「まだ生きてる！」

「早く運び出しましょう」

「運が良かったな、嬢ちゃん。助かるぞ」

助けが来たんだと分かった瞬間、法子の意識が途切れた。

ニュースで魔王が現れた事件を報道していた。

テレビの画面には魔王が建物を崩した瞬間の映像が流れている。

ちなみに店内に備え付けられていたカメラは騒動の所為で壊れてしまっていた。更に外部に転送された監視カメラの映像も、奇怪な草

叢の風景が映っているだけの壊れたデータになっていた。

ニユースキャスターが事件の詳細を伝えている。

何でも、あれだけ強大な魔物が出現したのに死者が出なかった事は歴史的な快挙らしい。

ニユースによればこうだ。法子の住む町の近隣で、強力な魔物の出現が増加していた事を鑑みて、政府は一週間ほど前から魔物討伐の資格を有する者達を辺りに常駐させていた。特に人と魔力が集まりやすい場所を重点的に監視していて、現場となるシヨツピングセンターもその一つだった。

事件発生直後すぐさま連絡が行き亘り、あらかじめ決められていた手順で、まずは人々の安全を確保、ここに嬉しい誤算があつて、登録されていないアマチュア変身ヒーロー二人が資格を有するプロよりも先に、率先して人々を逃がした為に、被害が最小限にとどまったという。そうして人々を逃がし切った後は、出現した魔物へ遠距離から一斉に攻撃が加えるという手はずだったのだが、ここに一つ悪い誤算があり、逃げ遅れた民間人がまだ一人居た、その所為で無差別となってしまう遠距離からの攻撃は行えず、突入して救出しつつ魔物を倒すという作戦に変更となり、その準備をしている内に魔物が巨大化、更に暴れ始め、建物が崩壊し始めた為に、危険と判断して、強行突入を決行。結果として取り残されていた一人を救出、魔物は帰された。

何にせよ、シヨツピングモールが崩壊したものの、魔物による被害だけを見れば逃げ遅れていた一人と無理な突入作戦で怪我を負った魔物従事者数人のみ。全員、あまり重い怪我では無かった。これは快挙であり、如何に魔物に対する

要約すれば、法子の行動は全て無意味だったという事だ。いやそれどころか邪魔だった。法子が居なければもっと早く、そして安全に魔王を倒せたはずだったから。

テレビの画面では今回一番の活躍をした二人のアマチュア変身ヒーローがインタビューを受けていた。あの魔法少女と黒い騎士だっ

た。事件直後の二人は疲れた様子だが、笑ってカメラに向かってい

る。二人は日本中に顔を知られ（と言っても片方は兜で顔を隠しているけれど）、憧れの対象となる。人々を救った英雄として。

一方で二人の背後に救急車へ乗せられようとしている少女が映っている。逃げ遅れた少女だが、テレビを見ている者達は、それに対してほとんど何も思わない。精々大変だったんだなあと軽い同情を送る位である。勿論、英雄視なんてするはずがない。

変身が解けていた事に少女は幸運を噛みしめるべきだろう。もし変身した状態でテレビに映り、変身ヒーローだと知られば、視聴者からは先走って迷惑をかけた馬鹿者と罵られていたであろうし、更に以前の悪行を知っている者達からはもっと強い非難を浴びせられたであろうから。

特に救急車に乗せられる際の、一瞬見せた笑顔に対して。

その時少女は英雄になる夢を見ていた。それが夢だと知らぬまま。

その笑顔を嫌悪した少女は、テレビを消して病院のベッドに潜り込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3396z/>

Then LonelyGirl Dreams of Wonderful Hero!

2011年12月11日18時56分発行